魔法少女リリカルなのは　バカの参戦Ⅱ

セイイチ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ＪＳ事件から三年。

ミッドに移住した吉井明久は家庭を持ち、平和で穏やかな幸せな暮らしを送っていた。

そんな明久だったが、ある日一人の男の子を保護した事により、またもや大きな事件に巻き込まれる事となる。

この男の子は何者なのか？

明久が巻き込まれた事件とは？

何も知らずに事件に巻き込まれた明久はどうなるのか？

今ここに吉井明久物語、第二章開幕！

※本作は二部作品です。第一部で章管理を適当に使用してしまったり、話数が多くなりすぎるの嫌ったりしたので、第二部として、新しく新規小説として投稿しますが、第一部の続きである事をご了承ください。

※この物語はオリジナルの話です。時系列で言うとサウンドステージＸよりも以前の話になっていますが、Ｘに繋がるような辻褄合わせなどはしませんので、Ｘはない物と思って下さい。

※さらに本作ではｖｉｖｉｄが始まる前の話ですが、少しｖｉｖｉｄで起こるはずの出来事も前倒しして登場します。

例、コロナ、リオが登場するなど

※最後に、本作品は自己満足作品です。

そう言うのに耐えられない方は戻る事をおススメします。

目次

第一話 ―― 1
第二話 ―― 12
第三話 ―― 25
第四話 ―― 41
第五話 ―― 58
第六話 ―― 74
第七話 ―― 90
第一部キャラ紹介？　※本編とは関係ありません ―― 100
第八話 ―― 102
第九話 ―― 109
第十話 ―― 118
第十一話 ―― 129
第十二話 ―― 142

第一話

ＪＳ事件から三年。
ここはミッドチルダの首都クラナガンのとある家の中。
「朝ご飯できたよー。二人とも早く降りてきてー」
「はーい！」
「んー……」
わたしはママに呼ばれて、リビングへと足を向けました。
「おはよう、ヴィヴィオ。今日も朝から特訓してきたの？」
「毎日良く頑張ってるよね？」
わたしがリビングまで行くと、そこにはフェイトママとなのはママの二人が朝ごはんを作り終えて、先に席に座ってました。
二人は９歳の頃からの仲だそうで、今でもすっごい仲良しで、二人ともヴィヴィオの大切なママです。
今日も二人で仲良く一緒に朝ごはんを作ってくれたみたいです。
「うん！　朝は軽くランニングくらいだけどねー」
「日課か……。いつも早起きして、毎日走りに行くって結構大変でしょ？」
「そうでもないよ？。もう日課になってるから、苦でもないしね？」
「うん、うん。ヴィヴィオの日課のおかげでヴィヴィオは早起きしてくれるから、私達も楽だよね～。我が家には誰かさんみたいに朝ごはんだって呼んでるのに、まだ起きてこない人もいるからね」
そう言う、なのはママは少し呆れてました。
隣ではフェイトママも、なのはママに同意するように何度も頷いています。
「あ、あはは……。今日も、いつも通り？」
「うん。相変わらず、朝は苦手みたい」
「悪いんだけど、今日もヴィヴィオが起こしてあげてくれる？」
二人から、まだ寝てる人を起こしてくるように頼まれました。
実はこれも私の日課だったりします。
「もうー、しょうがないないなー。じゃあ、ちょっと待っててね？

起こしてくるから……」
「うん。お願いね？」
わたしもママ達二人と同じように、呆れたような顔をしながら返事をしましたが、内心ではちょっと楽しかったりもします。
いつも起きるのが遅くて、少しバカで、よくママ達に叱られている人ですが、その人がそこにいるだけでヴィヴィオ達家族の皆を笑顔にさせてくれる人だからかな？
でも一番の理由は、きっと
「パパー！　皆待ってるよー！　早く起きてー」
ヴィヴィオの大好きなパパに、こうして一番最初に会えるからだと思います♪
そんなわけで、吉井ヴィヴィオ。
今日も一日絶好調です♪

☆

僕、吉井明久は夢を見ていた。
自分でもこれが夢だと言う事には気づいている夢だった。
その夢では、なにやら良く分からないけど、気づくと我が四人家族に一人家族が増えていた。
この家に男は僕一人しかいないからか、ヴィヴィオより少し年下くらいの男の子が一人増えた五人家族となっていた。
一人男の子が増えてはいるが、それ以外は何らいつもと変わらず、僕は平和で気持ちの良い時間を過ごしていたのだが
「パパー。もう朝だよー。そろそろ起きてー」
僕は身体を揺すられ、無理やり現実に呼び戻される。
どうやら、一人増えていたが夢の中の家族とはお別れの時間が来たようだ。
僕は、心地の良い揺れを感じながらも、愛する愛娘の声で段々と意識が覚醒して行き、遂に完全に夢の家族とは完全に別れて、夢ではない実際の我が自慢の娘の顔が目に映り込んできた。

「ん……。もう朝……？」
「そうだよー。今日も一日いい天気。快晴です♪」
そう言って、ヴィヴィオはカーテンを開けて、僕の顔に太陽と言う光の塊を僕の顔に浴びせた。
「ぐおおおお!!　眩しい！　おのれ太陽！　曇りの日は攻撃力ゼロのくせに、雲一つない快晴の時は毎度毎度、朝一番に攻撃してきおって！　いったい僕に何の恨みが！」
「はいはい。悪いのは起きるのが遅いパパであって、太陽じゃないからね？　と言うか、いつも天気の良い日はそれ言ってるけど、あきないの？」
「そう思うのなら、毎回朝の光を僕にぶつけるの止めてくれないかな？」
そうすれば、こんなに朝から騒がずに済むんだけど？
「えー？　だって、パパがいつもそれやるから、楽しんでると思ってたんだけど？」
「僕はヴィヴィオが楽しんで、朝の光攻撃を僕にしてるんだと思ってたよ……」
やっぱり、会話って大事なんだと改めて思い知らされた瞬間だった。

☆

『次のニュースです。昨日、管理局からの発表で無人世界がまたも消滅した事が明らかになりました。これで管理世界、管理外世界、無人世界から合わせて１２個目の世界が消滅した事になり、管理局では――――』
僕がヴィヴィオに起こされた後、僕等はいつものようにテレビを見ながら四人で朝食を食べ、今日の予定を話していた。
「ヴィヴィオ、今日は始業式だけなんだよね？」
「そだよー」
現在、ヴィヴィオはＳｔ・ヒルデ魔法学院に初等科３年生として

通っている。
そして今日はヴィヴィオの通っている学校の始業式だ。
「なのは達は？　今日も遅くなる感じ？」
なのはは管理局航空戦技教導隊に所属、フェイトも執務官として管理局で働いている。
基本的に二人はヴィヴィオの生活に合わせているため、仕事を遅くまでする事はないんだけど
「うーん。なるべく早く終わらせたいんだけどねー」
「最近は管理局内でもバタバタしてるし、私達はもうじき部署を移動するから、今は忙しくてなかなか……」
最近ニュースでよく見る事件、世界消滅事件が原因で、管理局内も大変のようで、その事件を解決するために元機動六課が再編成されたらしい。
なのはもフェイトもその召集を受けてるから、移動のための準備とか、残ってる仕事の引き継ぎ作業とかで大忙し。
そのため今日も帰りは遅くなるらしい。
「六課再編成か……。懐かしいね。他の皆も招集に応じたの？」
「うん。全員参加だって。準備が終わった人から、どんどん移動を始めてるみたい」
「今はロングアーチ数人と、はやて達八神一家が移動を終えてる見たい。と言うか、明久も元六課なんだから、招集されたでしょ？」
「されたけど、僕は一般人です」
僕はミッドに来てからは管理局ではなく、平日の朝９時から夕方４時までの間、喫茶店を経営している。
本来はヴィヴィオが学校に行って、帰って来るまでの間だけ働くつもりで始めたから、この時間の営業にしていたんだけど、一度ディナーが食べてみたいとお客さんに頼まれて、イタリア料理やフランス料理、スペイン料理なんかを国とか気にせず、適当に出してみたらお客さんが大絶賛。
以来、ディナーをお客さんに頼まれた時だけ色々な国の料理が食べ

られる店として店を開けてるけど、それ以外は普通の喫茶店だ。
小っちゃい店だけど……
「そう言えば、パパって本気になったら強いんだよね？」
「すっごい強いよー。もう反則級だよー。明久君がその気になればミッドだって星ごと消せ……る……かも？」
なのは自分でそこまで言って、何かを思いついたようにフェイトと顔を見合わせた。
「フェイトちゃん、もしかして……」
「多分、私も今なのはと同じ事を考えたと思う……」
二人はそう言った後、急いでご飯を食べて
「ごちそうさま。明久、悪いけど、後片づけよろしく！」
「ヴィヴィオ、気を付けて学校行くんだよ？　ママ達はちょっと思いついた事があるから、先に出るからね？」
二人は慌ただしく、同時に仕事場に向かってしまった。
「え？　あ、うん。了解……」
「いってらっしゃい……」
僕とヴィヴィオは二人のあまりの速さに驚いて、二人が出て行く直前にそんな返事をする事しかできなかった……。
「……とりあえず、ご飯食べちゃおうか？」
「……うん」

☆

僕は朝食を食べた後、ヴィヴィオを見送ってから自分の店に来ていた。
開店直後は常連のお客さんで賑わい、その後は少し落ち着いて、またお昼には混みだして忙しくする。
そんな事を繰り返して、ようやくお昼のピークを終えて、店内には常連である近所の主婦の方々だけとなり、気を抜いていると
カランカラン～♪
またもお客さんが店内に入ってくる音がする。

僕は少し気を引き締めてから、接待をしようと顔を覗かせると
「あ、パパ。友達と遊びに来たよー」
ヴィヴィオが学校の友達と一緒に遊びに来ていた。
「おかえり、ヴィヴィオ。えーっと、そっちの二人は確か……」
ヴィヴィオの連れてきた友達は二人で、どちらも見覚えがあった。
名前は確か
「コロナちゃんとリオちゃんだっけ？」
「「はい！」」
うん。ヴィヴィオと同じで元気な子達だ。
子どもは元気が一番だね。
「飲み物はオレンジジュースでいいかな？」
「うん。それでいいよー」
「食べ物は？　なんなら何か作ろうか？」
「ううん。ご飯はもう食べて来たから大丈夫。あ、でもお菓子はちょっと欲しいかも」
「了解」
僕はヴィヴィオに頼まれた物を作り、ヴィヴィオ達の所にジュースとクッキーを持っていくと、ヴィヴィオとお客さんが楽しそうに話していた。
『ヴィヴィオちゃんは今日も元気ね～』
「はい！　ヴィヴィオは今日も絶好調です！」
『今日はお友達と一緒にパパの所に遊びに来たの？』
「えーっと、それも少しあるんですけど、今日はちょっと宿題をしようと思って」
『へー。偉いわね～……。ウチの子なんかヴィヴィオちゃん達よりも年上なのに、ちっとも勉強しないのよ？　どうやったらヴィヴィオちゃんみたいな子に育てられるの？　明久君？』
と、ヴィヴィオと喋っていたお客さんは、今度は僕に話しかけてくる。
ヴィヴィオは良くお店に遊びに来るし、このお客さんも常連だから

ヴィヴィオの事は知ってるし、お気に入りだったりする。
その影響で僕もこのお客さんには気に入られ、フレンドリーに話しかけてくるのだ。
「んー、どうなんでしょう？　ヴィヴィオの教育は僕じゃなくて嫁がしてくれてますからねー。僕はそれを見てるだけですから」
むしろ、僕も一緒に教育される事が多々あります。
『ああ。なのはさんとフェイトさんね？　二人ともしっかりしてるからね～。おまけに美人だし』
『明久君、二人には頭が上がらないんじゃないの？』
良く知ってますね？
実際、ケンカとかして勝った事は一度もありません。
『明久君は学生時代って、どんな感じだったの？　やっぱりヴィヴィオちゃんみたいに勉強熱心で、運動もできたの？』
「はは。残念ながら勉強はさほど……ただ、体だけは頑丈だったんで体力はありましたね～」
魔法無しで、校舎の三階くらいから飛べるぐらいには。
『やっぱり？　明久君って、勉強はあまり出来なさそうだけど、運動神経は凄い良さそうだもんね～』
『人は見かけにはよらないって言うけど、明久君のその辺りは見たまんまだったのね～』
それは僕の見かけはバカっぽいって事？
昔からバカっぽい顔とは良く言われたけど、まさか学生を終えてもまだ言われるとは思いもしなかった。
『でも明久君はバカっぽくても、料理は凄く美味しいし、アタシ達小母さんの話し相手にもなってくれて優しいからね～。しかもヴィヴィオちゃんみたいな良い子がいるんだから、少しくらいバカっぽくても大丈夫よね～』
『そうそう。明久君は可愛いお嫁さんもいるんだし、もう心配する事はないものね～。……それに比べて、ウチのバカ息子ときたら――』
この後も、常連さんたちは自分の息子の愚痴を閉店時間まで喋り続

けて、僕は本当に店を閉める４時ピッタリまで捕まったのだった。

☆

「ふぅー。ようやく終わった……。皆、ごめんね？　小母さん達の長話に巻き込んじゃって……」
「あ、いえ！　そんな事ないです！」
「お店の営業時間の内に来ちゃった、あたしたちが悪いんですから……」
コロナちゃんとリオちゃんはそう言ってくれたけど、僕としてそうもいかない。
なにせ、今日の三人は宿題をしに来たのに、話に巻き込んでしまったせいで、三人ともまだ宿題を始めてすらいないんだから……
「おわびに三人が宿題を終わらせ後、パフェをごちそうするよ。なんなら、ここで夕飯を食べて帰ってもらっても良いんだけど、まぁそれはおうちの方が許してくれたらにしよう」
「ほ、ホントですか!?」
「明久さんが作った料理って、噂のあれですよね!?」
僕がそう言った瞬間、二人はもの凄い勢いで、僕に迫ってきた。
噂っていったい、どんな噂なんだろうか？
もし、悪い噂だったら嫌だな……。ここは慎重に噂の内容とやらを聞いて、僕のハートを傷つけるような噂なのか確かめる必要があるな。
なんて、僕は思ってたんだけど
「ねぇ、コロナ？　噂ってどんな噂なの？」
ヴィヴィオは直球で聞いてしまった。
ああ、ヴィヴィオ。
そんな直球で聞いたら、明確な答えが返ってくるじゃないか……
「ええっ!?　ヴィヴィオ知らないの!?　自分のお父さんの事なのに

!?」
コロナちゃんはヴィヴィオが噂を知らない事に驚いていた。
あのー、コロナちゃん？　その噂、本人も知らないんですが？
「リオは知ってるよね？」
「もちろん！　普段は夜やってないのに、土日の夜だけは予約できた人だけ食べられるって言う料理だよね!?」
「うん！　しかも事前に予約できるのも、その週の間だけだから滅多に食べられない幻の料理とまで言われてるのに、ヴィヴィオ知らないの？」
「ええっ!?　そうなの!?　パパの料理ってそんなに人気だったんだ……」
一回頼まれて作って、その後も頼まれた時だけ作ってただけなのに、そんな話になっているとは思わなかった。
実際は予約制とかじゃなくて、本当に頼まれた時だけ、店を貸切にして作っていただけなのに、勝手に予約制になってるし……とは言え、この子達はその噂を信じてしまっているし、僕の不用意な発言で凄い期待感を持たせてしまった。
その期待を裏切るわけにはいかないな……。
「実際はそんなに凄い物じゃないけど、良かったら食べて行ってよ。まぁ、それは宿題をきちんと終わらせて、おうちの方が許してくれたらだけどね？」
「「はい！　全力で終わらせます！」」
「わ、わわ。二人ともイキナリ宿題始めないでよ！　一人だけ置いて行かないでー」
僕が夕飯をごちそうすると言ったら、コロナちゃんとリオちゃんはもの凄い勢いで宿題をやり始めて、ヴィヴィオもそれを見て、慌てて宿題を始める。
どうやら、かなり期待されているようだ……
「ヴィヴィオ、僕はちょっと買い物に行ってくるから、留守番頼んだよ？」

「はーい。あ、ジュースは勝手に飲んでもいいよね？」
「ジュースとクッキーは自由にどうぞ。とにかく留守番は頼んだからね？」
「はーい」
僕は宿題を頑張る皆を見て、料理一つでここまでやる気を出している子達に、適当な料理を振る舞うのもどうかと思い、今日の夕飯の買い物をする事にした。
幸い、今日はなのはもフェイトも帰りが遅くなるから、夕飯はいらないと言ってたから家で作る必要もない。
僕は買い物をするついでに、今日の夕飯に食べようと下ごしらえしていたスープも一緒に取りに帰って、今日の夕食は僕とヴィヴィオも店で食べる事にした。
こうして、家の人に許可を貰ったコロナちゃんとリオちゃんと一緒に夕飯を食べて、二人を家まで送り届けた後、僕はヴィヴィオと二人で我が家に帰り、今日一日を終えるはずだったのだが
「あれ？　ねぇパパ？　家の前で誰か倒れてるよ？」
「え？　こんな時間に倒れてる人なんているわ――――なんで子どもが倒れてるの？」
ヴィヴィオに言われて、家の前に視線を向けると、ヴィヴィオより少し年下くらいの男の子が、我が家の前で倒れていた。
どうして、こんな所で、こんな男の子が倒れているんだ……？
「って、パパ！　暢気にこんな事、話してる場合じゃないよ！」
「あ、そうだった！　何があったか知らないけど、このまま放置しとくわけには行かないから、とりあえず家の中に運ぼう！」
ヴィヴィオの声に我に返った僕が、男の子を背負って、家の中に運ぼうとした時
『ちょっと待て』
どこからともなく男の声が聞こえてきて、僕等は動きを止めて、周囲を警戒しないといけない状況に陥った。
どうやら、僕等の今日と言う一日はまだまだ終わらせてはくれない

ようだ……

第二話

僕が謎の男の子を背負って家の中に運ぼうとした時、どこからともなく声をかけられた。

『ちょっと待て』

その声を聞いた僕とヴィヴィオは、声の主を探そうと辺りを見回してみたが

「あれ？　誰もいない……ねえ、パパ？　今、声が聞こえたよね？」

辺りには誰もいなく、ヴィヴィオが不思議そうにしていた。

確かにヴィヴィオの言う通り、声が聞こえた。

それは間違いない。

そして、その声は明らかに僕等に向けて発せられたものだった。

「……ヴィヴィオ、この子をお願い。それと、しばらくの間隠れてなさい」

「え？　パパ、隠れてろってどういう事？」

「そのままの意味。この子を連れて家の中に入ると、余計に危ない気がするから僕の目が届く範囲で隠れてて」

僕はこの謎の声を聞いて直感した。

ヤバイ。と

ここ1、2年は感じた事がなかったが、数年前は頻繁に感じていた身の危険。

それが今、あの頃とは比較にならない程の大きさで再び僕の全身を襲ったのだ。

『隠れる必要はない。そのガキを置いて、この場から去れ』

「いやだ！　この子、ケガしてるもん！　早く治療してあげないと可哀想だよ！」

謎の声を拒絶するヴィヴィオ。

さっきはテンパって気が付かなかったけど、よく見るとヴィヴィオの言う通り少年は所々に傷を負って、ボロボロだった。

こんなケガをした子を見て、ほっとけないと思ったヴィヴィオの気

持ちは分かる。
けど、相手がどこにいるのかも、どんな奴なのかも分からない時に、その発言は非常に危険だ。なにせ、相手が何をしてくるのかも、何が狙いなのかも、何も分からないんだから。
『そうか。なら力尽くで排除しよう』
「ヴィヴィオ！　ふせて！」
僕はヴィヴィオが叫ぶのと同時にヴィヴィオの周りに意識を集中させて、謎の声が聞こえるのと同時に叫びながらヴィヴィオの側へと駆け寄った。
そして、僕が駆け寄ると同時にヴィヴィオの周囲の一部が歪み、そこから一人の男が現れる。
男は姿を現すと、無言でヴィヴィオに向かって蹴りを放ってきたのだが
ドスッ！
「っつぅ～！　ギリギリ間に合った……」
間一髪、ヴィヴィオに駆け寄った僕が二人の間に割り込み、腕をクロスして、吹き飛ばされないように足腰に力を入れて、何とか防御に成功した。
「お前も邪魔をするのか？」
「まぁ、自分の娘を守るのは当然でしょ？　で、娘が守ろうとしたものを守ろうとするのも父親の仕事だと思わない？」
「娘の教育をするのも父親の役目だろ？　礼儀を教えたらどうだ？」
「ついさっきまで姿を消してたり、子どもに向かって無言で蹴りを入れようとする奴に、礼儀をどうこう言われたくない！」
こんな奴より、ヴィヴィオの方が礼儀正しいと胸を張って言える。
「ふむ。あくまで邪魔すると。なら、お前も消すとしよう」
男はそう言うと、再びを僕等の目の前から姿を消した。
一瞬、このままどこかへ消えたのかと思ったけど、そうじゃない。
さっき感じた、自分自身への警告のような物は、まだ消えていない。
むしろ、さっきよりも危険度は増している気がしてならなかった。

それが気のせいなら良いんだけど、残念ながら僕の危険感知は良く当たる。
そして、今回もおそらく外れる事はないだろう。
「ドラグーン、セットアップ！」
僕は久しぶりに相棒を取り出してＢＪを纏い、両手に剣を構えて完全フル装備になる。
本来、ミッドでは許可された場所以外で、飛行や戦闘を行う事は禁止されてるんだけど今回は仕方がない。
後で、なのはやフェイトに怒られる事になろうとも、今はこれくらいしないと自分の事もヴィヴィオの事も守れない気がする。
それくらい、危険を感じていた。
『マスター、随分と久しぶりですが訓練ですか？』
「久しぶりなのにイキナリで悪いけど実戦！　多分だけど、結構ヤバイと思う！」
本当に久しぶりなのに、出てきて早々戦闘準備ができてるドラグーンは流石だと感心しながら、ついさっきの出来事を僕はドラグーンに話して、敵の位置を察知できないか聞いてみる。
『それでしたら既に判明しています。上です。かなりの魔力を集めているようですよ？』
「上!?」
僕がドラグーンの言葉を聞いて直ぐに空を見上げると、そこにはドラグーンの言う通り、僕に向かっていつの間にか握っていた両手の剣を向けながら魔力を一箇所に集めてる、男の姿があった。
どうやら相手のデバイスも二刀流で、今の状況を考えるに集束砲を僕に向かって撃ってくる気のようだ……
「って、集束砲!?　こんな所で!?」
こんな所で集束砲なんて撃たれたら、僕だけじゃなくここら一帯にも被害が及んでしまう。
具体的には、ここら一帯が更地にされてしまう。
「くそっ！　消えたと思ったら、こんな恐ろしい事考えてたなんてっ……！」

あれに対抗するには、こっちも集束砲を撃つしかない。
しかも相討ちでは爆発を起こして、ここら一帯にも被害が出てしまうため、完全に向こうのパワーを超えた集束砲を撃つしかない。
管理局に入隊しておらず、集束砲どころか戦闘すら満足にできるか分からない僕だけど、今ここで集束砲を撃てる人は僕以外にはいない。
「あー、もうっ！　こんな周りを巻き込むかもしれない状況になるのが嫌で、管理局に入らなかったのに、結局こうなるのかよ！」
僕は文句を垂れながらも、相手のように剣を構えて集束砲を撃つ構えを取る。
どうせ、こうなるなら初めから管理局に入っておけば良かった。
そうすれば、もう少し自信を持って集束砲が撃てたのに……
「って、今さらそんな事を言っても仕方がないか……こうなったら、全力をだすしかない！」
とは言え、こんな地上でユニゾンしてから、集束砲なんて撃ったら、その衝撃だけでここら一帯が消えかねない。
となると必然的に
「ドラゴンドライブ！」
この状態が今の僕の本気と言う事になる。
これでも充分威力は上がるけど、果たしてこれで相手のパワーを完全に上回れるかどうか……
と、僕が不安でいっぱいになっていると
「なっ!?　ドラゴンドライブだと!?　まさかお前、アイツの言っていた奴なのか……？」
男は何故か驚き、なにやら言葉を発して、溜めていた魔力をドンドン散らせていき、遂にはデバイスまで解除してしまった。
と、同時に終始感じていた危ない感じも消える。
何があったか知らないけど、どうやら戦闘は止めてくれるようだ。
「一つ聞く。お前、吉井明久か？」
「そうだけど……。君は僕を知ってるの？」

「名前とその存在だけだがな……。まさか、あのガキがコイツに保護されるとはな……仕方がない（ボソッ）」
男は何か考えながら、ボソボソと独り言を呟き始めた。
いったい何が言いたいんだろうか？
「吉井明久、今はお前と戦う気はない。そのガキはしばらくお前に預けておいてやる」
そう言って男はまた姿を消した。
その光景はまるで、闇に溶け込み消えるかのようだった。
って
「ちょっと待て！　僕の事をどこで知ったのか？　とか、あの子は誰なのか？　とか、君は誰なのか？　とか、色々教えてから消えろ！」
会って早々礼儀がどうこう言った奴が、何も喋らずに消えるってどうなのよ？
一方的に喋るだけ喋って、その後はサヨナラっておかしいでしょ!?
『……お前に教えてやる必要があるのか？　ついさっきまで俺達は戦ってたんだぞ？　つまり敵同士だぞ？』
……言われて見ればその通りだ。
敵に情報を与えるバカはいない。そんなの常識だ。
コイツが僕の事を知っていて、意外とあっさり退いてくれたから、そこまで悪い人じゃないと思い込んでしまったようだ。
けど
「せめて名前くらいは良いんじゃないかな？」
名前くらいは教えてくれて良いと思う。
名前くらいじゃ、何も分かりはしないんだから。
『一番の個人情報だろう？』
「……市街地での危険魔法使用と殺人未遂で、君は既に犯罪者なんだけど、そんなの気にするの？」
法を犯した人が法で守られてる個人情報を主張するのはおかしくないだろうか？
『はは、冗談だ。まぁ、いずれまた会うだろうから、その時に名前は名乗ってやるよ』

「今名乗れよ！　焦らす意味がどこにあるのさ!?」
『安心しろ。単なる俺の趣味だ。意味はない』
「答えになってないんですけど!?」
……
……
……。
あれ？
「おーい。無視ですか？」
……返事が帰ってこない。
「本当に名乗らずに消えやがったよ！　なんなんだ、アイツは!?」
『マスターみたいに失礼な奴でしたね』
「僕はあそこまで失礼じゃないよ!!」
あんなのと一緒にしないでもらいたい。
と、僕がドラグーンに全力でツッコんでいると
「パパ！　いつまでも騒いでないで、こっち来て！　この子、ケガしてるんだってば！」
ヴィヴィオに怒られてしまった。
くっ！　ドラグーンのせいで娘に怒られるとは……
「おのれ、ドラグーン！　変な事ばっかり言うから、ヴィヴィオに叱られたじゃないか！　これで嫌われたりしたらどうしてくれる！」
ドラグーンのせいでヴィヴィオに嫌われたらしたら一生恨むぞ！
どこかの男子校の汗臭いクラブの部室にヴィヴィオが許してくれるまで放置するぞ！
『そんな事言ってるとまた叱られますよ？』
「うる――」
「パパ！　早く!!　早く治療しないといけないの！」
――さいよ……
もう叱られたよ……
僕はヴィヴィオに急かされて、家の前で倒れていた少年を背負って家の中に入り、ケガの治療をした後、なのはとフェイトに先程の事をメールして、少年が目覚めるのを待つ事となった。

☆

僕とヴィヴィオが少年を家に運んで、看病を始めてからしばらくすると、なのはとフェイトの二人が息を切らせて同時に帰って来た。

「あ、ママ達だ！　おかえり～」

「あれ？　今日は遅くなるって言ってたのに、もう帰って来たの？」

確かにいつもより帰って来るのはかなり遅いが、二人が遅くなると言った時は大抵ヴィヴィオが寝てから帰ってきていたから、そう言う意味では二人とも早い帰宅だった。

「た、ただいま。明久にメール貰って急いで帰ってきたんだけど……」

「二人とも大丈夫だった⁉　ケガはない⁉」

「うん。パパに助けてもらったからヴィヴィオは大丈夫」

「僕も特にケガとかはないよ？」

ヴィヴィオに叱られて、心に傷は負ったけど……

「そう。なら、良いけど……あんまり心配させないでね？　ヴィヴィオはまだ子どもなんだし、明久は今朝自分でも言ってたけど、民間人なんだからね？」

「そうは言っても、向こうが勝手に襲ってきたんだから仕方ないじゃない……」

「それでもだよ。明久はいざとなったら無茶ばかりするんだから、危険な事には巻き込まれないように少しは気を付けて」

うぅ……。

六課時代に結構無茶な事もやったから、そう言われると、何も反論できない……。

どうやらフェイトに無茶をしないか心配されるのは結婚しても、六課時代とあまり変わっていないようだ。

「それで？　この子が明久君がメールで言ってた、保護したって言う男の子？」

「確か、家の目の前で倒れてたんだよね？」

「うん。家の目の前で放置するわけにもいかないし、ケガもしてたから、とりあえず家の中に運んで看病してたんだ。そっちで何か分かった？」
　さっき二人にメールした時、少年を保護したと言う話と一緒に、最近ここらで次元震が起きたり、捜索願いが出ていないか確認してもらえるようにお願いしたから、僕は何か分かったのかと思ったんだけど
「ううん。何も分からなかったよ。最近、次元震は全く起きてないし、迷子の捜索願いや、行方不明者の捜索願いとかも調べてみたけど、何もなかった」
　フェイトが調べてくれた限りでは、何も手掛かりは得られなかったようだ。
「と言うか、イキナリ襲ってきた人がこの子の保護者だったって言う可能性はないの？」
　なのはの疑問。
　確かに、この子を保護しようとした途端に、アイツが現れたんだからこの子の保護者がアイツと言う可能性は捨てきれない。
　けど
「それはないと思うよ？　子どもがケガしてるのに、治療しようとしてるヴィヴィオに攻撃をしようとした奴だよ？　そんな奴が保護者なわけないよ」
　それだけはないと思う。
　子どもがケガをしていて、それを治療しようとしてくれる人をイキナリ襲ってきたんだ。
　そんな奴が保護者なわけがない。
　第一、現れた当初から姿を隠して登場するなんて怪しすぎる。
「ん～、だとしたら、その襲ってきた人は何が目的だったのかな？
この子を追いかけて来て、殺す気だったとか？」
「ええっ!?　ママ、発想が怖いよ！」
「ち、違うよ！　可能性の一つって事だよ!?」
「それでも怖いよ！」
　ヴィヴィオはそう言ってるけど、実際なのはの考えは一番可能性が

高い。
仮に殺す気はなかったとしても、集束砲を撃とうとしたって事は、この子を傷つけるのに抵抗はないと言う事になる。
アイツの目的が何なのかは分からないが、この子の事を何とも思っていないのは確かだ。
「まぁ、襲撃者の目的が何だったにせよ、この子が目を覚ましたら、少し話を聞く必要があるね」
「だね。話を聞けば、色々と分かるだろうしね」
あの襲撃者が誰なのかとか、アイツの目的が何なのかとか色々と判明するだろう。
フェイトは現役で執務官として働いてるから、話を聞くのとか得意だろうし。
「うん。けど、あまり期待はしない方が良いと思うよ？　多分、この子も分かってない事の方が多いと思うから……」
「え？　そうなの？　襲撃者の事を知らないかもしれないって事？」
僕はてっきり、全部分かると思っていたんだけど、どうやらフェイトは分からない事の方が多いと思っているようだ。
「それもあるけど……まず根本的にこの子は小さ過ぎるから、例え襲撃者の事を知っていたとしても全部は理解できてないと思う」
「そっか……じゃあ、あんまり期待はしない事にするよ」
見た目７、８歳かな？
確かにフェイトの言う通り、こんな子が見たり、聞いたりした事を全部理解してるとは思えない。
２０歳になった僕でも無理なんだから、こんな子ができるはずがない。
むしろ、されたら僕が傷つく。
と、僕等がこんな話をしていると
「んっ……あ……れ……？」
さっきまで寝ていた少年が目を覚ました。

「あ、起きた？」
「え？　あ、うん……」
目を覚ました少年は少し戸惑っているようだ。
まぁ、何があったかは知らないけど、目を覚ましてイキナリ知らない場所にいて、知らない人がいたら戸惑うのも無理はないだろう。
と言うわけで
「まずは自己紹介から始めよう！」
僕は少しでも少年から緊張を取り除こうと、明るく振る舞った。
「僕は吉井明久。で、右から順番に」
「吉井なのはです」
「フェイト・Ｔ・吉井です」
「吉井ヴィヴィオです♪　初等科の３年生です。アナタは？」
僕等が順番に自己紹介をした後、ヴィヴィオが気さくに話しかける。
少年は僕等が挨拶した時よりも、ヴィヴィオに話しかけられた時の方が安心しているように見えた。
やっぱり、子ども同士だと、緊張したりする事はないようだ。
「僕は……多分、レオって名前だと思う……」
「多分なの？」
「……うん。多分……」
自分の名前なのになんで多分？
と、僕が疑問に思っていると、ヴィヴィオも同じことを思ったようで、レオ（と思われる）に質問する。
「どうして多分なの？　自分の名前なのに」
「……分からないんだ。頭の中にレオって言葉しか出てこない。だから、僕の名前は多分レオ……だと思う……」
どうやら、レオには記憶がないようだ。
これではフェイトの予想通り、レオから何か聞く事は無理なようだ。
とは言え、管理局の人間としては、このまま何も聞かない訳にはい

かなかったんだろう。
フェイトがレオとヴィヴィオの会話に入って行き、フェイトはダメ元でレオに質問をしようとしていた。
「ヴィヴィオ、レオ、ちょっといいかな？」
「うん。いいよー」
「っ！　……」
だが、レオはフェイトが話しかけると、ヴィヴィオの後ろに隠れてしまった。
「レオ？　どうしたの？」
「……この人、大丈夫……？」
どうやらレオは怖がっているようだ。
笑顔で優しそうに近づいて行ったフェイトに対して、あんなに怖がるなんて……
今、レオが怖がらずに普通に話せるのはヴィヴィオだけのようだ。
「大丈夫だよ、レオ。フェイトママはヴィヴィオのママだし、なのはママも明久パパも皆優しいから、怖がる事なんて、何もないよ？」
「……本当？」
「うん！」
レオはヴィヴィオに説得されると、少し悩んでから、ヴィヴィオが一緒ならフェイトの話を聞いても良いと言い出して、そこからフェイトとレオ、ヴィヴィオの三者で事情聴取が始まった。
まぁ、事情聴取と言っても、子ども相手だし、簡単な質問をするだけの要は質問タイムのようなものだけど……
「じゃあレオ。まず一つ目の質問ね？　保護者の方、つまりお父さんやお母さんがどこにいるか知ってる？」
「……」
「レオ？　大丈夫だから、フェイトママとお話ししてくれないかな？」
「……いない。僕はずっとひとりぼっちだったから……」
……なんだこの変な事情聴取は？

フェイトが質問して、レオが無視、ヴィヴィオがレオにお願いしてレオが質問に答える。
まるでヴィヴィオと以外、話したくないようだな……
「……それは寂しいね……」
「……」
再び黙りこむレオ。
これはフェイトも相当やりづらいだろう。
僕だったら、もう諦めてるレベルだ……
でもフェイトは
「えっと……じゃあ、次の質問するね？」
諦めたりはしないようで、質問を続行する。
こんな状態で、まだ続けられるフェイトを僕は純粋に凄いと思う……
「どうして倒れてたの？」
フェイトが質問すると、レオは再びヴィヴィオの顔を見る。
それに気づいたヴィヴィオが頷いて、そこでようやくレオが質問に答える。
ホント、見てるだけでも面倒臭いプロセスだ……
「……逃げて来たから」
「逃げて来たって……どうして？　何かされたの？」
「……いっぱい叩かれて、よく分からない事ばっかり言われたから……それに、ドクターから逃げないといけない気がしたから……」
それはつまり虐待されてたって事だろうか？
で、本能で危険を感じたって事なのかな？
「ドクター？　……ねぇ、レオ。ドクターって、レオを襲おうとしたした人？」
え？　ドクターって襲撃者の事だったの？
僕の見た感じではドクターと言うより、どちらかと言うと戦士だったような気がするんだけど……？
「違うよ？　あの人とは話した事ない……」

やっぱり違ったようだ。
「じゃあ、襲ってきた人とドクターの二人から、レオは逃げてきたって事？」
「その人とドクターからもだけど……二人じゃないよ？もっといっぱいいた……」
「大勢？　レオが逃げてきたのは大勢の人からって事？」
「……うん。いっぱいいた……」
襲撃してきた男に、ドクターと呼ばれている謎の人物、謎の人物達……
どうやらレオを襲ったのは個人ではなく、組織だったようだ。
この後も、フェイトが色々と質問をしたが、レオは終始分からないと言っただけで、特別な事は何も分からなかった。
分かった事はレオの名前、レオが逃げてきた事、レオが逃げてきたのは個人ではなく組織である事。
けど、僕はこれだけで何となく直感していた。
「これはもう、確実になんか起こるな……」
レオを保護した事で、これから僕はレオと謎の組織の連中が引き起こす、何らかの事件に巻き込まれるだろうと……

第三話

僕がレオを保護してから一週間たったある日の平日。
僕は大いに困っていた。
その理由は
「おーい、レオ～」
「……」
「レオってば～」
「……」
「無視は良くないと思うんだけどな～」
「……」
このように、レオと一切コミュニケーションが取れないのだ。
「今日の夕飯は何が食べたい？」
「……」
何を言っても無視。
常に僕と一定の距離を保ち、常に警戒されていた。
おかげで僕はいつも独り言を言ってるような気分にされる。
これは正直つらい。
レオが反応する事と言えば
「今日はヴィヴィオ帰って来ないんだって（ボソッ）」
「っ!?　……」
「嘘だよ」
ヴィヴィオに関する事だけだ。
それも言葉は発さずに、一定の距離をあけたまま、さめざめと泣きだすだけだ。
昔から子どもには好かれる方だったから、子ども相手にこんな状況に陥るのは生まれて初めての事だ。
そんな僕に取っては、レオがいるからと、店を開けずに家で待機してるのは非常に辛い時間だった。
「……ねえ、レオ？」
「……」

ダメだ。いくら話しかけても反応してくれない……
と、僕が困っていると
「ただいま～」
「「お邪魔しまーす」」
ヴィヴィオがコロナちゃんとリオちゃんを連れて帰って来た。
おお、ヴィヴィオ！　ようやく帰って来たか！
僕はようやく辛い時間が終わると、喜んだのだが
「おかえり！　ヴィヴィオ姉ちゃん！」
レオは僕よりも喜びが大きいようで、帰ってきたばかりのヴィヴィオにすぐさま抱き着いた。
「わっ！　もうー、いきなり飛びついてきたら危ないっていつも言ってるでしょ？」
「うん！　ごめんなさい！」
「全然分かってないし……」
レオはあれから、僕にはちっとも心を開かないのにヴィヴィオの事はどんどん慕っていき、今ではヴィヴィオの事をお姉ちゃんと呼び、ヴィヴィオが学校から帰って来ると直ぐに抱き着くのが日常になっていた。
「あはは。相変わらず、レオはヴィヴィオにべったりだね～」
「もう本当の姉弟みたいだよね～」
ヴィヴィオがレオの事を紹介したから、コロナちゃんとリオちゃんもレオの事は知っている。
しかも
「ほら、レオ？　二人にちゃんと挨拶は？」
「うん。……コロナさん、リオさん、こんにちは」
「「こんにちは」」
二人ともヴィヴィオ程ではないが懐かれていたりする。
僕には全然心を開いてくれないのに……
とまぁ、こうして落ち込んでも仕方がないので
「二人ともいらっしゃい」
僕は明るく、コロナちゃんとリオちゃんに挨拶する。

「あ、明久さん。お邪魔します」
「今日もレオの子守ですか？」
言葉のキャッチボール。
普段は何気なく行っている行為だけど、ちゃんと会話が成立するって素晴らしいな……
感動で涙が出そうだ。
「うん。でも、相変わらずレオは口を利いてくれないんだけどね？」
「あー、レオは相変わらずなんですね……」
「私達とはお話ししてくれるのに、なんででしょうか？」
それは僕が教えてほしいくらいだ。
昔から子どもには問答無用で好かれてたのに、何故かレオからだけ避けられてるんだよね……
「パパが何かしたからじゃない？　ママ達とは少しずつだけど喋るようになってきたじゃん」
確かにヴィヴィオの言う通り、なのはとフェイトは少しずつレオと話せるようになってきてるから、僕だけがレオと話して貰えないわけだから、何かしたと言う可能性も大いにあるだろう。
けど
「何かしたかな……」
僕には何かした記憶が一切ない。
むしろ襲撃者から助けたはずなんだけどな……
「ってパパは言ってるけど、レオは何かさられた記憶はある？」
「ない。……でも、あの人は怖い……」
何もしてないのに怖がられる僕って、いったい……
「あ、明久さん、大丈夫ですよ！」
「私達は怖いとは思ってませんから！　むしろ優しくて良い人だと思ってますよ？」
落ち込む僕を励ましてくれる二人。
なんて良い子達なんだ。
少しはレオにも見習って欲しいものだ……
「ヴィヴィオ姉ちゃん、遊ぼう」

言ってるそばからこれだ。
僕を無視して、ヴィヴィオの事しか見ていない。
誰のせいでコロナちゃんとリオちゃんが、気を遣ってくれたのか分かってるんだろうか？
と、僕がレオの事で頭を悩ませていると
『マスター、メッセージを受託しました』
ドラグーンからメッセージが届いたと声を掛けられる。
「メッセージ？　なのはかフェイトから？」
今、なのはとフェイトの二人は元機動六課のメンバー召集に応えて、新生機動六課が職場となっている。
そのため、事件が解決するまでの、しばらくの間は２４時間勤務となっており、この家には帰って来ず六課の宿舎に住んでいる。
だから、今送られてきたメッセージは二人の内、どちらかが近況報告などで送ってくれたものだと思ったんだけど
『いえ。差出人不明です』
どうやら違うかったようだ。
差出人不明って事は僕の知らない人だろうか？
でも、それだと何で僕の端末にメッセージなんて送って来るのか分からない。
差出人不明のメッセージ。なんとも不気味だ……
『マスター開きますか？　このまま開かなくては、誰が何の目的で送って来たのか分かりませんよ？』
「……そうだね。誰が送ってきたのかは知っときたいしね」
それで迷惑メールとかなら、無視すればいい事だしね。
『では開きますので、ご自分でご確認ください』
そう言って、ドラグーンは送られてきたメッセージを映し出した。
えーっと？
『この度は突然の連絡ですみません。
今回、連絡させてもらったのは他でもありません。
アナタが何故、機動六課メンバーの召集を拒否したのか知りたい

からです。
一度直接会って、お話しをさせてもらいたいので、今からアナタの家の近くの公園に来てください。
尚、拒否された場合は後日、ご自宅の方にお伺いする事になりますので、そのつもりで

新生・最高評議会秘書、エレン・ミシェル』

……これはいったい、何の冗談だろうか？
そもそも僕は管理局の人間じゃないんだから、こんな事を言われる筋合いはないんだけどな……
と言うか、エレン・ミシェルって誰？　新生・最高評議会って何？
『その秘書とやらは知りませんが、新生・最高評議会と言うのは、管理局のトップの事だと思いますが？』
「そうなの？　じゃあ、なんで新生？　前の最高評議会はどうなったの？」
『……知らないんですか？　三年前に起きたＪＳ事件で、前最高評議会のお三方が亡くなられて、今では管理局の実質的なトップの役職として、新生・最高評議会ができたんです』
……どういう事？
『マスターにも分かるように言うと、最高評議会と言うのは陸と海の全部隊のトップだと言う事です』
「いやいやいや。ちょっと待って。そう言う事じゃなくて、最高評議会の人が死んでたってどういう事？」
『ああ、それは超機密事項でしたね。忘れてました』
「待て。さらに待て。なんでドラグーンはそんなこと知ってるの？」
僕でも知らない超機密事項をなんでドラグーンが知ってるんだ？
僕がその事を知らないんだから、ドラグーンだって知る手段はないはずなんだけど……
『ハッキングしました。ザボルグさんの力を借りれば楽でしたよ

？』
おい！　さらっと恐ろしい事を言うな！
それバレたら僕が怒られる奴でしょ!?
主の許可も無しにコイツはなんて事をしてるんだ!?
『それと、念のために言っておきますが、ＪＳ事件後、地上本部の事実上のトップだったレジアス中将が事件に絡んでいた事が、レジアス中将の死後に発覚して、それから今後はそう言う事が起こらないように、最高評議会が管理局全体のトップの役職になったそうです。これは普通に公式に発表されてますね』
「僕に取っては二個目はどうでも良いよ！　どう言う経緯で、最高評議会が管理局全体のトップになったのかなんて、微塵も興味がないよ！　それよりも、ハッキングってどう言う事なのさ!?」
『そのまんまの意味ですが？　ザボルグさんに雷の力を利用すれば、ハッキング等も楽にできるかな？　と言う好奇心でやってみたら、とんでもない事実を偶々知っただけですから』
偶々で管理局の超機密事項を知る事になった僕っていったい……
多分これ、なのは達も知らないと思うんですけど……？
『まぁ、ハッキングは仕方ないですよね？　秘密にされたら余計に知りたくなるのが人情ってものですよね』
「前から言おうと思ってたけど、随分自由なデバイスだな！　それと、君はデバイスであって人じゃないでしょ!!」
『じゃあ、ＡＩ魂ですかね？』
「お前以外で、そんな勝手な事をする奴はいないよ!!」
他の皆のデバイスは、ちゃんと主の言う事を聞くんだから、ドラグーンだけが変わってるのは間違いない。
そして他のデバイスは好奇心のためにそんな事はしない。
『頼もしいでしょ？』
ハッキングまでできるとか、優秀なデバイスなんて物じゃない。もはや兵器だ。
頼もしいとかじゃなくて、純粋に怖い。

『まぁ、一度やったら好奇心は満たされたので、もうしませんから安心して下さい』
「……ホントに」
『はい。案外簡単でしたので』
やらない理由が一々怖い。
ホント、とんでもない奴だ……
「……お願いだから、僕を巻き込まないでね？　嫌だよ？　デバイスが暴走して捕まるとか絶対嫌だからね？」
『その辺は大丈夫です。マスターが喋らなければ、誰にもバレるような事はありませんから』
なんて自信なんだ……
管理局の超機密事項を調べられるだけでも驚きなのに、絶対にバレないと言い切れるなんて……
『と、大分話が逸れましたが、マスターはその秘書とやらに会いに行くんですか？』
「……行くよ。とりあえずは」
僕が行かなくて、なのはやフェイトに迷惑が掛かったら困るしね。
二人とも管理局で、あんなに頑張ってるのに、僕が二人の迷惑になるような事をするわけにはいかない。
と言うわけで
「ヴィヴィオ」
「はーい。……どうしたの？　パパ」
「ちょっとだけ外行ってくるから、少しの間だけレオの事頼める？」
僕は詳しい事情は話さず、出かける用ができた事をヴィヴィオに伝えた。
「頼めるも何も、パパが家に居たって、レオはヴィヴィオの所に来るんですが？」
うん。言われてみれば、その通りだ。
僕はレオの面倒はほとんど見てなかったね。
避けられてるから……
「まぁでも、一応了解。パパが帰って来るまではヴィヴィオが責任

を持って、レオの面倒を見ておきます♪」
ヴィヴィオはウィンクをしながら、任せておけと言ってくる。
ホント、我が娘ながらしっかりした子だ。
「なので、パパは安心してお出かけしてきてください」
「ごめんね？　直ぐ近くにいるから、何かあれば直ぐに戻って来れると思う。何かあれば連絡してね？」
一応レオは変な組織から脱走してきてる身だ。
奴らの目的が何であれ、レオをもう一度襲ってくる可能性は大いにあるだろう。
「平気だよ。ママ達のおかげで、レオの護衛のために管理局の人達が近くで待機してくれてるんでしょ？　なら、パパが居なくても大丈夫だって」
「それでもだよ。何が起こるか分からないんだから、僕が戻ってくるまでの間は注意しといて」
「うーん。大丈夫だと思うんだけどな……。まぁ、パパを心配させたくはないし、注意はしておくよ」
「うん。ありがとう。なるべく早く戻ってくるから、それまでよろしく」
「はーい。いってらっしゃい♪」
僕はヴィヴィオに見送られて、家を出る。
レオを保護した翌日から、なのはとフェイトの二人が管理局にレオの護衛を要請してくれていた。
そのおかげで現在、この近辺には管理局の魔導師が数人配置されている。
「まぁ、もしレオが襲われても、局の人が守ってくれるよね？」
もし無理でも足止めくらいはしてくれるだろうし。
『まぁ、直ぐに連絡をくれれば、マスターもレオさんの護衛ができるでしょう。……ですが』
「分かってるよ。あんまり時間は掛けないよ。それこそ何が起こるか分からないからね」
僕はドラグーンと会話しながら、急いで家から徒歩3分の目的地へ

と向かったのだった。

☆

僕が公園に着くと

「失礼。間違っていたらすみません……アナタが吉井明久さんですか？」

メガネを掛けていて、隊服を着ている、頭の良さそうな一人の女性に声を掛けられた。

「は、はい。そうですけど……」

「申し遅れました。先程連絡させていただいた、エレン・ミシェルです。エレンと呼んでいただければ」

どうやら、この頭の良さそうな人が僕を呼び出した人のようだ。

「はぁ、どうも……」

とりあえず頭を軽く下げる僕。

一応、管理局でも偉い人の秘書をしてるみたいだから、これくらいは当然だろう。

本来、僕は管理局とは関係ないはずだけど……

「来ていただいて早々申し訳ないんですが、これでも忙しい身なので、早速本題に入らせてもらっても構いませんか？」

忙しいのなら、最初から来なければいいのに……

まぁでも、早く終わらせたいのは僕も一緒だ。

ここは黙っておこう。

「……ありがとうございます」

エレンさんは僕の無言を肯定と受け取り、本題とやらを話し始めた。

「吉井さん、率直に言います。六課に入ってください」

どうやら本題と言うのは、メッセージでもあったように六課に関する事のようだ。

「今回の召集は吉井さん以外、全員の方が承諾しています。あなたは何が気にらなくて拒否するのですか？」

「いや、何が気に入らないとかじゃなくて、僕は民間人なんですが？」
そもそも六課が担当する事件は、次元世界全体に関する事件だ。
管理局の人間じゃない僕が、入って何かの役に立つとは思えない。
「それは存じております。ですが、アナタは三年前のＪＳ事件の際には、機動六課に所属していて〝ゆりかご〟の撃墜に大きく貢献したではありませんか」
「そう言われても、あの時は色々と事情がありまして……」
あの時は急にミッドチルダに転移させられて、帰る方法が分からなかったから六課に入っただけだし、その後戦ったのもヴィヴィオを助けたかったからだ。
それに〝ゆりかご〟の撃墜を成し遂げたのは、なのはとヴィータの二人だし……
「今回も相応の理由があると思いますが？　それとも、次元世界が消滅してる事件を解決するのに、自身が動くには値しないと？」
「そう言うわけじゃないですよ？　あ、いや。でも、逆に僕程度の力じゃ役に立たないと思いますよ？　何度も言いますが、僕は民間人ですから……」
「元龍の力を扱えるアナタは普通の民間人とは違うでしょ？」
「そう言われても、実際に僕には何の力も……ん？」
あれ？　今、この人なんて言った？
「すみません、エレンさん。さっき何とおっしゃいましたか？」
僕の耳が聞き間違いをしていなければ、この人、元龍って言わなかった……？
「元龍の力を使えるアナタは普通の民間人ではない。ですか？」
どうやら僕の耳はちゃんと機能していたようだ
って、暢気にしてる場合じゃない！
「な、なんで知ってるんですか!?」
僕が元龍の子孫で元龍の力を使えると言う事は、ＪＳ事件に関わった六課のメンバーとスカリエッティ一味、あとは娘であるヴィヴィオだけで、この人が知っているはずはないと思っていたのだが

「ＪＳ事件を少し調べれば分かります。風の元龍の力を完全に操っていた、扇風月を単独で止められるのは、同じ元龍の力を持つ者だけです。そして扇を止めたのはアナタだと、記録に残っています。なので、管理局の上層部ならその気になれば全員知る事ができます」

僕の個人情報は管理局には筒抜けだった。

うぅ……。

平和な生活をこよなく愛する僕に取って、その情報は不必要なんだけどな……

「今回の事件は世界が消滅すると言う、極めて規模の大きな事件です。この事から、何らかのロストロギアが、それも〝ゆりかご〟よりも強力なロストロギアが関係していると思われます。そんな事件だからこそ、今回の事件は〝ゆりかご〟を撃墜させた機動六課に担当させると言うのが最高評議会の決定なんです」

「え？　この事件って自然災害とかじゃないんですか？」

「今までで、合計１２個の――いえ、先日また一つ消えたそうなので１３個ですね。合計１３個の世界が全て、偶然起きた自然災害で消滅したと本気で思ってるんですか？」

……言われてみれば、その通りだ。

僕はてっきり何らかの自然災害が原因で、その原因を調べるのが六課の仕事だと思ってたけど、この事件が自然災害なら偶然１３個も世界が消えた事になる。

偶然にしては数が多すぎるな……

「じゃあ、六課の仕事内容って、何のロストロギアなのかを調べて、それを確保する事なんですか？」

なのはとフェイトから詳しい話は聞いてないけど、もしそうなら、この事件は簡単には終わらないだろうし、かなり危険な物になるだろう。

「機動六課の見解では、今回の事件は元龍が絡んでる可能性が高いと言うものでしたので、その場合は元龍の逮捕が仕事ですね」

「元龍!?　そんな話、聞いてないんですけど!?」

もし相手が元龍の子孫なら、ロストロギアよりも性質が悪い。

ロストロギアの場合は原因のロストロギアを発見次第、封印すれば終わる。
けど、元龍が相手なら今回の事件は人為的な物で、元龍を力尽くで逮捕しないといけない。
危険度は倍増では済まないだろう。
「元龍の事に気づいたのは、吉井戦技教導官と吉井執務官らしいですよ？　なんでも、世界を消滅させる力を持ってるのはロストロギアだけではない。むしろ、〝ゆりかご〟よりも強力で、未だに何のロストロギアなのか分からないなら、元龍の方が一瞬で世界を消滅させられる力を持つ分、可能性が高いと言う事です」
吉井って事は、なのはとフェイトの二人の事だろう。
二人ともそんな事は一言も言ってなかったのに……
いつから気づいてたんだろう……？
「ですので、ちょうど一週間前から元龍が犯人と言う線で捜査を進めているようですね」
「一週間前……ちょうどレオを保護した日だな。と言う事は、あの日に二人は何かが原因で、その事に気づいたって事になるんだろうけど、何か変わった事は……」
僕は、あの日の事を真剣に思い出そうと頭を捻る。
あの二人が〝元龍〟関連で何かに気づくとしたら、僕を見てだろう。
なら、僕は絶対にその時の事を知ってるはずなのだ。
と、僕が必死に過去の記憶を呼び戻し始めて、数分。
僕はようやく気づいた。
「朝食の時か!!」
二人が〝元龍〟に気づいたのは朝食の時だと。
二人はあの時、同時に何か気づくと慌てて出て行った。
あれが〝元龍〟に気づいた時だったようだ。
「どうやら、お心辺りがあるようですね。……ですが、今はその話ではありません。アナタの協力を得られるかどうかの話です」
僕が一週間前のあの日に、その事に気づかなかった事を悔やんでい

ると、そんな事を言われる。
確かに、今の話を聞いたら僕は六課に入るべきだろう。
世界を消せる力を持ってるって事は、ソイツはユニゾンも使える可能性が高い。
そんな危ない奴と、六課の皆を戦わせたくはない。
けど
「……それでも、今の僕には協力できない」
今の僕は自由ではない。
六課に入ると言う事は、学校に通っている9歳の娘を家に置いて、僕も事件を解決するまでの間、家を空けないといけないと言う事になる。
しかも
「それは保護している子がいるからですから？」
この人の言う通り、僕はレオを保護している。
レオは変な組織に狙われている可能性が高い。
これも立派な事件なわけだけど、そこまで重犯罪ではないので、配置されてる人員は普通の航空魔導師の人達で、エースやストライカーと呼ばれる人たちではない。
レオを置いて行く事もできない。
「それとＳｔ．ヒルデ魔法学院に通っている娘さんの事もありましたね」
「……何で知ってるの？」
「交渉する際に、相手の事を事前に調べておく事は常識ですので」
どうやら、この人は僕の事をかなり調べていたようだ。
割と本気で、僕の個人情報がちゃんと守られてるのか心配になってくる。
けどまぁ
「知ってるなら話は早いですね。アナタの言った理由から、僕は六課に行く事はできないんです」
この事を事前に知ってたら、なのはかフェイトのどちらかと変わるなり、両方と変わるなりできたんだけど、それは今さら言っても仕方

がない。
あの二人が〝元龍〟に気づいた時に僕も気づいていれば、こんな事にはならなかったのに……
「一応確認しますが、以前はどうであれ今現在、アナタが六課に入らない理由はそれだけですか？　今なら、その不安な要因さえ取り除けば、アナタは六課に入るんですか？」
「それだけって……それが一番の問題点なんですけど？　言っときますけど、僕は二人を置いて六課に入る事はありませんよ？」
とは言え、それさえ解決すれば、この人の言う通り六課に入るけど……
「分かりました。では準備だけはしておいて下さい。この事は最高評議会に話しますので、おそらく何とかするでしょう。三人の最高評議会の内の一人、一番権力を持つ議長がアナタの六課入りを強く希望していますので」
「……は？　なんで？」
議長が僕の六課入りを強く希望？
一度も会った事がないのになんで？
と、僕は不思議でいっぱいになるのだが
「さあ？　そこまでは知りません。ただ、議長は〝元龍〟がこの事件に関わりがあると聞く前から、アナタをこの事件に関わらせたがってましたね」
「……なんで？　〝元龍〟関係ないなら、わざわざ僕を指名する必要はないと思うんだけど……」
僕はますます不思議な気持ちにさせられた。
議長どころか、最高評議会とも接点がないんだけど、ホントになんでそんな事になってんの？
「分かりません。それは他の議員と書記の方も不思議に思われてましたしね。まぁ、もしかしたら、議長は〝元龍〟の事に気づいていたのかもしれませんけど」
エレンさんはそう言ったが、僕は何となく違う気がする。

議長がそう思ってるなら、初めからそれを僕に言えば良い。
そうすれば、こんな風にエレンさんを僕に寄越して、六課に入るように勧誘する必要はなかっただろう。
と言う事は、他に理由があるはずだ。
何か、この事件に僕を巻き込まないといけない、何か特別な理由が……
「では準備だけはしておいて下さい。子ども達の件は何不自由ないよう、手配しますので……」
そう言って、エレンさんはこの場から去っていた。
「……〝元龍〟か」
この事件に〝元龍〟が関係していて、議長が何やら怪しく、別件でレオは変な組織におそらく狙われている。
そして僕はその全てに関わる事となった。
最近頻繁に思うのだが
「僕って、事件に巻き込まれ過ぎじゃないかな？」
始めはＪＳ事件。
そのＪＳ事件から三年後には、次々と湧き上がる謎の事件が今の所二つ。
しかも、この三つのうち、二つが〝元龍〟が関係している事件だ。
どう考えても、平和を好む、普通の民間人には無縁の出来事のはずなのに、全てに関わる僕っていったい……
「はあー」
僕はこの呪いに掛かったかのような状況に、ため息を吐かずには入られなかった。
そしてこの後、家に帰った僕は
「女の人みたいな香水の匂いがする」
と、レオがヴィヴィオに言った事が原因で、僕はヴィヴィオに浮気を疑われ、今の話を全てヴィヴィオに話す事となったのだった。
いずれは話さないといけなかったにしても、今すぐにそんな状況に陥るとは思いもしなかった。
どうやら、最近の僕はとことん不幸な目に合うようだ

第四話

エレンさんに訪問された翌日。
なのはとフェイトがいないため、最近の僕はヴィヴィオとレオの朝食を作るべく、早起きをしている。
そして今日もいつものように、朝早くに目を覚ました僕だったのだが
「な、なにこれ？」
今日の朝はいつもと違い、朝一番で驚かされていた。
何故そんな事になっているのか？
それは
『見た感じ転送ポートじゃないですか？』
「どこの世界に、朝起きてみたら転送ポートが設置されてるような家が存在するのさ!? だいたい、なんで転送ポートなんて物があるの!?」
昨日寝る前には影すらなかったのに、朝起きて庭を見ると、3人くらいなら余裕で入れそうな広さを持つ転送ポートのようなものが庭に設置されていたのだ。
『マスター。何をやらかせば、こんな事になるんですか？』
「待って！ 今、さらっと僕のせいにしたけど、僕は何もしてないよ!?」
『マスターは問題を起こすプロじゃないですか』
「誤解を招くような言い方をするな！ それだと、僕がいつも問題を起こしてるように聞こえるでしょ!?」
『……え……？』
「ちょっと！ どうして、そこでそんなリアクションになるの!? おかしいでしょ!?」
こんなリアクションを取られると、本当に僕がいつも問題を起こしてるみたいだ。
濡れ衣も大概にしてほしい。
『そうですか？ 常に問題を起こしてる気がしますが？』

「……え……？」
『待って下さい。その「遂にこのデバイス壊れたか……」みたいな不快な表情は止めてください。間違ってるのはマスターですからね？』
マスターは問題をかなりの頻度で起こしてますからね？』
「そんな事は……ない。とは言い切れないけど、かなりの頻度は言い過ぎだ！」
『マスターは学生時代に少なくとも週に５回、多い時は１０回程問題を起こしていたようですが？』
「待て！　その情報はどこから得たんだ!?」
『もちろんハッキングですが？』
いったいコイツはどれほどの情報をハッキングで得たんだ？
僕の学生時代の事まで知ってるなんて、思いもしなかった……
「……僕の名誉のために一応、言っておくけど、さっきのは言い過ぎだからね？　少なく見積もって、週に２、３回。多くて５回程だからね？」
『それでも多い時は休みの日を除けば、一日に一回は問題を起こしていた計算なんですね』
「あれ!?　少しも名誉が守られてない!?」
おかしい。名誉を守るために言ったはずなのに、全然僕の名誉は守られていないなんて……
「もー。うるさいなー。なに朝から騒いでるの？」
「ヴィヴィオ姉ちゃん、まだ眠いよ……」
と、僕等がバカ騒ぎをしていると、ヴィヴィオはこれから日課の早朝ランニングに向かうつもりだったようなので、トレーニングウェアを着た姿で、レオはまだ寝ていたようで、パジャマ姿で目をこすりながら顔を出してきた。
どうやら、相当うるさかったようだ。
「あー、ごめん。ちょっと、想定外な事が起こって……」
「想定外？　何があったの？」
『庭を見ていただければ分かりますよ』
「庭？　庭になにが……って、ええぇっ!?　なにこれ!?」

ドラグーンに言われて、すぐさま庭に置いてある転送ポートのような物を見てヴィヴィオが驚きの声を上げる。
だよね！　普通は驚くよね！
「ちょ、パパ!?　なにこれ!?　何しちゃったの!?」
『ですよね！　とりあえず、マスターが何かしたと思いますよね！』
なんだ？　この違いは？
僕とドラグーンは、今ほとんど同時にヴィヴィオの感性に共感したはずなのに、どうして僕だけこんなに悲しいんだ？
「……ねぇ、ヴィヴィオ姉ちゃん。ここに張り紙が貼ってあるよ？」
僕とドラグーンにヴィヴィオも加えて、僕等３人が騒いでいる間に、レオだけが冷静に庭に設置された転送ポートを見て、そこに張り紙が貼ってあった事に気が付いた。
なんで一人だけ、そんなに冷静なんだろうか？
「張り紙？　レオ、ちょっと読んで見て」
「……ヴィヴィオ姉ちゃん。これなんて読むの？」
そう言って、レオが指さした文字は『こ』と言う平仮名だった。
見た目は７、８歳なのにこの学力。
レオの頭はかなり悪いようだ……
『親近感が湧きますか？』
「……そうやって、直ぐに僕をバカにするのそろそろ止めてくれないかな？」
僕もう２０歳なんだけど……。
『知ってます？　バカは死んでも治らないらしいですよ？』
「だから止めてってば！　あんまり、この話を引っ張るとボロが出ちゃうでしょ!?」
『……自分でバカって認めてますよ？』
あれぇ!?　どうしてこうなった!?
と、僕とドラグーンが相も変わらず騒いでいる間に、ヴィヴィオがレオから張り紙を受け取り、内容を読んでくれた。
「ええっと、なになに？　『※これは転送ポートです。吉井明久様。アナタの心配を取り除くための装置として、今回の事件が解決するま

での間、ここに転送ポートを設置させていただきました』
……これ、パパのせいみたいだよ？」
『やっぱり、マスターが何かやらかしてたんですね』
一文を読んでから、僕の方をじと目で見てくるヴィヴィオ。
その目は「何をやらかしたの？」と静かに語っていた。
「ちょ、ちょっとストップ！　そう言う疑いは最後まで読んでからにしようよ！　もしかしたら濡れ衣と言う可能性も……」
「……確かにそうかもだけど、この一文だけで既にパパのせいって確定してると思うんだけどな……」
それは否定できない。
僕も立場が逆なら、既に有罪判決を下してると思う。
「まぁ、いっか。じゃあ、続き読むね？　『この装置と同様の物を機動六課にも設置しています。この転送ポートと六課の転送ポートは二つでセット。つまり、これを使えばこの場所と六課を自由に行き来できます。なので、ご家族の皆さんで六課で住んでいただき、娘さんにはこれを使って、学校に通ってもらって下さい』って、え？　これって、わたしが使うために用意されたの？」
ヴィヴィオは予想外の事実に、思わず読むのを中断して驚いていた。
うん。そりゃ驚くよね。
僕だって驚いた。僕は違う意味でだけど……
「ヴィヴィオ姉ちゃん、続きは？」
「あ、そうだった！　ええっと、『吉井明久さんは今週中に六課へ向かうようお願いします。尚、この転送ポートは一回の転送につき3人しか転送できません。また娘さんが休日の日も遊べるように一日に四度の転送が可能になっていますが、それ以上は転移できないので、必要ない時のご使用はお控えください。新生・最高評議会』……って書いてある」
さっき、六課って単語が出た瞬間に管理局が僕を六課に入れるために送ってきたんだと思ったけど、やっぱり間違ってなかったようだ。
と言うか、昨日話をしたばかりで、次の日の早朝には届いてるって、

どんだけ早いんだよ……
「ねえ、パパ？　これって昨日パパが、「もしかしたら、しばらくの間は六課から学校に通う事になるかもしれない」って言ってた奴だよね？」
「だろうね……」
昨日エレンさんと別れた後、家に帰った僕はエレンさんと話した事をヴィヴィオに話して、ヴィヴィオがレオに話している。
そのおかげで、ヴィヴィオとレオもこの状況を瞬時に呑み込む事が出来ているんようだけど、こんな物まで用意するなんてやり過ぎだと思う。
「パパを六課に入れるために、お金いくら使ってるんだろう？」
「これ使うのヴィヴィオだけなのにね……」
『まぁ、議長がどうしてもマスターに協力して欲しいと言ってるんですから、これくらいはできるんじゃないんですか？』
たかが僕一人を六課に入れるために、ここまでする新生・最高評議会。
なんて恐ろしい連中なんだ……
とは言え
「ヴィヴィオは、この転送ポートを使って学校に通えば、いつも通りの日常に。レオに関しても、仮に襲われたとしても戦える人が大勢いる六課の方が安全。これで僕が管理局に協力するのを拒否する理由は何もない事になるわけだね……」
僕は管理局のトップ陣、特に議長が望んでいるように、六課に入って、六課の担当する事件をする事になるわけだ。
手段はとんでもない方法だったけど……
「じゃあ、パパもママ達や六課の皆と一緒に、おんなじ仕事をするの？」
「まぁ、〝元龍〟が絡んでるって言われたらほっとけないでしょ」
なのはやフェイトはもちろん、六課の皆も心配だからね。
〝元龍〟ってポテンシャルだけはかなり高いし……
と言うか、ここまでされて断る勇気は僕にはない。

と言うわけで
「ヴィヴィオは学校行きながらで大変だと思うけど、週末には移動するから準備をしておいてくれるかな？」
「はーい」
僕等は六課に移動するための準備を始める事となった。

☆

「ねぇ、パパ？　ふと思ったんだけど、この事ママ達に言わなくてもいいの？」
転送装置が届いた日の夜。
僕は六課に行くための準備を自室にて行い、休憩がてら外の空気でも吸おうと庭まで出てきていたのだが、そこにヴィヴィオが現れて、そんな事を聞いてきた。
「え？　言わないとマズイかな？」
「うーん……。言っといたほうがいいと思うよ？　いきなりパパが六課に行ったらビックリすると思うし」
「そうかな？　なのはもフェイトも隊長なんだから、僕が言わなくても既に話は聞いてると思うんだけどな……」
僕を六課に入れるために転送装置を送りつけてきたくらいなんだから、最高評議会がはやてに既に連絡していて、そこからなのはとフェイトにも伝わっていると思うんだけどな……
「パパがそう思うなら別にいいけど……。でも仮にママ達が知らなかったらパパ怒られると思うよ？　今回の話はママ達からしたら、なんの相談も無しにパパが一人で決めた事なんだよ？」
ヴィヴィオは少し不安そうな顔で僕の心配してくれる。
ふむ。
そんなにヴィヴィオが心配そうにするなら、少しその光景を想像してみるとしよう。
「……」
「……」

ダメだ！　これはマズイ！
僕は二人が六課に行く時、ヴィヴィオとレオを任された立場だ。
それなのに、もし二人が何も知らなくて、僕がヴィヴィオとレオを連れて六課に行ったらどうなるか？
まず、僕は二人に問いただされるだろう。
その後、僕が〝元龍〟に関係があるから六課に協力した事がバレる。
二人は僕が危険な事に首を突っ込むと、僕を心配してくれてるせいか、必ず僕に対して怒るので今回も間違いなく怒るだろう。
さらに、今回は僕が六課に協力すると言う事はヴィヴィオに一々転送ポートを使用させると言う面倒をかける事にもなる。
それを事前連絡なしで、僕等が六課に行った事で二人が知った場合、僕が受けるお説教タイムは倍になってしまうだろう。
僕としてはそんな事態に陥りたくはない。
と言うわけで
「や、やっぱり二人には先に言っておこうかな……」
僕はヴィヴィオの忠告通り、二人にこの事を事前に話しておく事にした……のだが
「じゃあ、わたしは引き続き荷物の整理とかしてくるから、パパはママ達に連絡しておいてねー」
ヴィヴィオは僕を一人にして部屋に戻ろうとしていた。
「……え？　これって僕が一人で言うの？　ヴィヴィオも一緒にいてくれたりは……」
「だって、早く準備しないと間に合わなくなっちゃうじゃん」
確かにその通りだ。
何も反論できない……
「と言うわけで、わたしは自分の部屋に戻って準備の続きをしてくるねー」
ヴィヴィオは僕が何も言わずに沈黙している間に、自室へと戻って行った。
小学生の娘を相手にして論破される僕っていったい……

「まぁ、それは今さらか。そんな事より早く二人と連絡取っちゃおう」
僕は直ぐに頭を切り替えて、二人に何と伝えようかを考えることにする。
我ながら、こうやって直ぐに思考を返る事ができるのは、僕の良い所だと思う。
「ええっと、とりあえず初めは謝罪の言葉から入るべきかな？」
『とりあえず最初は「大丈夫？」って心配をしてやるべきじゃねえか？』
「へ？」
僕の耳に突如そんな声が聞こえてきた。
僕は誰かいるのかと思い、声のした方向に視線を向けたのだが
「……気のせいか……」
そこにはやはり誰もいなかったので、僕の気のせい――
『残念ながら気のせいじゃねぇぞ』
――なんかではなく、どうやら本当に誰かいるようだ。
「……誰？」
『おいおい。誰とは随分と冷たいじゃないか』
声の主がそう言うと同時に僕の目の前で空間が歪みだし、そこから一人の男。先日、僕等を襲撃してきた男が姿を現した。
「っ!?　お前はっ……！」
「よぉ、吉井明久。また来てやってぜ」
そう言いながら、不敵に笑う男。
まるで、僕が来てほしいと願っていたかのような言い草だ。
「……なにをしに来たの？　まだ性懲りもなくレオを狙ってるの？」
まぁ、例えそうでも絶対にレオは渡さないけどね。
僕は男を最大限注意しながら、睨みつけた。
「まぁ、そう警戒するな。今回はお前に取っては大事な事だと思うから、話くらい聞いとけって」
「話？　レオを奪いに来たんじゃないの？」

以前襲ってきた時はレオを狙ってきてたみたいだから、今回もレオが目的だと思ってたんだけ、今回は違うんだろか？
もしそうなら、話くらいは聞いても良いような気になってくるな……
「ああ。ガキはまだ必要ないからな。必要になったら貰いに行くから、それまではお前が預かっといてくれ」
「預かるのは構わないけど、そっちが必要になっても渡さないからね？」
「じゃあ、その時が来たら全力で守るんだな。こっちは手加減なんかしないからな」
そう言って男は獰猛な笑みを浮かべた。
どうやら嘘をついているわけではなく、本気で必要になるまでレオには手を出さないつもりのようだ。
正直、レオを道具扱いしているようで気に入らないけど、しばらくの間はレオが襲われる事はないみたいだから、そこだけは安心だ。
けど、いずれ襲ってくると宣言してる奴を野放しにするのもどうなんだろうか？
やっぱり話なんて聞かずに今すぐに、コイツを捕まえるべきなんだろうか？
今ならこの周辺にはレオの警護のために数人配置されてるから、皆で協力すれば何とか周りに被害を出さずに倒せる気がするし……
なんて僕は考えていたんだけど
「あ、先に言っておくが、周りに配置されてた奴らなら既に倒しておいたぞ？」
そう言いながら男が指をパチン！　と鳴らすと、男の周りの空間に大きな歪みができて、そこから
ドサドサドサドサ
ここらに配置されていたはずの管理局の魔導師、数十人が地面へ向かって落下していき、他人の山が出来上がってしまった。
どうやら全員で協力すればコイツに勝てるという僕の考えは甘

かったようだ。
「別に俺としては止めを刺しても良かったんだけどな。今回はお前に話があって来ただけだから、殺さないでおいたぞ」
このタイミングでコイツがこんな事をしたって事は、レオの警護のために配置されていた管理局の魔導師程度ならいつでも殺せると言う事を僕に示したかったんだろう。
管理局の魔導師の人達と協力したところで自分を簡単に倒せると思うなと言う、この男のメッセージ。つまり、こんな市街地で戦闘なんて事になったら、速攻で倒す事はできずに暴れまわる事になり周辺が滅茶苦茶になると言う事だ。
「はぁー。脅迫は犯罪なんだよ？」
「バカでも俺の意図は伝わったみたいだな」
なんで僕は毎回バカ扱いされるんだろうか？
「んじゃまぁ、早速本題に入るとするか。……そうだな、口で説明するより見た方が納得いくだろ。と言うわけで、これを見ろ雷炎龍」
そう言って男が取り出したのは透明な水晶だった。
これで何をするつもりなんだろうか？
と、僕は疑問に思っていたのだが
「お前、竹原ってドクターは知ってるか？」
「ッ!?　その名前をどこで!?」
思いもしない所で、思いもしなかった人物名前が挙げられた事に僕は疑問なんて物は頭から無くなり、驚きでいっぱいになった。
竹原。僕がミッドに来る事になった原因で、元龍の研究をしていた人物だ。けど、竹原と言う男はもう死んだはずだ。
そんな人間の名前を再び聞く事になるとは思いもしなかった。
「さぁな。そんな事はどうでもいいんだろう？　俺が言いたかったのは、この水晶は竹原が作った物だって事だ」
……どうやらコイツは竹原の事を話す気はないみたいだ。
コイツが竹原の事をどこで知ったのかは凄い気になる所だけど、この様子だと聞いても答えてくれなさそうだな……
僕はそう判断して竹原の事は一度忘れることにして、男の話を聞く

事にした。
「簡単にこの水晶の説明をしてやるから良く聞けよ？　こいつには対になる水晶が存在して、片っ方の水晶に映ってる映像をもう片っ方の水晶に映す事ができるって代物だ」
「要は生中継されてるテレビみたいな物って事？」
「あー、まぁ、そんな感じだ」
……微妙だ。
そんな物をわざわざ水晶で映せるようにした意味があるのかと言う、疑問しか湧かない。
「まぁ、細かい事は気にすんな。とりあえず映すから、お前はこの映像見てろ」
男はそう言いながら水晶に手を当てて、何やら呪文のような物を呟き始めた。
そして男が呪文を唱え終わると同時に、水晶に映像が映りだした。
……のだが
「……え……？」
僕は映像を見て、思わず思考を止めた後、目を見開いていた。
なにこれ……？　なんでこんな事に？　僕は夢でも見てるの？
僕は目の前で水晶が映している映像が現実の物だとは思えなかった――いや、思いたくなかった。
「嘘でしょ……？」
僕が男に見せられた映像。
それは
「なんで……なんで、皆が血だらけで倒れてるんだよ!?」
機動六課のフォワード４人に加えて、なのは、フェイト、はやての隊長３人、そしてヴォルケンリッターの４人までもが気を失い、体の至る所から血を流して倒れている姿を映した映像だった。
「こんなの信じられるわけ……」
「あほか。お前が信じようが、信じなかろうがこれが現実だ。お前に嘘の映像を見せるためだけに、わざわざこんな所に来るわけねぇだ

ろうが」
「……」
僕は男が無表情のまま、そう言い放った言葉を聞いて、何も言い返す事が出来なかった。
皆がやられるなんて事を信じられないし、信じたくもない。
けど、この男の言葉に反論できるだけの材料が僕の手元にはない。
信じたくなくとも『これが現実だ』と嫌でも思い知らされてしまうのだ。
「……僕に何をさせるつもりだ？」
僕は今にも爆発しそうな怒りを何とか抑えつけながら、そう短く発する事しかできなかった。
僕が見せられている映像が、本当に今起こっている事だと言うなら、僕は皆を助けに行かなければならない。だが、それをしようにも皆のいる場所がどこなのか分からない以上、皆を助ける事なんて出来やしない。
僕が皆を助けるためには、今僕の目の前にいるこの男から、皆の情報を引き出さなといけないのだ。それも、できるだけ早く。
「話が早いな」
男は余計な問答が無くなったのが嬉しいのか、嬉しそうな笑みを浮かべる。
けど、それを見た僕は何も嬉しい事なんかなく怒りがドンドン増していき
「へらへら笑ってんじゃね!!　さっさと要件を済まして、皆の居場所を教えろって言ってんだよ!!」
僕はここが市街地である事も、ここが我が家の庭である事も、ヴィヴィオとレオがこの家の中にいる事も忘れて、全身から雷を撒き散らしながら、男に向かって大声で思いっきり叫んでいた。
「うるせぇな。そんなに怒鳴るなよ」
男は飄々としながらそんな事を言ってくる。
僕はそんな男の態度を見て、既に爆発寸前だった怒りが限界を超えて、理性なんて物を完全に吹っ飛ばし、この場で全魔力を解放しよう

とした時
「パパ!?　どうしたの!?」
「……」
家の中からヴィヴィオとレオが僕の声に驚いて飛び出してきたのが僕の目に映り、ここが市街地である事、ここで本気で暴れたらヴィヴィオやレオにも被害が出る事を思い出す事ができた。
「ヴィヴィオ、レオ……」
僕が二人の名前を呼ぶと僕の体内で今にも爆発しそうだった魔力が段々収まって行き、僕の全身から撒き散らされていた雷も収まっていた。
暴走しかけていた僕は、どうやら二人によって助けられたようだ。
と、僕が少し冷静さを取り戻した時
「あっ!」
「?　どうしたの?　ヴィヴィオ姉ちゃん?」
ヴィヴィオは男の存在に気づくと、さっきの僕等の会話を聞いてないため、今回もコイツがレオを狙っていると思いこみ、レオの事を自分の背中で隠してから臨戦態勢に入り、男の事を睨みつけていた。
……どうやら今度は、僕がヴィヴィオを落ち着かせないといけないようだ。
「ヴィヴィオ、ちょっとストップ。とりあえず今はレオの事を狙う気はないらしいから、落ち着いて」
「そうそう。君のパパは今、俺の力を必要としてるんだから、パパの邪魔はしない方が良いよ?」
僕がヴィヴィオを止めると、男も直ぐにヴィヴィオに自分を攻撃しないように訴えかけた。
言ってる事は間違っていないのだが、コイツが言うと何だか凄い腹が立つ。
「え?　え?　どういう事?」
ヴィヴィオは僕と男の顔を交互に見て、困惑していた。
うん。そりゃ何の説明もなしじゃ、わけ分かんないよね。
けど、今はヴィヴィオに細かく説明しているような時間はない。

僕はヴィヴィオに向かって、今はレオと一緒に家の中に入ってるように言おうとしたのだが
「って、ちょっと待って……その映像って……」
僕が言葉を発するよりも先に、ヴィヴィオは水晶の映像を見てしまった。
なのはやフェイト達が傷つき、倒れている姿を……
「なにこれ……？　どうして？　どうしてママ達がこんな事に……」
そう言ったヴィヴィオ目には涙が見えた。
自分の大好きなママが自分の知らない所で傷ついている。それが悲しくて、もしかしたら二人が死んでしまうかもしれないと言う恐怖。それらを感じているのだろう。
そして同時に
「パパはママ達を助けに行くつもりなんだよね？　だったら、私も一緒に行く」
ヴィヴィオは僕と違って頭が良いから、この状況も瞬時に理解したようだ。
けど、今回ばかりはその頭の良さが裏目に出て、ヴィヴィオは全く迷うことなく、なのは達を助けに行くつもりのようで、こんな事を言いだしていた。
「……本気で言ってるの？　危ない場所に行くんだよ？」
「分かってる。でも、わたしだけパパたちの帰りを待ってるだけなんてできないよ！」
ヴィヴィオの目は本気だ。
その表情から遊びで言ってるわけではなく、本気でなのは達を助けたいと思っている事が良く分かった。
本当なら、僕としてはヴィヴィオをわざわざ危ない所に連れて行きたくはない。
ないんだけど……
「……僕の言う事ちゃんと聞いてよ？　絶対に無茶したらダメだからね？」

僕は数瞬考えた後、そのヴィヴィオにそう答えた。
「うん。ちゃんとパパの言う事は聞くから大丈夫！」
本当なら、ヴィヴィオをわざわざ危ない所に連れて行きたくはない。
ないんだけど……正直今回は僕一人だけじゃ皆を助けるのは厳しい。
不確定要素が多いし、なにより11人全員を安全な場所に運ばないといけない。
もし敵がいた場合、それを実行するのは僕一人では不可能だろう。
「じゃあ、そう言うわけだから、早く皆の居場所を教えてもらおうか？」
僕はヴィヴィオの協力を承諾した後、男の方に視線を向けて皆の居場所を問い詰めた。
「なんでお前がそんなに偉そうなんだ……？　まぁ、お前が俺の要求を呑むなら、そこまで連れて行ってやるけどよ……」
「え？　連れて行ってくれるの？」
もちろん、可能な限り相手の要求を呑むつもりだったけど、まさか連れて行ってくれるとは思いもしなかった。
場所さえ分かれば、後は管理局に乗り込んで、どうにか目的地まで運んでもらうつもりだったから……
「元々そのつもりだったしな。と言うか、そう言うって事はこっちの要求を呑むって事でいいんだな？」
「僕にできる事ならね？」
もちろん、レオを渡せとか、誰かを殺せとか、そう言う内容はできる事には含まれない。
と言う、僕の考えを男が読んだのか、どうかは分からないけど男が僕に要求してきた事は実に単純な物だった。
「大丈夫だ。俺からの要求はただ一つ。向こうに行ったら、六課の連中を助けるのは構わんが、お前だけは絶対に逃げるな。全ての敵を撃墜、または逃走させるまでだ」
要は、僕だけは死ぬまで戦うか、敵を倒すまでは戦い続けろって事

か……
「因みに敵の戦力はどれくらいなの……？」
「こっちは巨大戦力が一人。その他が百ほどだ」
それを一人で倒せと？
「まぁ、どうせお前に拒否する選択肢なんてないけどな」
それはつまり、この要求を拒否すれば皆の所へは連れて行かないって事か……
それなら、確かに僕に選択肢なんて存在しない。
と言うわけで
「分かった。その要求を呑むよ」
僕はそう答えた。
まぁ、ぶっちゃけ皆を助けるためなら少し位の無茶は覚悟してたし、少しくらいの無茶はこっちだって望む所だ。
「なら、交渉成立だな」
男はそう言って、僕とヴィヴィオ、それになぜかレオにも黒い六角水晶を投げ渡してきた。
「ガキも一緒に連れて行けよ。無防備に一人でいたら、俺の気が変わるかもしれないぞ？」
「……だったら、なにも言わずにそうすれば良かったんじゃないの？　どうして、わざわざこんな事を……？」
僕は今の今まで男の言葉を信じて、レオを置いて行くつもりだった。
もし、本当にコイツがそんな事を考えていたなら、僕に何も言わずそうすれば良かったのに、なぜそうしなかったのか？
僕はそれが気になって、男に聞いてみたんだけど
「さぁ？　なんでだと思う？」
男は理由を話す気は全くないような態度を示してきた。
「まぁ、直ぐに答えてくれないなら、今は言わなくても良いよ……」
今はそんな問答よりも、六課の皆を助けに行く方が先決だ。
と言うわけで、僕はヴィヴィオとレオ、両方を連れて行く事を即断した。

「じゃあ、連れて行ってやるから、目的地に着くまでその六角水晶を離すんじゃねぇぞ？」
「え？　それってどういう――」
――意味？　と僕が言い終える前に
もう一言注意はしたと言わんばかりに指をパチン！　と鳴らして
「「!?」」
僕等は黒い水晶に吸い込まれるように、水晶を持ってる手から順番に黒い何かに包まれていった。
「俺の力を使ってお前等を転移させる。その黒い物体は、無害だから気にするな」
男がそう説明している間に、僕等の体は既に五分の四ほど黒い何かに包まれていた。
こんな事が出来る、この男はいったい何者なんだ？
僕は既に黒い何かに包まれたせいで、声を出せなくなった口の代わりに、目だけで男にそう訴えかけた。
すると、僕の疑問が伝わったのかどうかは分からないが、男は僕の方を見ながら口を開いた。
「そう言えば、前回会った時に次は名を名乗ると言ってたな……」
男はいたずらが成功した時の子どものような顔をして、続きの言葉を言い放った。
「俺の名はクロウ・ソンブル。光と闇の二つの力を持った、お前と同じ元龍の子孫って奴だ」
クロウと名乗った男がそう言い放ったのと同時に、僕等は黒い何かに完全に包まれたのだった。

第五話

目の前には黒い空間が広がっていた。
「ここはいったい何なの……？」
答えが返ってくるなんて思ってなかったけど、僕はそう口に出さずに入られなかった。
だってそりゃ、事前に何の説明もされずに「転移させてやる」と言われ、気がついたら自らをクロウと名のった男が水晶で見せてくれた景色ではなく、何も見えない暗い場所に放り出されたのだから、僕がこんな事を言いたくなるのも仕方がないと思う。
と言うか
「ヴィヴィオ～、レオ～見えないけど、ちゃんと近くにいる～？」
本当に何も見えないけど、二人はちゃんと僕の近くにいるんだろうな？
なんて思って、僕は結構大きな声で叫んでみたのだが
「いるよ～」
「……」
「あれ？」
僕の耳にはヴィヴィオの声しか聞こえず、レオの声は全く聞こえなかった。
「ちょ、レオ!?　もしかしてレオは近くに居ないの!?」
レオの声が聞こえない事で、さっきはレオの事を今は狙わないとか言っておきながら本当はレオの事を誘拐するつもりで、実際に行動に移したんじゃないか？
なんて嫌な考えが僕の頭をよぎったのだが
「レオ～。近くにいるなら返事して～」
「いるよ～。ヴィヴィオ姉ちゃん～」
ヴィヴィオが大声でレオを呼んだ瞬間、レオも大声でヴィヴィオの呼びかけに応じてきた。
まさか緊急時にまで無視されるとは……。そんなに僕が嫌いなんだろうか？

なんて僕がレオのあまりの言動に心を痛めていると
『あー、あー。聞こえてるか？　雷炎龍？』
どこからか、クロウの声が聞こえてきた。
「聞こえてるよ……。何なの、ここは？　僕等をなのは達の所まで連れて行ってくれるんじゃなかったの？」
『だから、今連れて行ってやってるだろう？』
「今は何も見えない暗い場所にいるんだけど？　僕達……」
なのは達の所に連れて行ってくれると言っておきながら、僕等３人は謎の暗い場所に連れて来られている。
それがどうして、そんな発言になるのか？
僕は嫌味のつもりでクロウにそう言ったんだけど
『それでいいんだよ。俺は闇と光の龍、両方の力を持ってるって言ったろ？　俺は光の速さで移動できる力も持ってんだよ』
クロウは顔を見ずとも、面倒くさがっていると分かるような口調で言い返してきた。
『けど、普通の人間は光の速さで移動する事はできないだろう？だから、それを中和って言ったら変な言い方になるが、ようは光の速さを闇で中和してんだよ』
「……僕にも分かる言葉で話してくれないかな？」
僕は今の言葉が人語とは到底思えなかった。
『あー……。やっぱりバカなんだな、お前……』
「バカってなんだよ！　バカって言う方がバカなんだぞ！」
『お前は小学生か……』
失敬な！　ちゃんと高校は卒業してる。
『……まぁ、今のは俺の説明も悪かったな。……ようは光の速さに耐えられるようにお前等の体を闇に包んで、その闇ごと光の速さで移動させてんだよ。俺はそんな必要ないがな……』
「つまり、この闇の空間？　に包まれてないと、君は自由に光の速度で移動できるけど、僕達を移動させる事は出来ないって事？」
『そう言う事だ。因みに、お前等を闇で包んでるって言うのは、闇龍の力でお前等を水晶に吸い込んで、俺が水晶ごとお前等を持って移動

してるって事だ』
んー……。何となく分かったような、分からないような……。
「あ。それと、お前等の持ってる水晶を手放すと、せっかく吸い込んだお前等の体が外に出てきて、目的地まで運べなくなるぞ」
「えーっと……。つまり、僕等は水晶に吸い込まれてないと、なのは達の所まで行けないって事？」
『そういう事だ。俺が運んでるのはあくまで水晶に入ったお前達だ。水晶から出たら光の速さで運べなくなり、俺が移動するのに通った道のどこかに放り出される事になるってわけだな』
よし。何となく分かった
要は、なのは達の下に行くまで手の中にある水晶を離さなければ、光龍の力と闇龍の力で移動できるって事だな。
「まあ、初めから水晶を使わなかったら何の問題もなかったんだがな」
「だったら最初から使わなければ良かったじゃない……」
どうして、そんな面倒な事をしたんだろうか？
僕はそう思わずにはいられなかったのだが
「そうすると、酷い乗り物酔いをしたような感じになる可能性があるが、それでも良かったのか？」
「色々と準備をするのは大切な事だよね！」
僕は一瞬で考えを改めていた。
「都合のいい野郎だな……」
そりゃそうだ。
僕は自分から苦痛を味わいたがるようなドMじゃないんだから。
「まぁ、別に良いんだけどな……。けど、これだけは言っておく。今お前等の声が互いに聞こえているのは水晶が近くにあるからだ。お前等は全員、別々の水晶に入ってるんだ。当然の事だが、水晶を離したら声は聞こえなくなるんだからな？　そう言う意味でも少しは俺に感謝しろよ、雷炎龍？」
「……そりゃどうも。けど、どうして僕に自分の力の事を教えてくれたの？　前会った時は名前も名乗らなかったくせに……」

なんだか、凄くイラッとくる言い方だったけど、ヴィヴィオとレオの声が聞こえて少し安心したし、少し位なら感謝してやらない事もない。
そう思って僕は軽く礼を述べた後、少し疑問に思った事を聞いてみた。
「別に？　ただ、ここまでしてやったんだから俺との約束は守れって事が言いたいだけだ。それに、もしお前と戦う事になっても、お前が俺の力を知っていようが、いまいが関係ないからな。どうせお前は軽くしか理解してないだろう？」
何も言い返せないのが辛い。
「っと。そんな事を言ってる間に目的地に到着だ。水晶から手を離せ」
クロウがそう言って直ぐ、僕は言われた通りに手の中に握っていた水晶を離した。
すると
「わっ！」
水晶に吸い込まれた時とは正反対に、今度は勢いよく水晶から放り出されて、僕が気づいた時には地面と濃厚なキスをしていた。
僕とほぼ同じタイミングで水晶から出てきたヴィヴィオとレオは普通に足を地面につけてるのに……。
「あれ？　どうしたの、パパ？」
「凄く痛い……」
心配してくれたヴィヴィオに今の感想を述べてみた。
と言うか、なんで僕だけこんな目に……？
「お前に嫌がらせをしようとした、俺からのプレゼントだ。ありがたく受け取れ」
こんなにありがたくないプレゼントは生まれて初めて……いや、嬉しくないプレゼントは数えきれないくらい貰ってきたな。
今思えば、姫路さんや姉さんの料理も、バレタインのチョコ感覚でプレゼントされたような物だったし……。
って、今はそんな事を考えてる場合じゃなかった！

「おい、クロウ！　ここはどこで、なのはやフェイト達はどこにいるんだ?!」
僕はようやく目的地に着いた事で急に焦りだしていた。
さっきまでは、ぶっちゃけ良く分からない事態に陥っていて、そこまで気が回らなかったけど、今は少し落ち着いたおかげで皆の現状を思い出して、考える余裕まで出来たのだ。
「ここは無人世界の1つで、お前のお仲間はあっちだ」
そう言ってクロウは、真っ暗な空と雪も積もってないのに真っ白になっている地面が大半を占めている景色の中に、数十メートル先くらいにある遺跡のような建造物の方角を指さしていた。
「因みに、あっちには俺の仲間もいる。約束通りここまでつれてきてやったんだから、お前も俺との約束通り、俺の仲間と戦えよ?」
そう言ってクロウは指をパチンッ！　と鳴らして空間に歪みを作り、その中へと消えて行った。
おそらく、闇龍の力とやらで水晶なような空間を作って、光龍の力で光の速度で移動したのだろう。
あれ？　でもアイツだけなら闇龍の力を使わなくても光の速度で移動できるんじゃないの？　アイツは光龍の子孫なんだし……。
「……まぁ、良いか。そんな細かい事は……」
多分、クロウは自分の力の全部を話したわけじゃないんだろう。
いくら僕があいつの力を軽くしか理解してないと思われていても、わざわざ敵対している僕に自分の力の全てを話すとは考えにくい。
だから、今はクロウの力の事なんて考えないようにした。と言うか、考えたってどうせ分からないだろうし、ぶっちゃっけ今はクロウの事なんてどうでも良かった。
とにかく今は
「なのは達を助けに行くよ、ヴィヴィオ、レオ！」
「うん！」
「ヴィヴィオ姉ちゃんのために僕も頑張るよ、ヴィヴィオ姉ちゃん！」
皆を助ける事だけを考えて行動するだけだ！

僕はそう強く思いながら、ヴィヴィオとレオを引きつれて遺跡のような建造物の方へと走り出したのだった。

☆

「ふぅ……。やっぱ居心地を良くしながら人を運ぶのは疲れるな……」

明久達3人をなのは達の下へ送り届けた後、クロウは真っ暗な空間の中で1人、そう呟いていた。

「適当に運ぶだけなら別に疲れないんだが、快適に運んでやるには何か入れ物が必要になるのが、この力の良くない所だよな……」

誰に聞かせるわけでもなく、ただ単にクロウは1人で愚痴を呟き続ける。

別にクロウは誰かに愚痴を聞いて欲しいわけではないのだ。

ただ、しんどい思いをしてまで明久達の事を運んだので、それを1人で解消するために愚痴っているのだ。

「まぁ、これで邪魔しそうな奴等は全員こっちにいるわけだし、俺も仕事をしやすくなったから、別にいいか……」

クロウはその言葉を最後に、自分の仕事を行うために移動を始めたのだった。

☆

「なのはママ、フェイトママ！」

僕等がクロウに言われた方角に走りだしてから数分もしない内に、ヴィヴィオが二人の名前を呼んだ声が響き渡った。

僕達の目の前には体の至る所にケガを負い、血を流しながら倒れているなのは達機動六課の皆がいる。

つまり、ようやく僕等はなのは達の下へとたどり着いたのだ。

「大丈夫、ママ!?」

なのは達の下へたどり着くと、ヴィヴィオは即座になのはの名前を

呼びながら一生懸命に体を揺する。
すると
「うっ……」
「ママ！」
なのはは苦しそうではあるが、小さなうめき声を出した。
僕が他の皆も確認したところ全員なのはと同じような反応を示したので、ケガはしているようだが死んではいなかったので、僕等は少し安心していた。
「良かった。皆無事みたいだ……」
もちろん早く治療をする必要はあるけど、誰もまだ死んでいない。
その事実に、僕は安堵すると同時にここまで皆を傷つけた奴を憎くも思っていた。
そして、僕は気づいてもいた。
皆が倒れていたのは遺跡のような建造物の前。そして、皆を傷つけたであろう人物の姿はどこにも見当たらない。
と言う事は、つまり――
「ヴィヴィオ、レオ。二人は皆の側に居て。僕はちょっと遺跡の中を調べてくるから」
――つまり、皆を傷つけた奴が遺跡の中にいる可能性が極めて高いと言う事だ。
ヴィヴィオもその事に気づいたのだろう。
僕が遺跡の中へ入ると言うと、すぐに
「……気を付けてね、パパ」
心配しそうな目で僕を見つめながら、そう呟いていた。
「大丈夫。この遺跡がどんな物か知らないけど、壊すぐらいの勢いで暴れまくってくるから」
全力全開。ドラゴンドライブを使うのは確定としても、必要ならドラゴンユニゾンを使って暴れてやる。
僕はそう決意して、遺跡の中へと入ろうとしたのだが
「レオ……？」
突然レオが僕の前を歩きだし、遺跡の入り口の前に立ちつくしたレ

オを見て、僕はレオに視線を向けたまま足を止めていた。
「どうしたの、レオ？　ここは危ないから、レオは遺跡から離れて皆の側にいてあげてよ」
「……ここ、知ってる……」
さっきも突然の緊急事態にも関わらず、レオは僕のと問いに関して何も返事をしなかったから、今回も返事なんて返ってこないと思いながら、僕はレオに声を掛けたんだけど、レオは静かにポツリとそう呟いていた。
「え……？　知ってるって、この遺跡の事を？」
「……」
さっきポツリとだが、声を出していたから今なら僕が何か聞いても返事をしてくれるかな～。
なんて思いながら、僕はレオに声を掛けたのだが
「……」
「え!?　ちょ、レオ!?　どこに行くつもり!?」
レオは僕の問いには答えず、ゆっくりと無言で遺跡の中へと入っていた。
「どうしたの、パパ？　……って、レオ!?　なにしてるの!?」
そこでようやく、なのは達の応急手当をしていたヴィヴィオもレオの行動に気が付いて、すぐさまレオを呼び止めたのだが
「……」
「ちょ、レオ!?」
レオはヴィヴィオに声を掛けられているにも関わらず、何も答えないまま無言で遺跡の中へと入っていた。
こんな事は僕の知る限りでは初めてだ。
レオは出会ってから今まで、ずっとヴィヴィオの後ろを付いて行くような子だった。
それが急にこんな態度を取られれば、いくら僕でも簡単に予想する事ができた。
この遺跡はレオに関係のある遺跡なんだと。
「ごめん、ヴィヴィオ。レオは僕がどうにかするから、ヴィヴィオは

皆の事を――」
――お願い。
僕がそう言おうとした瞬間だった。
「伏せて、ヴィヴィオ!! ドラグーン、セットアップ!」
僕は黒い空から何かがヴィヴィオに向かって落ちてくるのを目撃して、一瞬でBJを纏い、落ちて来た何かを真っ二つにするつもりで、思いっきり斬りかかっていた。
けど
ドコッ!
「なっ!?」
剣で斬ろうとしたはずの何かを斬る事はできず、鈍器で殴ったかのような鈍い音がなり、斬りかかった左手が思いっきり痺れていた。
「ごぁぎゃあぁぁ――――!!」
ただ、落ちて来た何かもヴィヴィオに向かって落下していくのではなく、何やら悲鳴のような声を出しながら、空に向かって上昇して行ったので、ヴィヴィオに直撃するような事態には陥らなかった。
……、
……?
……!?
「鳴き声!? 上昇して行った!? と言うか、空から何か落ちて来たってどういう事!?」
今起きた事が不自然である事を、僕は数秒遅れてから気が付いた。
「なんか普通に斬れなかった事にもビックリだけど、なに今の!? もしかして生物なの!?」
いや、なんか声を出してたし、急上昇までしたんだから生物である事は間違いないだろう。
問題はあれが、凄い固いせいでドラグーンでも斬る事ができない生物なら、どうやって倒すかだ。
「普通に斬れないって言うのは厄介だな……。なんか斬りやすそうな所ってないかな?」
僕は今度こそ謎の生物を斬るため、生物に全神経を集中させた。

そのおかげで僕は、急上昇し続けていた謎の生物から目を放す事なく、ずっと追いかけていると、謎の生物はようやく動くのを止めて、一度完全に停止する。
そしてその生物を見た瞬間
「……嘘、でしょ……？」
僕の思考は完全に止まってしまっていた。
僕の目に映っている物。それは
「黒いドラゴン……？」
キャロと常に一緒にいるフリードと形はよく似ているけど、表面は黒い鱗のようなもので覆われ、目つきもフリードとは比べ物にならない鋭い目をしたドラゴンだった。
「もしかして、クロウの言ってた僕が戦わないといけない相手って、このドラゴンの事なの……？」
だとしたら、コイツがクロウの言っていた巨大戦力なのか、その他の百に値するのかが気になってくる。
もしコイツが巨大戦力ならば、レオの入っていた遺跡の中には敵はいない事になる。
けど、コイツがその他の方なら真面に斬れない奴よりも強い奴が遺跡の中にいると言う事だ。
どちらにせよ、さっさとこのドラゴンを倒すに越した事はないのだが、出来ることならレオの安全のためにもコイツが巨大戦力であって欲しい。
僕はそう思いながら、黒いドラゴンを睨みつけていたのだが
「……ちっ！　やっぱり、そんなに甘くなかったか」
僕が睨みつけていてドラゴンとは別に、黒い空から又もや黒いドラゴンがもう1匹現れたのを見て、僕は舌打ちしていた。
と言うか、黒い空から黒いドラゴンが出てきたという事は
「パパ、気をつけて！　あの黒い空は全部、黒いドラゴンみたい！」
「みたいだね」
ヴィヴィオの言う通り、黒い空は全て黒いドラゴンなのだろう。
現に、黒いドラゴンが現れた場所は白い空になっている。

つまり、僕等が最初にここに辿り着いてからずっと、黒いドラゴンが白い空を覆っていたという事であり、今現在見えている黒い空は全て敵だという事だ。
「はぁ……。真面に斬れない奴が敵が約１００体か……」
これに加えて、クロウの言う巨大戦力が後１人。
なのは達がボロボロになってる事から、とんでもない強さの敵がいるのは予想してたけど、まさかここまでとは思いもしなかった。
「と言うか、空が白いって言うのもおかしな話だよね……。普通は青じゃん」
地面も真っ白で空も真っ白。雪が降ってるわけでもないのに真っ白な世界って、なんだか変な感じだ。
なんて事を考えて、僕は少しばかり現状の面倒臭さに現実逃避をしていたのだが
「まぁ、今はそんな事はどうでもいいか……。今はコイツを一刻も早く倒す事だけを考えないとね……」
僕はなのは達を早く安全な場所に運び、手当てをするため。そして、敵がいるであろう遺跡の中に一人で入ってしまったレオを早く助けに行くために、気合を入れ直して真面目に戦う事にした。
「とりあえず……ドラゴンドライブ！」
僕は体に炎と雷を纏い、ドラゴンドライブを発動する。
さっきは黒いドラゴンを斬る事はできなかった。けど何故かは分からないが、ドラゴンドライブを使えば黒いドラゴンは倒せる。
そう思ったのだ。
「それじゃちょっと本気で暴れて来るね、ヴィヴィオ」
「う、うん……。頑張ってね、パパ」
僕はヴィヴィオのその言葉を聞いた後、小さくうなずき黒い空へ向かって飛び出して行く。
ドラゴンドライブを使ってるおかげで、僕が黒いドラゴン達の目の前へは一瞬で辿り着いた。
「さて、一応確認するけど、君達は僕の言葉を理解できるのかな？」
僕がコイツ等をイキナリ斬らず、一度目の前で止まったのは言葉が

理解できるなら、なのは達を襲ったのがコイツ等で間違いないかの確認と、あの遺跡について少し教えて欲しいと思ったからだ。
それに、コイツ等に戦う意思がないなら、ヴィヴィオ達に手を出さないと誓わせて、僕自身は急いでレオの事を追いかけたかった。
けど
「ごぁぎゃあぁぁ――――!!」
この黒いドラゴン達は声ををあげ、僕を襲おうと突撃してきた。
「くっ！　やっぱり、僕の言葉は理解できてないのかっ！」
僕はギリギリの所で、黒いドラゴンの突撃を回避する。
と、同時にカウンター気味に炎と雷を纏った剣で、黒いドラゴンの翼を切り裂いた。
すると
「ごぁぁぁぁ――――!!」
「斬れた……」
僕が斬った黒いドラゴンの翼からは赤い血が吹き出し、ドラゴンにダメージを与えることに成功していた。
何故かは相変わらず分からないけど、ドライゴンドライブを使えばコイツ等を倒せると思った僕の勘はやはり正しかったようだ。
「……これなら勝てるっ！」
僕はそう確信すると、両手の剣をしっかりと握りなおして黒いドラゴンを睨みつける。
動きもさほど速くないし、ちゃんと攻撃が通るなら、問題なく一瞬で倒す事が出来る。
僕はそう思って、一気に目の前の黒いドラゴンを斬り伏せるつもりだったのだが
「「「ごぁぎゃあぁぁぁぁ――――!!」」」
僕は自分の頭の上から、どこかで聞いた事があるような声を複数耳にした途端、動きを止めて声の聞こえた方角、つまり上を見上げた。
そこで僕の目に映ったものは
「な、なんじゃこりゃ!?」
黒い塊、つまり黒いドラゴンが雨のように僕に降り注いでくる光景

だった。
「こ、こんなのどうやって対処しろって――くっ！」
僕は言葉を言い終わらない内に、僕の真上から突撃した黒いドラゴンを両手の剣をクロスして、受け止める。
だが、元々この黒いドラゴン達の図体はデカく、見るからに重そうなのに加えて、重力まで利用して上から降ってきたものだから、僕の腕では完全に黒いドラゴンを支える事が出来ず、勢い負けて地面まで一直線に落下させられてしまった。
「パパ、大丈夫!?」
近くからヴィヴィオの心配する声が聞こえてくる。
声の調子から、幸い今のに巻き込まれたりはしていないようだけど、近くにはいるようだ。
そして、近くにヴィヴィオがいるという事は、この近くにケガで意識を失っているなのは達もいると言う事だ。
「この、クソドラゴンがっ……！　こんな所で好き放題に暴れるんじゃない！」
珍しくその事にすぐ気が付いた僕は、ありったけの雷炎を上空に向けてぶっ放す。
それは僕の怒りを発散させるためでもあり、僕の攻撃に殺られた黒いドラゴンがなのは達の上に落ちて来ないように消し炭にする為でもある。
そして、その僕の思惑は上手くいき
「はぁ……はぁ……はぁ……。ど、どんなもんだ……」
僕は一気に魔力を使い過ぎたせいで少々息を切らしながらも、僕の攻撃を直撃した黒いドラゴンは見事に姿形もなく全滅していた。
「す、凄い……。パパってこんなに強かったんだ……」
ヴィヴィオのぼそっと呟いたような小さな声が耳に届き、ちょっと嬉しくなる。
けど、そう喜んでばかりもいられない。
さっきので消滅したのは、僕の半径5メートル内の上空をを飛んでいた奴等だけで、ほとんどは無傷で残っている。

それはつまり、今くらい本気の攻撃でないと黒いドラゴンを完全に消滅させる事ができるかは怪しいと言う事なのだが
「……どうしよう？　何発もあんなの撃てないんだけど……」
生憎と僕は無尽蔵に魔力があるわけではないので、あんな魔力を消耗する攻撃は連続で撃つ事なんて不可能だ。
となると、今みたいに大雑把な攻撃をせず、且つ皆に被害が出ないように戦う必要があるわけだけど
「よくよく考えたら僕って、ＦＦＦ団以外とは集団を相手にした事ないんだよね……」
初めて魔法が使えるようになってから3年。この期間中に僕は一人で複数の相手をした記憶がまるでない。いや、正確には初めての訓練の時にガジェットを破壊する時は一人で戦ったけど、あれは大して強くなかったからノーカウントと言っても良いだろう。
次に思い出すのは、六課が強襲された時だが、あれも敗北したとはいえザフィーラとシャマルがいたから一人で戦ったわけじゃない。
つまり、こんなハッキリと一人で複数の敵を相手にすると言うのは、高校時代に何度も襲われたＦＦＦ団以来なのだ。
「多対一の場合、どうやって戦えば周りに被害が出ないように戦えるんだろう……？」
ＦＦＦ団を撃退する時のように普通に戦えば良いんだろうか？
けど、それなら罠を仕掛ける必要があるが、今はそんな時間はない。
ホント、いったいどうやって戦うのが正解なんだ？
なんて事を僕が暢気に考えていると
「「ごぁぎゃぁぁぁ――――!!」」
「うおっ!?　もう攻めてきた!?」
僕が一度黒いドラゴン達を蹴散らした後、僕の様子を窺うように全く襲ってこなくなった黒いドラゴン達が再び僕に向かって突撃を仕掛けてきた。
「くそっ！　さっきより数が増えてないか!?」
僕はそう言いながらも黒いドラゴン達を迎撃するために空へと上がる。

けど、このまま普通に斬り倒したんじゃ、この黒いドラゴン達がどこに落下するか分かった物じゃないので、下に動けない皆がいる以上、僕は迂闊にコイツ等を攻撃する事ができずにいた。
「ちくしょうっ！　レオの事も心配だから、こんなのに時間を掛けてる場合じゃないのにっ！」
僕にできるのは、倒したら少しでも皆に被害出そうな黒いドラゴンには一切決定打を与えず、動けない皆が確実に被害を受けないであろう、かなり離れた相手にだけ砲撃をぶつけて撃墜する。そんな事だけだ。
一人で遺跡の中に入っていたレオの事も心配だし、皆を庇いながら戦い続けるのも限度がある。
こうなったら無茶であろうが、なんであろうが全魔力をぶつけて、一撃で全ての黒いドラゴンを消してやろうか？
僕がそう思った瞬間だった
「パパ！　皆を遺跡の中に避難させたから、思いっきり戦っても大丈夫だよ！」
「え？」
声のした方を見ると、そこには遺跡の入り口から自分の存在をアピールするように両手を大きく振っているヴィヴィオの姿が目に映る。
そして、ついさっきヴィヴィオに言われた事を思い出した瞬間
「ありがとう、ヴィヴィオ！」
僕は大声でヴィヴィオに感謝の言葉を告げて、僕に向かって突撃してきた黒いドラゴンをギリギリの所で躱して、雷と炎を纏った剣で黒いドラゴンを斬り伏せた。
「さて。こっから先は皆の心配もしないで良いし、時間もないから一切手加減しないよ？　もし言葉が通じてるなら逃げる事を僕は進めるよ？」
最終警告。
僕はそのつもりで、目の前のドラゴン達にその言葉を告げた。
できる事なら、無駄にドラゴンの相手をしたくなかったし、戦わず

に済むならそれに越した事はないと思ったのだが
「「ごぁぎゃあぁぁ――――!!」」
このドラゴン達に僕の言葉は届かないようで、一斉に襲い掛かってきた。
けど、今までのほとんどを回避に徹してきた僕の目には、このドラゴン達の動きは止まっているに等しい。
こっちが手を出さないのなら、いずれ攻撃を受けてしまう可能性は非常に高かったが、今の僕はヴィヴィオのおかげでそんな制限は一切ない。
まぁ、何が言いたいのかと言うと
「悪いけど、君達に勝ち目はないよ」
こういう事だ。
けれど、それでもやはり僕の言葉は通じてないようで
「「ごぁぎゃあぁぁ――――!!」」
黒いドラゴン達は一切攻撃を止める気はないようで、スピードを落とす事無く僕に向かって突っ込んできた。
それに対して
「僕はちゃんと警告したからね？」
僕はドラゴンにそう言い放って、最も僕に肉薄していた５匹のドラゴンを一瞬で斬り倒したのだった。

第六話

「せいっ！」

僕の掛け声と共に振られたのは僕の手に握られた剣。

その剣で狙ったのは、僕の最終警告に全く耳を傾けずに僕へ攻撃を仕掛けてくる黒いドラゴン達だ。

既に僕は４分の３くらいドラゴン達を倒しているのだが、ドラゴン達は全く臆する事なく、僕を攻撃しようとしてくる。

僕は最初、その姿と僕の言葉に耳を傾けない事から、コイツ等には全く知能がない生物なのだと思っていたのだが、少し戦った今はそんな事ないような気がしていた。

なぜか？　それは――

「おっと！　今度は連携攻撃なんてしてくるのか……」

――それは、コイツ等の攻撃パターンが度々変わっていたからだ。

最初はバカの一つ覚えみたいに突撃しかしてこなかったのが、次第に爪で僕を引き裂こうとしてきたり、口から炎を吐いたりと、さまざまな攻撃を繰り出すようになっていた。

なにより、たった今された攻撃は１体のドラゴンが僕を噛み砕こうとして突撃してきて、それを僕が回避してカウンターを入れてやろうと握る剣に力を入れた瞬間、違う１体が僕を引き裂こうと爪で攻撃を仕掛けてくる。

それも僕が何とかギリギリの所で回避して、今度こそカウンターを入れようとすれば、次は３、４体のドラゴンが僕に向かって炎を吐いてくる。

それを回避したり、斬ったり、バリアで防いだりして僕が自分の身を守ると、先に攻撃してきた２体のドラゴンは既に僕から離れており、僕は今の攻防で１匹たりとも倒せず終わってしまう。

そんな攻撃をされたのだ。

こんな事はどう考えても知能がないとできない芸当だろう。

「くっ……！　あんなに連続で攻撃されるんじゃ、カウンターで確実に倒すのはもう無理だな……」

残りのドラゴンの数はざっと見た感じでは２０数匹だ。
最初にクロウに相手しろと言われた通りなら、最初ここには１００匹のドラゴンがいた事になる。それが残り２０数匹なら、随分と数を減らす事ができたと思うのだが
「流石にそろそろしんどいな……」
やはり３年も真面に実践どころか訓練も受けず平和に暮らしていたせいだろう。僕の体力と魔力の消耗が激しいせいで、既に僕は疲労感が凄い事になっていた。
「やっぱ管理局の人間じゃなくても、体くらいは鍛えておくべきだったかな……？」
ずっとコイツ等と戦って分かったのだが、コイツ等は普通の攻撃を繰り出しても全くダメージは受けなかったのだが、雷か炎のどちらかを纏った攻撃ならダメージを与える事ができた。
それはつまり、魔力を込めた攻撃か、ドラゴンの力が込められている攻撃ならダメージを与えられるかの、どっちかと言う事だ。
そして、僕１人でもここまで数を減らす事が出来たドラゴン達に、かなり強いはずのなのは達がボロボロにされたと言う点から考えて、コイツ等はドラゴンの力が少しでも使われていないとダメージを与える事ができないのだろうと僕は思う。
もちろん、これは僕程度の頭で考えた事だから、それが正解かどうかは分からない。
ただ、それが正解であろうと不正解であろう僕にとってはどっちでも構わなかった。
なんせ僕は何も考えずともドラゴンを倒す事ができるんだから、そんな事を気にする必要はまるでないのだ。
「まぁ、魔力を込めた攻撃じゃないと倒せないなら、魔力を込めて攻撃すれば良いだけの事だし問題はないね。ただ、単純に僕の魔力が最後まで持つかは問題だけど……」
僕の目の前に残っているドラゴンは２０数匹。
しかもドラゴン達をカウンターで倒すのは既に無理な状況に加えて、僕の残りの魔力も後わずか。

更に言うなら、この後レオを連れ戻しに行った先でも戦闘を行う可能性がある。
誰がどう見ても絶望的な展開だ。
けど
「まぁ、自分が絶望的に不利な展開なんて毎度の事だし別にいっか」
僕は昔から自分が有利な状況よりも、不利な状況でいる事の方が多かったんだ。
なら、そんな事は今さら気にするような事ではない。
僕がすべき事はただ一つ。
「……よし。行くか……」
覚悟を決めて、少々危険であろうがなんであろうが、僕の体力と魔力が尽きる前に全ての敵を倒す。
僕はそれだけを考えて、目の前にいる残り２０数匹のドラゴンの中へと再び飛び出して行った。
「はぁぁっ！」
僕は雷と炎を纏った両手の剣で、一番近くにいたドラゴンに斬りかかっていく。
まだドラゴンドライブは使用したままなので、僕のスピードは普段の２倍以上は確実に速くなっているだろう。　それは間違いないし、そのおかげで１００体もいたドラゴンを相手にカウンターを正確に入れる事ができたのだろうとも思う。
けど、人は速さには段々と目が慣れて行き、最後にはあまり速いと感じなくなる。
それはドラゴンの目でも同じだったみたいで、最初は僕の動きにまるで付いてくる事ができずにいたのに、今では僕の動きがしっかり見えてるようで、僕に向かって爪を振り降ろしてきた。
このまま僕が回避せず、ドラゴンに突っ込んで行けば確実に直撃だろう。
けど僕はそれが分かっていながら
「構うもんか！　このまま突っ込んでやるっ！」
一切スピードを緩めずに、爪で迎撃しようとするドラゴンに突っ込

んで行った。
きっと、なのはやフェイトが知ったら怒るだろうが仕方ない。
もう、僕の動きにドラゴンが翻弄されないのなら、ここで回避して再度攻撃を仕掛けても結果は同じだろう。
だったら、もう力押しで倒すしかない。
僕はそう判断したのだ。
「せぃやぁぁっ――!!」
「ごぁぎゃぁぁぁ――――!!」
僕の両手に握られた剣と、黒いドラゴンの爪がぶつかり合う。
大きさで言えば確実に僕が不利だろう。
けど
「ごぁぁぁぁ――――!!」
僕はそんな不利な条件なんてものともせず、見事にドラゴンの爪ごと切り裂き、その勢いで首も切り裂いた。
つまり、僕とドラゴンの力のぶつかり合いは僕の勝ちに終わったのだ。
まぁ、僕は元龍なんてチートみたいなドラゴンの力を扱う事ができるし、今はドラゴンドライブを使っているおかげで、身体能力が普段よりも上がっているんだから普通のドラゴンに勝っても何ら不思議はない。
ただ――
「ちっ！　やっぱり連続で攻撃してくるのかっ！」
――ただ、敵は今斬ったドラゴンだけではなく、他にも２０体以上の知能を持ったドラゴンがいるのだ。
たった今、攻撃を終えたばかりで隙ができている僕をコイツ等が見逃すはずがなく、残りの全ドラゴンが僕に向かって極大の炎を放ってきた。
それに対して、僕は全方位にバリアを張ろうかと一瞬考えたんのだが、それは炎が僕に直撃する寸前で中断した。
もちろん、こんな２０数体のドラゴン達の炎を真面に、それも一斉に放たれたものを食らえば僕の体は無事では済まないだろう。

けど、僕は
「テスタロス！」
『了解！』
僕は炎が直撃する寸前に、テスタロスに声を掛けてドラゴンドライブの二属性を、炎の一属性に変更した。
これなら、完全にとは言わないまでも、少しは炎に対する耐久値は上がるだろうと思って、行動に移したのだ。
そしてその目論みは
「けほっけほっ！　くそっ！　やっぱノーダメージとはいかなかったか」
僕のその目論みは見事に当たり、僕は最小限のダメージで炎の塊から脱出する事に成功した。
そしてその瞬間
「このチャンスは絶対に逃さない！　ザボルグ、頼んだよ！」
『ふん……』
今度は雷の一属性に変更した。
これで、さっきの二つの力を使っていた時より速く動けるようになった僕は、未だに僕に向かって炎を放っているドラゴンの下へ一瞬で移動する。
一度は慣れられたスピードも、こっちがより速く動く事ができれば、先程までの慣れなんて関係ないようで、ドラゴンは再び僕の動きに目がついてこれなくなったようだ。
ドラゴンは僕が直ぐ近くにいる事にもまだ気付かないようで、数秒前まで僕がいた場所に炎を吐き続けていた。
どうやら、コイツ等はここで僕を完全に仕留める気でいるようだけど、残念ながら僕はそこにはいないし、僕はこんな絶好のチャンスを逃すほど甘くはない。
僕は念の為にドラゴンドライブは雷の一属性のまま、剣にも極大の雷を纏わせて剣を振るい目の前のドラゴンを斬り倒した。
「っ！」
もちろん、ギリギリまで他のドラゴンに気づかれないように、声は

殺して剣を振るった。
おかげで、他のドラゴンもこちらにはまだ気付いていないようなので、雷のドラゴンドライブのおかげで先程よりも早く動けるのを良い事に、僕は再び無音で1体のドラゴンの背後に回り込む。
そして、また無言で剣を振るってドラゴンを屠る。
それを10回程繰り返した時、ようやくドラゴン達にも限界が訪れて、先程まで放っていた炎が急に止まった。
「っ!?」
僕はそれに気づいて、ドラゴン達が僕の姿がない事に気がついて周りを警戒するんじゃないかと思い、一瞬動きを止めたのだが
「「「ごぁぎゃぁぁぁ――――!!」」」
ドラゴン達は僕の姿が見えないのは完全に消し炭にされたからだと思ったのか、空を見上げて雄叫びを上げていた。
おそらく勝利の雄叫びのつもりなのだろう。
そのおかげで完全にドラゴン達は気を緩めており、今ならどんな派手な攻撃でも一撃だけなら確実に当てる事ができると僕は確信できていた。
ならば、こうやって暗殺するかのように、こそこそ1体ずつ倒す必要があるのだろうか？
どうせ炎を放つのを止めたドラゴンを相手に、暗殺みたいな真似ができるのはあと1回か2回が限界だろう。
だったら少々魔力の消耗はきついだろうが、派手な砲撃を食らわせて一気に数を減らすのが得策じゃないだろうか？
そう考えた僕はドラゴンドライブの属性を二属性に戻してからドラゴン達と少し距離を置き、気づかれないように両手の剣に魔力を溜め始めた。
「（ドラグーン？　僕の声聞こえてる？）」
僕はドラゴン達に気づかれないように、いっさい声は出さないでドラグーンに声を掛けた。
『なんです、マスター？　動きは最小限にしておかないと、流石にバレますよ？』

「（うん、分かってる。けど、どうしても確認しておきたい事があるんだ）」
ドラグーンの忠告は最もだけど、僕にはこの一発を撃つ前にどうしても確認しておかないといけない事がある。　だからこそ、僕はこうして魔力を溜めながらもドラグーンに声を掛けたのだ。
『ドラグーンに確認して欲しんだけど、このドラゴン達以外にも敵が潜んでるか確認できる？』
もし、クロウに言われた事がハッタリで、コイツ等以外に敵がいないなら全力を持って、この一撃で全てのドラゴンを屠る事ができる。
逆にクロウの言う通り、まだ姿を見せてないだけで近くに敵が潜んでいるなら、少しでも余力は残しておかないといけない。
だから、僕に取ってこの質問は非常に大事な事なのだ。
『……マスターも大変ですね。昔は目の前の敵だけに集中していればよかったのに、今は次の相手の事まで考えないといけないなんて……』
確かにその通りだ。
たった3年でどうしてそこまで僕が苦労しないといけないんだろう？　と、思わなくもないが、3年前のＪＳ事件の時はそれだけ僕が大勢の人に守られていたって事なんだろう。
けど、今この瞬間には僕しか真面に戦える人がいないし、ここまで連れてきてもらった時に約束した事でもある。
こればかりは何と言われようと仕方がない事だ。
なんて僕が考えている間に
『いました、マスター。なのはさん達を除けば、あの遺跡の中で動き回る生命反応が3つあります。１つは不明ですが、残り２つはヴィヴィオさんとレオさんですね』
ドラグーンはサーチを手早く終わらせてくれたみたいで、遺跡の中に敵らしき反応がある事を教えてくれた。
そして、その答えは僕の予想通りであり、やっぱりレオもその敵らしき人物と一緒に……ん？
僕はドラグーンの言葉を思い出して、途中で思考停止させた。

今、ドラグーンは何かとんでもない想定外の事を言わなかった……？

「（あのー……ドラグーンさん？　今、なんて言いました……？）」

僕は自分の耳がおかしくなったのかと思い、再びドラグーンに先程の事を確認した。

『ですから、レオさんとヴィヴィオさんの2人と一緒に、謎の生命反応があると言ったんです』

だが、僕の耳はおかしくなかったようで、ちょっと予想外にも程がある言葉が僕の耳へ再び入って来た。

と、同時に僕の今までの思考は全て消え去り

「全力全開！　雷炎龍の粉塵――!!」

僕は少しでも余力を残すなんて事は一切考えず、今現在僕の目に映っている全ての黒いドラゴン達に向けて、僕の全力の砲撃を撃ち放った。

結果

ドオオオ――――――ン!!

完全に油断していた黒いドラゴン達は僕の砲撃を避ける事ができず、僕の砲撃が当たった衝撃で爆音が鳴り響いた。

『……マスター？　いったい私は何のために敵をサーチしたんでしょうか……？』

ドラグーンがなにやら呆れた様子で何か言っているが、僕の耳には届かない。

僕はドラグーンに何か言われたようだが、それを完全に無視して

「ドラグーン、今すぐ2人の所まで案内して」

自分の用件だけを突きつけた。

『はぁ……。まったく私の言葉なんて聞いてませんね……。今のでドラゴンドライブを解除されたみたいですけど、本当に良いんですか？』

「何でもいいから早く案内してよ！　レオはアイツ等にとっては必要な存在みたいだから今は大丈夫だろうけど、ヴィヴィオもそうだとは限らないんだから早くして！」

この時、ドラグーンは何度も僕に注意の言葉を言ってくれていたのだが、その言葉の全てが僕の耳に届く事はなかった。

☆

明久が黒いドラゴンを全て倒す少し前。
遺跡の前でケガをした六課の皆に応急処置を施した後、ヴィヴィオは悩んでいた。
この後、どうしよう？　と。
「皆には申し訳ないけど、わたしじゃ病院にどうやって運べいいのか分からないから、パパが戻って来るまで皆を病院に運ぶ事はできないし……」
全員の応急処置は終わらせたので、本来ならこの後は病院に運ぶべきなんだろうが、先程クロウが言っていたように、ここは無人世界の1つでミッドではない。
つまり、ここはヴィヴィオの全く知らない世界であり、病院が存在するのかも怪しい世界なのだ。
そんな世界で、ヴィヴィオが全員を病院に連れて行くのは無理なので、病院は明久に何とかしてもらうしかない。
ならば、この後自分はどうすれば良いのか？
ヴィヴィオはそれについて悩んでいるのだ。
「今わたしが取れる選択肢は3つ、かな……？」
誰も返事はしないが、ヴィヴィオは自分で確認するかのように今自分が取れる選択肢を声に出しながら、指を順番に折り曲げて行った。
「1つは、パパと一緒に黒いドラゴンと戦う事……」
これは当然、明久が少しでも楽になるように明久の手助けをするためだ。
だが、この選択肢を選んだ場合、自分が本当に明久の役に立つかが心配な所だ。
さっきから明久の戦いを見てヴィヴィオは、ドラゴン達へ攻撃を与えるにはドラゴンの力が込められた攻撃でなければならないような

気がしていた。
だから自分の実力がどうとかではなく、ドラゴンの力を込めた攻撃ができない自分では役に立つ所か、足手まといになる可能性が高い事を心配しているのだ。
「けど、2つ目の1人で遺跡の中へ入って行ったレオを連れ戻しに行くって言うのも、やっぱり心配事はあるしな……」
ヴィヴィオがこの選択肢を選ぶか悩んでいるのはレオが心配だからと言うのもあるが、ドラゴン達を倒し終わった後、レオを連れ戻しに行くであろう明久の代わりに自分がレオを連れ戻せたら、明久の負担が少しは減ると思ったからだ。
ただ、遺跡の中にはクロウの仲間がほぼ確実にいるだろう。もしレオを連れ戻しに行った結果、ヴィヴィオとレオの2人が捕まったりすれば、後で余計に明久が辛くなる。
普段ならレオを即座に連れ戻しに行くであろうヴィヴィオが、今回は慎重にレオを連れ戻しに行こうとしているのは、これが心配だったからだ。
「そう考えると、一番心配事がないのは、3つ目の何もせずにじっと待ってる。かな……」
この選択肢を選べば自分が危険な目に合う事はないし、明久に余計な迷惑を掛ける事もない。
危険があるとすれば、もし明久が黒いドラゴン達に敗れれば、今度は自分が襲われる事くらいだ。
だが、そもそも明久が黒いドラゴン達に負けるはずがないとヴィヴィオは思っているので、そんな心配は全くする必要がない。
故に、3つ目の選択肢は一番安全かつ迷惑を掛ける事がない選択肢である事は間違いないのだが
「けど、パパが必死で戦ってる時にわたしだけ何もしないでいるなんてできるわけないよ！　わたしだって、少しはパパの役に立たなきゃ！」
ヴィヴィオは明久に迷惑を掛けない事よりも、少しでも明久の役に立つ事をしたいと思い、自分から行動を起こす事に決めていた。

ならば今度は、どの選択肢を取るかだが
「まず3番は却下だから、残るは1か2のどっちか……。で、1は全く役に立たない所か足手まといにしかならないだろうから、残るは……」
ヴィヴィオは少し考えてから答えを出して、静かに遺跡の入り口から奥を見つめる。
ようは、レオを連れ戻しに行く事に決めたのだ。
「ふぅ……。大丈夫。強い人がいたら無理に戦わずに隙を見てレオを連れ戻して、いなかったらレオを見つけだして直ぐにここまで戻ってくれれば良いだけなんだから……」
ヴィヴィオは一度深呼吸をして、それぞれの対処法を口に出す。
こうやって予め確認しておけば、いざその時になっても慌てず対処できる。
ヴィヴィオはそう自分に言い聞かせて、レオを連れ戻すために遺跡の奥へ向かって走り出したのだった。

☆

ヴィヴィオがレオを探すために、遺跡の中へ入って行った頃。
「あら？　まさか、あなたが自分からここまで来るとは思っていなかったわ」
そう声に出したのは、レイジングハートのような、如何にも魔法の杖と言ったような物を持った女だった。
そして、この女に声を掛けられたのは
「っ!?」
1人で遺跡の中へと入ってしまって行った、レオだった。
「た、助けて！　ヴィヴィオ姉ちゃんっ！」
女を見た瞬間、すぐさまヴィヴィオに助けを求めるレオ。
だが、ここまで1人で来てしまったせいで、どんなに大声で叫んでも誰も返事はしてくれなかった。
「何も考えずに1人で出歩いてたくせに、なぜ助けを求めるのかし

ら？　それに、私と貴方は初対面なんだから、そんなに警戒する事ないでしょ？」
　レオが咄嗟に助けを求めたのは、この女から明久と同じような感覚を覚えたからなのだが、そんな事を知らない女はゆっくりとレオに近づいていく。
「や、やだ……っ！　こっちに来るな――!!」
　それに対して、レオは口では必死に抵抗するが、かんじんの足は全く動かせず、女はレオの目の前で立ち塞がるように、レオの目の前で足を止める。
「全く……。うるさいガキね。用が済んだら自由にさせてあげるから、少し黙りなさい」
　レオは別に、この女に連れてこられたわけではないのに、女は面倒臭そうにレオの手を引っ張っていく。
　口ぶりからしてこの女はレオに用事があり、レオをここまで連れてくるつもりだったのは間違いないだろうが、実際には女がレオをここまで連れてきたわけではないので、女が今ここまで偉そうにレオに命令できるような立場でない。
　しかし、レオはこの女には逆らうべきでないと直感で感じ取り、女に抵抗するのを止めて、腕を引っ張られながらも何も口に出すことはなかった。
　この女からは、自分の嫌いな明久と同じような感じがする。
　けれど、明久のように優しくはなく、自分の気に入らない事があったなら、容赦なくその気に入らないものを潰すような女。
　レオはこの女の事は全く知らないが、直感でそんな女だと感じ取っていたのだ。
「ふん。やればできるじゃない」
　女は自分の言った通りに黙りこくったレオを満足そうに見つめた。
　だが、その目からは明久やなのは達がレオに向ける暖かさのような物は一切感じられない冷たいもので、レオにさらなる恐怖を与えるものだった。
「ほら、ここに書いてある文字を読みなさい。そうすれば、今回だけ

は見逃してあげるから」
女はレオの腕を引っ張って遺跡の最深部まで連れて行くと、そこに置いてあった巨大な石版の前で足を止めて、レオに文字を読むように促した。
「私達ではこれを読む事ができないの。これを読めるのはあなただけ。……ほら、さっさと読んでくれるかしら？」
女とレオの目の前にある石版には何かが書いている。
それは文字なのか記号なのかも分からないような、見た事もない形をしていた。
確かに女の言う通り、こんな形をしたものを読めと言われても誰も読む事ができないだろう。
なんせその文字はベルカ時代の時に使われていた文字でも、ましてや現在使われている文字でもないのだ。
もし石版に刻まれておらず、そこら辺の紙に書かれていたならば、小さい子どもが何も考えずに落書きした物と言われても、誰も疑う事はなかっただろう。
だが
「この文字は人類が刻んだものじゃない。大昔、まだ7体の龍が暴れまわっていた時代に刻まれた物なの。本来ならこれを読める者はもう存在しないのだけど、あなたにならこの文字が読めるんでしょ？」
女はこの石板に書かれている文字はもう誰も読めない物と言いながらも、レオにだけは読めると断言して、レオに早く読むように促してくる。
「む、無理だよ……。僕、こんなの読めないよ……」
レオは石版を見もせずに、即座に自分では読めない事を女に告げた。
考えてみればこれも当然だろう。女は「あなたになら」と言った。
だが、レオは自分にそんなができるなんて事は知らないし、現代の平仮名すら読む事ができなかったのだ。
どう考えてもそんなレオが、こんなわけの分からない文字を読める

はずがないのだが
「その言葉は見てもないのに言う言葉じゃないわね。それに、あなただってまだ死にたくはないでしょ？　これをちゃんと読んでくれたら、あなたを殺すのは止めてあげるわ」
女はさらにレオを脅迫するように、後半の言葉をレオの耳元で静かに呟いた。
それはつまり、今この場で石版の文字が読めないならレオは自分達に取って必要ないから殺す。
女が言ったのはそういう事だった。
「うっうぅぅ……」
レオは涙を零しながら石版へと目を向けた。
この女は本気だ。本気で自分に価値がないと判断すれば迷わず自分の事を殺してくる。
レオはそれを直感で理解し、ただ黙って殺されるくらいならダメ元で石版の文字が読めるか確かめて見よう。そう思ってレオは死を覚悟しながら石版に目を向けたのだが
「……あ、れ……？」
だが、石版に目を向けたレオは戸惑いの声を上げた。
確かに、自分はダメ元で石版に目を向けた。現代の文字である平仮名すら読めなかったのだから、こんなわけの分からない文字が自分に読めるわけがない。
自分でもそう思って、死まで覚悟して石版に目を向けたのだが
「読め、る……？　あれ？　なんで僕はこの文字が読めるんだろう……？」
なぜかレオは石版に書いてある文字の全てを読む事ができていた。
「だから言ったでしょ？　あなたの力なら、これを読む事ができるって……。ほら、さっさと読み上げなさい。それともやっぱり死にたいの？」
実際問題、女としてはレオが石版の文字を読む事ができるなら、彼女達にとってレオは今後かならず必要な人材だ。
だからレオを殺すなんて選択肢を、この女が取れるはずはなかった

のだが……。
「や、やだ……。死にたく、ない……」
「そう。だったら、早く読み上げなさい」
「は、はい……」
女は一度、充分過ぎる程の恐怖をレオに与えた。
その恐怖を忘れない限りレオが女に逆らえるはずもなく、レオには女の言う通り石版に書いてある文字を読むしか選択肢はなかった。
「氷の地にて7体の元龍の力が揃いし時、我は目覚める。
我が目覚めし時、世界は滅ぶであろう。
願わくば、我が目覚める事がない事を我は祈る……」
レオは石版に書いてある文字を全て読み切ったが、何の事か全く分からなかった。
この女には意味が分かるのかレオは少し気になり、こっそりと女を盗み見ると
「だったら、これは何て書いてるのかしら?」
女は懐から一枚の紙を取り出し、それをレオに見せてくる。
レオにはこの女が何をしたかったのか全く分からなかったが、今はこの女に逆らってはいけない事だけは確かなので、おとなしく女に渡された紙を読み上げた。
「氷の龍が目覚めし時、龍神が蘇り、再びドラゴンの世界が築かれるであろう……」
それは石版に書いてある文字に比べるとかなり文字は少ないし、文字も微妙に違う形をしていた。
レオは一瞬、本当にこれで合ってるのか、不安に思ったのだが
「どうやら、嘘をついて適当に文字を読んだわけじゃないみたいね……」
女はレオの事を満足そうに見ていたので、少し安堵した。
しかし嘘をついてとは、いったいどういう意味なんだろう?
レオは女の言った事がイマイチ理解できず、首を傾げた。
すると女はそんなレオを見て、今の言葉がどういう意味なのか話し始めた。

「本当は私、こっちの紙に書いてる内容については知ってたのよ。だからもし、あなたが適当な事を言っていたら、すぐに私はそれに気づく事ができたって事よ」
それはつまり、もし自分が嘘をついて適当な事を言っていたら、自分の事を殺していたと言う事だろうか？
レオは女の言葉をそのように受け取っていた。
「まぁでも、ちゃんと読んでたみたいだからご褒美をあげるわ」
「ほ、ホントに……？」
レオは女の言葉をすぐに鵜呑みにしたりせず、警戒しながら女に言葉を返した。
本当の所はどうか分からないが、レオの頭の中では、この女は自分を殺そうと考えていたような人物と言う事になっている。
そんな人物を簡単に信用しないのは当然の事だろう。
「ええ、本当よ。ただ、今から起こる出来事があなたにとってご褒美になるかどうかは分からないけどね？」
女はそれだけ言うと、レオが遺跡の最深部へ来る時に通った、外へと繋がるたった一つの通路へ杖を構え、通路に視線を向けながら口を開いた。
「もうとっくにバレてるわよ？　隠れても無駄だから早く出てきなさい。それとも、この子にケガをさせたくなかったら出て来なさいと言った方が言う事を聞いてくれるかしら？」
女の突然の行動を不思議に思ったレオも、女と同じように通路へと視線を向けた。
そして、２人が通路に視線を向けてから数十秒後。
「ど、どうも……」
「ヴィヴィオ姉ちゃん!?」
女とレオの目の前に現れたヴィヴィオの姿を見て、レオは驚きの声を上げたのだった。

第七話

「ヴィヴィオ姉ちゃん!?」
いかにもな魔法の杖を持った女とレオの目の前にヴィヴィオが姿を見せた瞬間、レオは心底驚いたような声を上げていた。
「その様子だと、あなたは気づいてなかったみたいだし、どうやら少しはご褒美になったみたいね。あ、因みにこの子、ずっと私達の事を見てたわよ?」
女の何気ない言葉に冷や汗を流すヴィヴィオ。
それは、焦りと恐怖から来るものだった。
「い、いつから気づいてたんですか?」
「最初からに決まってるでしょ?」
「さ、最初って言うのは……」
「あなたが私達の事を見つけて、隠れながら私達の様子を窺い始めた時。つまり、この子が石板を読み始めた時からね」
「……」
女の返答にヴィヴィオは言葉を失っていた。
この質問は女の実力がイマイチ把握しきれていないヴィヴィオが、少しでも情報を得ようと思って聞いた言葉だったのだが、女の答えはあまりにも予想外過ぎたのだ。
正直、女がヴィヴィオの気配に気づいていた時点で、この女が強い事は分かっていた。
しかし、さすがに本当に最初から気づかれていたとは思いもしなかったのだ。
「どうしたの? もしかして、少しくらいなら気づかれてない瞬間があるとでも思ってたの? だとしたら大人を舐め過ぎじゃないかしら?」
「そ、そんな事は……」
ない。とヴィヴィオは言いきれなかった。
なぜなら、女の言った事は少なからず本当の事なのだ。
遺跡に入った時に、敵がいた場合は無理に戦わず隙を見てレオを連

れ戻せば良い。なんて考えは、相手に気づかれないのが前提の考えだ。
そもそもの話、自分より相手の方が強いなら、普通に隠れている事ですら難しい事であるはずなのに、ヴィヴィオは完全に隠れていられるつもりでいた。
それはつまり、無意識の内にヴィヴィオが自信過剰になっていたのと同時に、相手の事を舐めていた事にもなるのだ。
「まぁ、目的はもう果たしたし、あなたには大して興味もないから今回は見逃してあげる……。と、言ってあげても別に良いんだけど――」
女はそこで言葉を止め、自分の口に人差し指を当てた。
すると
『ヴィヴィオ――！　レオ――！　2人ともどこにいるの――!?』
いなくなった2人を探す、明久の声が遺跡の最深部まで響いてきた。
「……っ！」
「パパ……」
それに対してレオは少し複雑そうにしながらも、明久が助けに来てくれた事で少し安心した表情になる。
しかしヴィヴィオは自分の行動の結果、明久に余計な迷惑を掛けてしまったので申し訳なさそう表情を浮かべた。
「――今ここで、あなた達を見逃してあげても、扇と同様にドラゴンユニゾンを使う事ができる雷炎龍に私が殺されそうじゃない？　けれど、雷炎龍の1人娘がいれば何とかなると思うの」
女は申し訳なそうな表情を浮かべるヴィヴィオに、更に追い打ちをかける言葉を言い放った。
「さすがに外にいるドラゴン全部を余裕で倒せはしなかったと思うけど、もしドラゴンユニゾンを使うだけの余力を残していたら、私なんて瞬殺されるわ。だから、あなたには雷炎龍が本気を出さないように人質になってもらうわ」
「そ、そんなの断るに決まって……」

「嫌なら別に良いけど、あなたの代わりにこの子が人質になるだけよ？」
女がヴィヴィオの言葉を遮って、そう言った瞬間。
「痛っ！」
女はレオの少し上空に魔法陣を展開し、そこから出したバインドでレオの両手の自由を奪って無理やり上に引っ張り、レオの足が地面スレスレの位置になるまで持ち上げた。
「レオっ！」
そんなレオを見て、すぐさまレオに駆け寄ろうとしたヴィヴィオ。
だが、女はヴィヴィオからレオを隠すように立ちふさがり、ヴィヴィオは一歩前に進んだだけで再び足を止めざる負えなかった。
「ほら、どうするの？　あなたが人質になる？　それともこの子を見捨てる？　あなたに決めさせてあげるから早く決めなさい？」
「そ、そんなの選べるわけ……」
女の言葉に表情を歪めるヴィヴィオ。
当然だ。明久の負担を少しでも減らそうと思ってここまでレオを助けに来たのに、こんな所で自分が人質にされれば明久に余計な負担を掛けさせる事になる。
しかし、だからと言って目の前で苦しんでいるのレオを無視する事もできない。
故にヴィヴィオはどちらも選ぶ事ができないのだ。
「ふーん……。なら、選びやすいようにもう少し具体的な条件を出して上げるわ」
「……条件？」
「ええ。あなたにとっては良い話しよ？　あなたが人質になる場合は拘束するだけで、この子のように苦しむような事はしないと約束してあげるってだけの、私に取っては何のメリットもない条件を付けてあげる」
それはつまり、レオが人質になった場合は容赦ない扱いをすると言う事であり、レオの代わりにヴィヴィオが人質になれば、本当に女が明久に瞬殺されないようにするための人質にしかしないと言う事

だった。
「ほら早く。のんびりしてたら雷炎龍が来ちゃうでしょ？」
そう言って女は魔法の杖をレオに向け、レオの手を拘束しているバインドを更に強く締め付けさせた。
「うっ……！　いっ、痛いっ……！」
腕を引っ張られるような痛みと、腕を強く締め付けられる痛み。
そんな二つの痛みを与えられ、レオの目からはついに涙が零れ始めていた。
「レ、レオっ！　わ、分かった！　わたしがレオの代わりになるから、もうこれ以上レオを傷つけないでっ！」
そして、そんなレオの姿を見てヴィヴィオが黙っていられるはずもなく、ヴィヴィオは気づいた時にはそう口を動かしていた。
「そう。じゃあ、あなたにはバインドを掛けさせてもらうわね」
そう言って女はヴィヴィオに杖を向け一瞬でバインドを掛け、次いでレオを拘束していたバインドを外して、レオの両手を自由にしていた。
「人質を二人も取って雷炎龍にガチギレでもされたら私が困るから、約束通りあなたは解放してあげるわ。ほら、あなたは早く雷炎龍の所に行きなさい」
レオから離れ、ヴィヴィオの近くまで歩いてから、女はレオに向かって言い放っていた。
「で、でも……。ヴィヴィオ姉ちゃんを置いてなんて……」
「私は大丈夫だから心配しないで、レオ。それとパパがどんなに嫌いでも、今だけは絶対にパパの言う事を聞いてね？　絶対にパパが守ってくれるから……」
「で、でも……」
「お願い、レオ……」
レオは一瞬、ヴィヴィオを置いて一人で明久の下へ向かうのを拒もうとしたが、ヴィヴィオがそれを望んでいない事に気づき、レオは力なくヴィヴィオの言葉に頷いていた。
「ヴィヴィオ姉ちゃん、絶対に助けを呼んでくるから……」

そう言って、レオは拘束されているヴィヴィオに背を向けて走りだし、この最深部に一つしかない出入り口に辿り着いた、その瞬間。
「その呼んでくる助けって、もしかして僕の事かな、レオ？」
「あっ……」
「パパっ！」
レオとヴィヴィオの目の前に、この場にいる人物で女が唯一警戒していたであろう人物。雷炎龍こと、吉井明久と言う名の希望が二人の目に映ったのだった。

☆

「ちっ……！　もう来ちゃったのね、雷炎龍……」
僕が遺跡の最深部へ辿り着き、ヴィヴィオはバインドで拘束されているものの、ぱっと見た感じ二人にケガ等がない事を確認して一安心していると、いかにもな魔法の杖のデバイスを持った女が舌打ちと共に、僕に向かって毒を吐いているのが聞こえてきた。
他には誰の姿も見当たらない所を見ると、クロウの言っていた今回の僕の敵って奴は、この女の事で間違いないようだ。
「早く病院に運ばないといけないケガ人も大勢いるし、人が保護してる子どもを怖がらせて、挙句の果てには人の娘をバインドで拘束してる奴がいたからね。急いで黒いドラゴン達を倒してきたんだよ」
「……雰囲気と口調が一致してないわよ」
「心外だな……。これでも、今すぐにでも斬りつけたい衝動を我慢して、凄く穏やかな雰囲気を出そうとしてるんだよ？」
じゃないと、今すぐこの遺跡をぶっ壊してしまいそうだから。
「……言っておくけど、あなたの娘は拘束してるだけで私は何もしてないわよ？　その子だって、一度拘束したくらいで、特にケガなんて負ってないはずだけど……？」
「拘束してるのは事実でしょ？」
「敵側の子どもと一緒にいて、殺さずに済ませよと思ったら拘束くらいは必要でしょ？　殺すどころか外の人達と違ってケガすらさせ

てないんだから、それくらいは許して欲しいわね」
なるほど。確かに相手を殺したり、ケガを負わせないようにしたりするには、バインドで拘束するのは理に適っているだろう。
だけど
「それでもレオとヴィヴィオの二人を怖がらせた事に変わりはないよ。それに、六課の皆を傷つけたのも君なんでしょ？　だったら、僕が戦う理由はそれだけで充分だよ……」
僕はそう言って、女に両手に持っている剣を構えた。
けれど
「ちょ、ちょっとタイム！　自分の娘が拘束されてるのが目に見えないの!?　それと、あなたのお仲間を傷つけたの私がメインじゃなくて、あなたが倒した黒いドラゴン達なのよ!?　それなのに、いきなり戦闘態勢って言うのは、さすがに考えが性急過ぎるんじゃないかしら!?」
僕が構えているのにもかかわらず、女はデバイスを構えたりしないで、まるで子どもが言い訳している時のように、慌てて僕が攻撃しようとするのを止めてきた。
「……だったら、とりあえずヴィヴィオを解放してくる？　そしたら、話しくらいは聞いてあげても……」
正直、いくら相手が憎くても戦意のない相手に攻撃するのは気が引ける。
仕方がないので僕は一度戦闘態勢を解き、女に向かって僕がそう言った瞬間
「わ、分かったわ……。なんて言うわけないでょうがっ！」
「なっ!?」
女は何の予備動作もなしでデバイスを振るい、一瞬で僕とレオの周りに魔法陣を複数個展開していた。
「さて、形成逆転ね、雷炎龍？　あなた一人ならこの状況でもどうにかなったんでしょうけど、さすがに子どもを連れた状態じゃ、どうしようもないでしょ？」
いつ構えたのか、そう言った女はいつの間にか僕らに向けてデバイ

スを構えていた。最悪な事に冗談ではなく、本気で今すぐに僕らを攻撃しようと思ったらできる状況だ。
女の言う通り、僕一人なら魔法陣に囲まれていても強行突破してヴィヴィオを助ける事はできただろう。けど、レオも巻き込まれるとなると話は別だ。
僕が守らないといけないのはヴィヴィオだけじゃない。レオもだ。その守るべき対象であるレオが危険にさらされたんじゃ本末転倒だ。
「……何が目的なの？」
いつ魔法陣から魔法が放たれるか分からないので、僕は直ぐにレオを庇えるように足腰に力を入れたまま口を開いた。
「簡単な話よ。私を見逃しなさい。正直、あなたと真面に戦って勝てる気がしないの。だから、あなたが私を見逃がしてくれるなら、二人とも無傷で返してあげるわ」
それはつまり、なのは達を傷つけた奴を目の前にして、僕に見逃せって言ってるのか。
しかも、なのは達の敵って事は、この女はきっと犯罪者なんだろう。そんな奴を見逃すなんて事、普通だったら絶対にあり得ない選択肢だっただろう。
けど、今はそんな事を言ってる場合じゃない。レオとヴィヴィオの二人を確実安全に守れるなら、今回だけは見逃す事も仕方ないだろう。
「……分かった。二人を無傷で解放してくれるなら、その条件を呑むよ。ただし、二人の解放が先だ。そうじゃなきゃ、君に嘘をつかれる可能性もあるからね」
「……賢明な判断ね。でも、それなら私の身の安全はどうやって保障してくれるのかしら？　あなたの言い分は私にも当てはまるわよね？」
「そこは僕を信用してもらうしかないいね」
「無理ね。敵であるあなたの言う事を１００％信用する事なんてできるわけないでしょ？　絶対にあなたが手を出してこないって確証

が得られないと、二人を解放する事はできないわ」
睨み合い。
お互いに相手を信用しきれないので、話しは平行線のまま動かない。
そりゃそうだ。僕も相手を信用できないから先に二人を解放するように条件を出したんだ。相手だって僕を完全に信用する事はないだろう。
「……だったら、約束を守る気がある証明としてヴィヴィオを先に解放してよ。その後で君はここから離れれば良いし、僕やレオの周りの魔法陣を消すのは、君がこの部屋から出る直前にすれば逃げる時間も充分に確保できるんじゃない？」
「……魔法陣を消すのは部屋を出てからよ」
「分かった。それで呑むよ」
よし！　これで交渉成立だ。
この条件なら、まずヴィヴィオの安全は確保できるし、もし裏切られても僕がレオを庇えばレオが大ケガをする事もないだろう。
それに、こっちはあまり時間を掛けるわけにはいかない。
僕等は早くなのは達を病院に連れて行かないといけないだ。こんな所でいつまでも睨み合ってる場合じゃない。
早期に交渉成立できるなら、悪い条件じゃないはずだ。
……まぁ、おそらく追いかけても捕まえる事はできないだろうけど。
「なら交渉成立ね」
女はそう言って、杖を一振りしてヴィヴィオのバインドを解除した。
「っ！　ヴィヴィオ姉ちゃん！」
「動くな！」
ヴィヴィオが解放されるのと同時にレオがヴィヴィオに近寄ろうとした瞬間、女はレオに向かって怒鳴りつけ、それに驚いたレオはビクッと震えて体を硬直させた。
「ガキが。勝手に動くんじゃないわよ。雷炎龍一人だと、こんなの

拘束のうちに入らないんだから、そこで大人しく人質になってなさい」
そう言って女はレオに杖を向けたまま部屋の出口へと近づいていった。
ちっ。今の勢いでレオが魔法の射程外まで出られたら一気に形成逆転できたんだけどな……。
どうやらあの女は、それに気づかないようなバカじゃなかったみたいだ。
なんて考えてる内に、女は部屋の出口まで辿りついていた。
「さて……。この扉を開けたら契約は終了ね、雷炎龍。なかなか緊張感のある時間だったわ」
「僕はそんな緊張感味わいたくなかったけどね。と言うか、どうでも良いけど僕の事雷炎龍って呼ぶの止めてくれない？　その事あんまり他の人に知られたくないんだよね」
既に管理局では調べたら直ぐにバレる情報みたいだけど、それでも一応悪あがき位はしておきたい。
「あら、そうなの？　もったいないわね。せっかく元龍の力を持ってるっていうのに」
「そんな良いもんでもないよ。扱いを間違ったら世界を滅ぶすなんて、できれば使いたくない怖い力だよ」
「怖い力？　意見の相違ね。元龍の力があれば神にだってなれるのに」
「神？　元龍の力で神になれるだって？」
「そうよ。元龍の力があれば神になれる。……正確には神と同等の力を得る事ができる」
「……本気で言ってるの？」
もし本気で言ってるんだとしたら、この人は相当頭が悪いか、頭のネジが五、六十本抜けてるに違いない。
「もちろん本気よ？　興味あるなら私達の仲間になる？　雷炎龍の力を持つあなたなら大歓迎よ？」
どうやら本当にどっちかのようだ。

「誰がなるもんか！　そんな頭の悪そうな集団なんか！」
「頭の悪そうな集団とは失礼ね……。私達はシルメディアンよ。私はシルメディアン幹部のハンナ。ハンナ・ルディよ。もし気が変わって私達の仲間になる気になったら、その時は歓迎してあげるわ。吉井明久君。……もし五体満足だったらね」
そういった瞬間、女……改めハンナは扉を開け、その瞬間に僕等の足元に展開していた魔法陣を起動させた。
「なっ!?　……くそっ！」
僕は魔法陣が光りだした瞬間、僕はレオを頭から抱え込み、バリアを張ってうつ伏せになった。そのわずか一秒後。

ドッカーン！

魔法陣が爆発し、その爆風が僕等を襲ってきたのだった。

第一部キャラ紹介？　※本編とは関係ありません

主人公

吉井　明久

現在は異世界からミッドチルダに移住しており、なのは・フェイト・ヴィヴィオの四人家族。

７体の元龍のうち、雷と炎の龍の力を持っており、ＪＳ事件の時は風の元龍の力を持つ扇　風月を相手にして事件解決に奔走した。

元龍の能力はドラゴンドライブ・ドラゴンユニゾンまで扱う事ができる。

他キャラ

扇　風月

風の元龍の力を持っている。

ＪＳ事件ではスカリエッティに加担し、明久の宿敵として明久の目の前に立ちはだかった。

現在は魔力を封印された後、拘置所にて管理局の監視下に置かれている。

元龍の能力はドラゴンドライブ・ドラゴンユニゾンまで扱う事ができる。

竹原（教頭）

元龍の研究をしているドクターとしてミッドチルダに移り住み、明久の持つ白銀の腕輪に細工をし、元龍の研究をするために雷と炎の元龍の力を持つ明久をミッドチルダに送りこんだ張本人。

途中、協力関係であったはずのスカリエッティから用済みとされ、スカリエッティの命令により、ウーノに背中から刺され、その後管理局から死亡と認定されている。

明久をミッドチルダに転移させた、いわば全ての元凶。

穂海

第９７管理外世界、現地惑星名称「地球」

異世界派遣任務の時に、明久がトラックから助けた女の子。
当時はランドセルを背負っておった小学生だった。
明久と別れる際「大きくなったら大っきいお兄ちゃんのお嫁さんになってあげる」発言をして、一瞬明久にロリコン疑惑が生まれた。

鉄人（西村先生）
第９７管理外世界「地球」の住人。
明久達が銭湯に行った際に、サウナで明久と遭遇した。
容姿、肉体は明久が元いた世界の鉄人となんら変わらないが、こっちの世界では高校の教諭ではなく中学校の教諭をしている。
明久曰く、元いた世界の鉄人とは違い、一人でずっとしゃべり続けられる程のおしゃべり。さらに人の話は全く聞かない、いわゆる迷惑野郎。

吉井　明久（第９７管理外世界「地球」に住んでいる方）
〝こっち〟の世界の吉井明久。
前作のサウンドステージ・温泉編にて名前だけ登場。
鉄人とは中学時代の教師と生徒の間柄。鉄人からの評価は良く、中学卒業時にはアメリカのボストンにある超一流大学に飛び級で進学している。
明久と違い、教師からの評価もよく、超が付く程の優等生。頭は異常な位賢いが、運動神経は皆無だった。

吉井　穂海
明久の元の世界の住人で、明久とは血縁関係。
中学生にして吉井家、本家の当主を務めていた。
明久が異世界の住人となった事で、当主の役目を果たし終えたので、現在は普通の女の子として人生を謳歌している。

第八話

「パパ、レオ！」

魔法陣が爆発し、爆風がパパとレオを襲った直後、私はパパ達の名前を大声で叫んだ。

「……」

けれど、二人からの返事は一向に返ってこない。

「そんな……」

今は土煙のせいで何も見えないけど、爆発する直前にパパがレオの事を庇っている姿が一瞬だけ見えた。だから、もしかしたらレオはほとんどケガをしてないかもしれないけど、パパは完全に直撃していた。仮にギリギリの所でバリアが間に合っていたとしても、パパが無傷でいられる可能性は極端に低い。むしろ、動けない位の大けがを負っていてもおかしくない位だ。

「は……早くパパ達を助けないとっ……！」

パパが大けがをしているかもしれないと考えると体が震えてきて、まだ土煙も治まらないうちに爆発の中心地へと向かおうと、わたしが足を一歩踏み出した瞬間だった。

「ぶはっ！　さすがに今のは死ぬかと思ったぞ、こんちきしょう！」

土煙の中からパパがレオを抱えて飛びだしてきた。

「パパ！　レオ！」

二人の姿を目で確認できた私は、何も考えずパパに飛びつくかのように抱き着く。

わたしの中ではパパがわたしを受け止めてくれて、そのまま無事だった事を喜びあうものだと思っていたんだけど……。

「いくよ、ヴィヴィオ！」

パパは感動の再会なんてどうでも良いかのように、パパに飛びついたわたしをレオとは反対の腕で抱きかかえると、そのまま出口に向かって一直線に走り出してしまった。

「あのー……パパ？　どうしてそんなに急いで出口に向かってるの？」

「どうしてって、何言ってるのさ!?　こんな所で爆発なんて起こされたら、こんな遺跡なんて一瞬で崩れて生き埋めにされちゃうじゃないか！」
「あ、なるほど」
一瞬、わたしとの感動の再会よりもハンナを追いかける事の方が大事なのかと思ってしまった事に罪悪感を感じてしまう。
普段から優しいの知ってるけど、わたし達を助けるために子ども二人を抱えたまま必死で出口まで走ってくれてるパパの真剣な顔がかっこよくって、ちょっとドキドキしてしまう。
なのはママやフェイトママは、普段は優しいけどいざという時は頼りがいがあって、かっこいい姿に惚れたのかな？
なんて考えていると、パパはおそろしく速い速度で出口までたどり着いてしまった。
「見えた！　出口だ！」
パパがそう叫んだ瞬間、今パパが走っている通路の奥側。つまり、今パパが全力疾走して通ってきた道が崩れてきた。
「パパ、大変！　どんどん崩れてきてる！」
「くそっ！　音がしてるから、そんな気はしてたけどやっぱりか！　まだ皆を遺跡の外に出せてないっていうのにっ……！」
パパの言葉を聞いて、わたしもまだママたちを遺跡の外に出していなかった事を思い出す。
「あ！　ほんとだ！　ど、どうしようパパ!?　このままじゃ、ママたちが生き埋めになっちゃうよっ……！」
「……」
わたしの問いかけにパパからの返事は返ってこない。
さすがに今回ばかりはお手上げなんだろうか？
「ど、どうしよう……」
こんな事になるなら、ママたちを遺跡の中に運ぶんじゃなかった。
パパを助けようとして、レオを探しに行って逆にわたしが人質になってパパに迷惑をかけて、今度もパパを助けようとしてママたちを遺跡に運んだら、それも今となっては逆効果。

全部わたしのせいだ。パパを助けたかったのに、わたしがパパの足を引っ張ってる。
そう考えると、わたしは目から涙がこぼれ落ちそうになった。
「ヴィヴィオ。泣くのはまだ早いよ。その涙は皆を助け終わるまで取っておくんだ」
「え？」
パパの一言で零れ落ちそうになっていた涙が一瞬で引いていく。
まだ、皆を助けられる手段は残されてる……？
「み、皆を助けられるの!?」
「ちょっと危ないかもしれないけど、ヴィヴィオとレオが手伝ってくれたらなんとかね」
「手伝う！　皆を助けるためなら何でもするよ！」
「ぼ、僕も手伝う！」
「ありがとう」
パパはそう言って、ここに来てから初めてニコリと笑った。
なんでかな？
ちょっと危ないかもしれないと言われたのに、わたしはパパの笑顔を見たら何でもできるような気がしていた。

☆

ヴィヴィオとレオを抱えたまま出口にたどり着いた僕は、二人を下ろしてから一秒と経たずに遺跡の中に戻っていた。
なぜ戻ったのか。そんな理由は簡単だ。皆を助ける。ただそれだけのためだ。
「いいね、二人とも！　危ないと思ったら直ぐに遺跡から出るんだよ！」
「「はい！」」
僕が一切後ろを振り返らずに叫ぶと、二人から元気の良い返事が返ってくる。
うん。本当に二人とも素直で良い子だ。

二人のためにも、皆のためにも僕が頑張らないとね。
「二人とも準備は良い？」
僕はなのは達が横になっている場所より少し奥に入った所で足を止め、二人に声をかける。
「ヴィヴィオはいつでも大丈夫！」
「ぼ、僕も大丈夫！」
「オッケ！　じゃあ、始めるよ」
そう言ってから僕は目を閉じた後、一つ深呼吸して息を整える。
そして、僕は再び目を開けたその瞬間。
「はあああっ……！」
僕は残りの魔力全てを倒壊していく遺跡の中に向かってぶっ放した。
その魔力が直撃した瞬間、さっきまで崩れてきていた遺跡の一部であろう瓦礫の動きが止まった。
「い、今だ！　早く皆を！」
「「はい！」」
僕が叫ぶよりも先に動き出していたヴィヴィオとレオの二人は六課の皆を引きずるような形とはいえ、一人ずつ確実に遺跡の外へと運び始めた。
今回僕が二人にお願いした事。それは、できるだけ短い時間で皆の事を外に運びだす。それだけだ。
普通に考えたら、すでに倒壊し始めていた遺跡から皆を救出するのは無理だ。どうやったって時間が足りない。
でも、それは逆に言えば時間さえあれば救出できるという事だ。なら、少しの時間だけでも僕が倒壊を抑えれば良い。
そう結論を出した僕は、倒壊してくる遺跡の中で一気に魔力を放出する事で倒壊しようする力を逆に押し返す事にしたのだ。
もちろん、押し返す力弱かったり、僕の魔力が足りなければ失敗しただろうし、その場合は六課の皆はもちろんヴィヴィオやレオも生き埋めになる危険もあったわけだけど……。
まぁ、ヴィヴィオやレオを巻き込むのにかなり抵抗はあったけど、

ヴィヴィオが凄い責任を感じてそうだったから結局巻き込む事にしたんだけど、それは正解だったみたいだ。
正直、常に魔力を放出し続けてる今の僕には、ここから一歩たりとも動く余裕はない。
結果論だけど、二人に協力してもらって本当に良かった。
「くっ……！　これ、結構きついっ……！」
「頑張って、パパ！　後はエリオとキャロ、ティアナさんの三人だけだから！」
僕が限界に近いのを見越してエールを送ってくれるヴィヴィオ。
娘が応援してくれてるんだ。ここはパパとしてはなんとか踏ん張り切りたい所。
僕は最後のひと踏ん張りと言わんばかりに全力で魔力を放出した。のだが……。
「くそっ……！　ダメだっ。もう持たないっ……！」
僕の最後の頑張り虚しく、奥の方から徐々に瓦礫が崩れてくる。
それを認識した僕は、チラリとヴィヴィオ達の方に視線を向ける。
今現在、レオはシグナムを外に連れ出し、ヴィヴィオはティアナを運んでいる最中だ。それも、もう後二メートルも進めば外に出られる距離まできている。
となれば、残るはエリオとキャロの二人だけ。
ここで二人にエリオ達を任せたのでは確実に間に合わないだろう。そうなると、最後に残された選択肢は一つ。僕が二人を抱えて外に出る。これしかない。けど、僕が二人を抱えた所で間に合うかどうか微妙な所だった。
なんとかギリギリ間に合うか？　いや、絶対に間に合わせる！
僕は瞬時にその判断を下し、二人に向かって大声をあげた。
「二人とも離れて！　後の二人は僕が運ぶから！」
僕の言葉に二人がちゃんと認識できたどうか僕は確認する事ができなかった。
なぜなら……。
「あ、危ない！」

なぜなら、叫び終わった直後に僕の魔力は完全に尽きてしまい、かろうじて止めれていた遺跡の崩壊が猛スピードで再開したのだ。
「くそっ！」
僕はレオが叫んだのとほぼ同時に動きだし、なんとか二人の事を抱えて立ち上がる所まできていた。
そこでようやく僕が出口に視線を向けると、そこにはティアナを運び終えたヴィヴィオと心配そうに僕の方を見つめるレオの姿が映った。
これで後は僕が二人を連れて脱出するだけだ。
僕は文字通り最後の力を振り絞り、足腰に力を入れ、思いっきり地面を蹴って出口から飛び出した。
その瞬間。
ガラガラガラッ！
僕らが飛び出した瞬間、遺跡は完全に崩壊し、僕らの目の前には辺り一面に瓦礫の山が出来上がっていた。
まさに間一髪。
ギリギリの、本当にギリギリの所で僕らは全員を救出する事ができたのだった。
「はぁ、はぁ、はぁ……。た、助かった……」
「パパ！」
最後の力を使い果たし、地面の上で大の字になって倒れている僕にダイブするかのようにヴィヴィオが飛びついてきた。
「ぐえっ。ちょ、ちょっとタイム、ヴィヴィオ。今はちょっと、もう動けるだけの――」
体力がない。そう言おうとして僕は口を閉じた。
「皆が無事でよかった……。ぐすん……。皆が無事で本当に良かったよぉ……」
「……よしよし。よく頑張ったね、ヴィヴィオ。ありがとう。ヴィヴィオ達のおかげで皆の事を助ける事ができたよ。手伝ってくれて本当にありがとう」
そう言いいながら僕はヴィヴィオの頭を撫でた後、一人でもじもじ

していたレオへと視線を向ける。
「レオも本当にありがとうね。ハンナに捕まって怖い思いもしたよね。もう大丈夫だからこっちにおいで？」
まだ起き上がれるだけの体力が戻っていないので、地面の上に横になりながらレオに向かって僕は右腕を伸ばした。
ちょっとだけ。本当にちょっとだけ、またレオには無視されるかもしれない。
そんな心配が僕の頭を一瞬よぎったが、そんな心配は全くいらなかったみたいで、レオは涙と一緒に鼻水を流しながら、僕の方へと駆け寄ってきた。
「ぐすん……。えーん！　怖かったよぉ」
ぐはっ！
レオが泣きながら勢い良く僕に向かって突進してきたせいで、レオの頭が僕のみぞへと直撃し、一瞬気を失いそうになる。
い、痛い……。もしかしたら、今日一痛かったかもしれない……。
けどまぁ、そんな事よりも僕はようやくレオが心を開いてくれた事が嬉しくなり、痛みなんて一瞬で忘れてしまっていた。
「よしよし。レオもよく頑張ったね。……二人とも、本当にありがとうね」
僕はこのまま、二人が泣き止むまで頭をなで続けたのだった。

因みにだけど、二人が落ち着いた後シャーリーに直接連絡し、皆を救出した事と帰り道が分からない事を説明して迎えにきてもらい、倒れている皆を病院まで運ぶ手伝いをしてもらった。
幸いにも全員命に別状がないようで、それを聞いた後ヴィヴィオとレオ……ついでに僕を入れた三人は、安心したからなのか六課の隊舎で死んだように眠ったのだった。

第九話

なのは達を救出した翌日。
ヴィヴィオが学校から帰ってきた後、僕はヴィヴィオとレオを連れて、なのはとフェイトのお見舞いに来ていた。
因みに、はやて達も同じ病院に入院しているので、後で顔を出す予定だったりする。
「あ、見て、パパ！　ここみたいだよ！」
ヴィヴィオに言われて、僕がヴィヴィオの指さす方を見ると、そこには〝吉井なのは、フェイト・T・吉井〟と書かれた表札があった。
「ほんとだ。それじゃあ、ノックして返事が返ってきたらドアを開けても良いよ」
「もー。パパに言われなくてもノックしなきゃいけない事位分かってるよー」
そう言いながら、ヴィヴィオが不満そうにほっぺたを膨らませながら僕の方を見てくる。
その仕草が可愛いくて、思わずに抱きしめたくなったが、残念ながらここは病院なので我慢しておく。
「あはは。ごめんごめん」
「むー。ホントに分かってるのかな……」
そう言いながら、まだ不満そうな表情を浮かべているヴィヴィオ。
うん。前から分かってた事だけど、ヴィヴィオはこんな表情でも可愛いね！
いつまでも見ていたい位だ。
なんて事を僕が考えているとも知らず、ヴィヴィオは病室の扉をノックしていた。
コンコン
「はーい。どうぞー」
ヴィヴィオのノックに反応して、中からフェイトの声が返ってくる。

それを確認してから、ヴィヴィオが元気で明るい声を出しながら、病室の扉を開けた。
「失礼しまーす！」
「いらっしゃい、ヴィヴィオ」
ヴィヴィオが学校に行ってる間に、あらかじめ連絡していた事もあり、フェイトは驚く事なく近寄ってきたヴィヴィオの事を優しく抱きしめていた。
「ごめんね、ヴィヴィオ。明久から聞いたけど、ヴィヴィオも私達を助けにきてくれたんだよね？ありがとう。それと、心配かけてごめんね」
「そんな全然だよ！フェイトママ達を実際に助けてくれたのはパパだし、ヴィヴィオは全然何も……」
「何言ってのさ。ヴィヴィオがいてくれたから、僕も凄い助けられたって昨日から言ってるじゃない」
僕はそう言いながらフェイトのベッドへと近づいていき、レオを近くにあったイスへと座らせた。
「だってさ、ヴィヴィオ。パパがそう言ってるんだから間違いないよ。だからありがとうね」
「うん……」
フェイトに頭を撫でられながら、もう一度感謝の言葉を言われたヴィヴィオは恥ずかしそうに顔を少し赤らめながら、小さくうなづいた。
「レオも一緒に助けてくれたんだよね？　助けにきてくれてありがとうね」
「うん……」
レオもヴィヴィオと同じような反応。
まぁ、レオの場合は全く顔を赤らめてないから、そういった意味では同じ反応じゃないけど。
「全く……。まだフェイトが相手でも喋れないの？」
「うー……。だって、大人の人は怖いんだもん……」
「いやいや。僕とはちゃんと喋れてるじゃない」

マトモに喋ってくれるようになったのは昨日からだけど。
「逆になんで明久とは喋れるの？　前まであんなに嫌がってたのに……」
「なんでって言われても……。なんか良く分かんないけど、なぜか昨日から普通に喋ってくれるようになったとしか言い様がない。……かな？」
いや、ほんと。なんでか僕にも分かんないんだから、分かんないとしか言い様がない。
僕がダメ元でレオの方へ視線を向けると、予想外にもレオは口を開いてくれた。
「だって、明久さんは僕の事助けてくれたから……。まだちょっと怖いけど、優しいから……」
「フェイトもなのはも優しいよ？」
「うー……。分かってるけど、怖いんだもん……」
優しいのは分かってるけど、怖いってどういう事？
僕はレオの言ってる意味が分からず、首を傾げた。
「まぁ、前の明久みたいにら完全に無視されてるわけじゃないから、少しずつ心を開いていってもらうよ。……というか、明久が特別なんじゃない？　どうやったら、たった1日でここまで心開いてもらえるの？」
「僕にも分かんない」
……。
いや、だってホントに分かんないだから、しょうがないでしょ!?
僕が特別した事なんてないし、強いて言うなら昨日遺跡にいた女、名前は確か……ハンナだったかな？アイツからレオを助けた位だ。
というか、シルメディアンだっけ？　アイツらの目的はいったいなんだったんだろうか？
あの後、僕達をあの場所まで連れてきたクロウも姿を表さなかったし、なんか僕としては巻き込まれただけで、わけの分からない事だらけだ。
なんて柄にもなく僕が難しい事を考えていると、扉の方からなのは

の声が聞こえてきた。
「あれ？　明久君達、もーきてたんだ。思ってたより早かったね」
「なのはママ！」
さっきまでフェイトに抱き着いていたヴィヴィオが、なのはの姿を視界に捉えると、今までも笑顔だったのに、それ以上に、もーこれ以上ないって位の笑顔を浮かべた。
「まぁね。思ってたよりヴィヴィオが早く学校から帰ってきたから、早めに来たんだ。……というか、なのは。紙なんて持ってどこ行ってたの？」
僕はなのはの持っている書類みたいな紙を指しながら、なのはに声をかける。
「ん？　これ？　これは病院の書類だよ。退院手続きの書類とかその他諸々の」
「あー、なるほど。退院するための奴ね。……って、なんですと!?」
一瞬納得しかけたけど、僕は言葉の意味を考え直して大声をあげた。
当然だ。昨日入院した自分の妻が、今日には退院する話をし出したんだ。驚かない方がおかしいってもんだ。
「え!?　ママ達もー退院して大丈夫なの!?　入院したのって昨日だよ!?」
「2人とも大げさ過ぎだよー。たしかに気は失っちゃったけど、元々傷は浅かったし、今朝やった精密検査でも問題なかったから、2・3日安静にしてれば退院しても良いって先生にも言われたから大丈夫だよ」
そー言いながらニコニコしているなのは。
ちらっと視線だけフェイトの方に向けると、フェイトも心穏やかそうに笑顔を浮かべている。
たしかに2人とも顔色は悪くないし、無理をしている様子は全く見受けられないので大丈夫そうに見える。
けど正直、なのはもフェイトも仕事熱心というか、仕事大好きというか、結婚してからも仕事を辞める気が全くなかった位だから、早く

仕事に復帰するために無理してるんじゃないかと心配になってしまう。
「んー……。心配だ……」
「もー、明久君心配し過ぎ。私もフェイトちゃんも先生から退院許可貰ってるんだから大丈夫だって」
「そうそう。それに、六課にはシャマルがいるから、もし何かあったとしてもシャマルに見てもらえるしね」
「そのシャマルも今は入院中でしょ？」
「んーん。シャマルなら今朝のうちに、はやてちゃん達八神一家の皆で退院していったよ？」
「え!?　八神部隊長達、もー退院しちゃったの!?　それはいくら何でも早すぎない!?」
僕の代わりにイチ早くツッコミを入れてくれるヴィヴィオ。
うん。僕達って異体同心だね！
「まぁね。でも、はやてちゃん達は私達よりも先に精密検査受け終わってたみたいだから、心配ないと思うよ？」
「あ、もちろんエリオ達は大事を取って、どんなに早くても明日退院するようにって言っといたから、エリオ達は明日の午前中までは病院にいる事になってるから、そこは安心して」
色々といっぺんに聞きすぎて、もーどこから突っ込めば良いのか良く分からなくなってきた……。
でもとりあえず、エリオ達には大事を取らせて明日まで入院させるのに、どーして自分達は大事を取らないのか良く分からない……事もないな。
どーせ2人の事だから「まだ事件解決したわけじゃないし、こーしてる間にも被害は拡大していく。そんな中、現場に出る自分達がいつまでも入院してる訳にはいかない。これ以上被害を出さないためにも、自分達が頑張って早く事件解決しないと」とか思ってるんだろうな。多分、はやて達が早く退院した理由も似たようなもんなんだろう。
そー考えると、僕はだんだんこの事を考えるのがバカらしくなって

きた。
「いや、そーいう問題じゃな――」
「はぁ……。もー良いよヴィヴィオ。こーなったら、２人に何言っても無駄だよ。一度言い出したら聞かないんだから」
「ちょ、それ明久君には言われたくないんですけど!?」
「ホントだよ！　明久にだけは言われたくないよ！」
２人が何を言ってるのか僕には分からない。
僕は２人のツッコミは完全にスルーして、ヴィヴィオとの会話を続けた。
「まぁ、そもそも六課にいようが病院にいようが関係ないよ。どこにいようと僕が無理無茶させなければ良いだけの話しだからね」
「んー……。パパがママ達相手にそんな事できるか不安だけど、パパがそこまで言うなら分かったよ……」
若干失敬な部分はあったが、最後には納得してくれたから良しとしよう。
……いや、ホントに僕だってやる時はやるからね？
「むー……。なんか納得いかないな……」
「ホントに……」
若干２名まだ納得いってないみたいだけど、僕は何も間違った事は言ってないと思う。
ともあれ、こーしてなのはとフェイトの退院が決まったので、僕らはなのはとフェイトが部屋を色々と片付けてる間に、スバル、ティアナ、エリオ、キャロの見舞いをして、六課の隊舎へと帰ったのだった。

☆

「以上があの遺跡に書かれていた言葉よ」
とあるシルメディアンのアジトで、ハンナは黒い影９人に向かってレイに読ませた石版に書いてあった事を報告していた。
『〝氷の地にて７体の元龍の力が揃いし時、我は目覚める。
我が目覚めし時、世界は滅ぶであろう。

願わくば、我が目覚める事がない事を我は祈る……〃か結局ここもハズレか？』
『いや。そうでもない。これで少なくとも氷の地に我らの求める物が眠ってるのは分かった』
『そんなんもん前から分かってたじゃねぇか。今更何言ってやがる』
『違う。前まではあくまで我々の予想に過ぎん。だが、今回の石版でそれが確定したのだ。大きな進歩だろう』
『今回の石版で予想が正しかった事は分かったわ。でも、今回は新しい発見は何もないって事よね？』
『ないでしょうね。結局どこに眠ってるか分からない。他の遺跡の手掛かりもない。正直、今回の件で黒竜１００匹の犠牲は大きな損失だと思いますが？』
『それは違うな。今回の事で言えば、ある程度雷炎龍の力を計る事ができた。そして、機動六課が黒竜に対応する手段がない事も分かったじゃないか』
黒い影が各々で言いたい事を言い始めたので、ハンナは嫌気が指してきていた。
自分の報告義務は既に終わった。
今好き放題言い合ってる連中は、このアジトに今はいない。思念体を使っているので本人の姿はアジトにいるように見えるが、実際にはいないのだ。
しかも、身バレを気にして全員顔を隠している。
正体が分かっているのは、今ハンナの隣にいるクロウ位だ。
実を言うと、ハンナはボスの顔すら知らなかった。
（目的があるとは言え、こんな謎だらけの組織にいても良いのか不安になるわね……。もー１０回以上は思ってるけど……）
ハンナは心の中でため息をつく。
すると、それを知ってか知らずか、隣にいるクロウが黒い影全員を黙らせて口を開いた。
「うるさいぞ。お前ら。そんな話しは全員姿現してからしやがれ。

それができないなら、ボスに言われた事だけしてろ」
『な、なんだと、クロウ！　貴様、何様のつもりだ！』
「だから、うるさいんだよ。俺の発言に問題があったらボスが止めるさ」
そう言ってクロウは、ボスの影に視線を向けた。
『……構わん。それよりもクロウ、お前の報告がまだだ。報告しろ』
「ああ。……俺からの報告は２つだ。１つは例の奴が現れた」
『……やはり現れたか。……奴はどうした？』
「一戦交えたが、決着はつかなかった。こっちには時間もなかったしな。無理にでも捕らえた方が良かったか？」
『……いや、それで良い。奴を甘く見るな。舐めてかかれば必ず返り討ちにあう。一筋縄ではいかんだろう』
「なら俺からの報告は後１つだな。……今回の俺の任務だった仲間を増やす件。これに成功した。……入れ」
「……俺に命令すんじゃねぇよ」
クロウに言われて、男が１人悪態をつきながら姿を表した。
「文句を言うな。誰のおかげで今ここにいられると思っている？文句を言うなら殺すぞ」
「お？　いいね。やってみろよ。お前が暴れさせてくれるって言うなら、俺は大歓迎だぜ」
「……お前には礼儀というものを教えてやる」
まさに一触即発。
後５秒もすれば男とクロウの殺し合いは始まっていただろう。
だがそんな殺し合いは
『やめろ』
ボスの一声によって止められてしまった。
『クロウ。目的を忘れるな』
「……すみません」
「なんだよ。やんねぇのかよ」
『お前もそう焦るな。我々は仲間だ。仲間割れなんぞしなくても、言う事を聞けば暴れさせてやる。それが分かったら名を名乗れ』

「……ちっ。扇　風月。風龍の元龍だ」
クロウが連れてきた男は、自らを3年前ＪＳ事件で明久に敗れ、拘置所に入れらていた扇　風月と名乗り、自分の周囲に風を吹かせたのだった。

第十話

「え!?　扇が脱獄した!?」

なのは達が退院してから2日目。つまり、スバル達が退院した翌日、僕を含めて機動六課のフォワードメンバーがようやく全員揃った日。

僕らははやてに呼び出され、驚きの事実を聞かされていた。

「脱獄っちゅうか、誰かに手引きされた形跡があったらしいわ。まぁ、うん。脱獄やな」

あんなに苦労して捕まえた扇が脱獄した？

いやいや冗談きついって。

「手引きされた形跡があったって……。その時の警備はどうなってたんですか？」

「もちろん普段通りに警備員はいたんけど、全員背後から強烈な一撃をもらって気絶させられたみたいで、誰も犯人の顔は見てないんだって」

「なら映像の方はどうなんですな？　拘置所から脱獄したなら、脱獄時の記録が残ってるんじゃないですか？」

「それもダメだったみたい。全部の監視カメラを調べたらしいけど、犯人の姿はどこにも映ってなかったんだって。まぁ、唯一、扇を牢から出す時に影だけ映ってらしいけど……。それだけで犯人特定するのは厳しいと思う」

スバルとティアナの問いに対して、首を横に振るなのはとフェイト。

どうやら犯人の手掛かりは一切掴めておらず、ただただ扇だけ逃がしてしまったようだ。

「まぁ、そんなわけでお偉いさん方は犯人の手がかりは全く掴めてないみたいなんやけど、私は今回の件もシルメディアンの仕業やないかって思ってるんよ」

「え!?　これもクロウ達の仕業なの!?」

僕は驚きを隠せず、思わず大声をあげていた。

「いやいや。あくまで私らの予想ではって話や。偶然にも扇が脱獄した日はアキ君が私らを助けてくれた日と一緒や。けど、これがほんまに偶然なのか怪しいと私は思うんよ。アキ君から聞いたクロウの話を聞くとどうもな……」

「僕がはやてに教えたクロウの話？　それって黒龍とハンナ、その両方と僕が戦うならクロウが皆の所まで連れて行ってくれるって言った奴の事？」

「うん。アキ君も怪しいと思わへん？」

僕ははやての言わんとしてる事がよく分からず首を傾げた。

確かに、クロウがなんでそんな条件を出してきてのかは未だに謎だし、そんな条件を出しておいて自分は姿を消したまま、もう一度あの場所に帰ってこなかった理由もよく分からない。

けど、そんな話の内容からどうして扇の脱獄までシルメディアンが怪しいって話になるのか僕にはちょっと分からなかった。

「アキ君は相変わらずやな……。ええか、アキ君？　もし、クロウがアキ君をミッドチルダから離すために遺跡に連れて行ったとしよう。ほんなら、なんでそんな事をしたのか？　扇を脱獄させるために極力厄介な人物に邪魔されへんようにするためやった。こー考えたら、アキ君に敵と戦え言うたもん時間稼ぎが目的やったっと推測できて、クロウの不可解な行動も説明できると思うんよ」

「え⁉　それじゃ、今回の一件は全部扇を脱獄させるのが目的だったって事⁉」

「全部かどうかは分からんけど、少なくとも目的の一つやった可能性は充分有り得る話しやと思う」

そっか。

だからクロウは僕に全ての敵と戦えなんて条件を出してきたのか……。

あれ？　でも、もしその話しが正しいとすれば、どうやってシルメディアンの連中は扇の居場所を知ったんだろう？

扇逮捕に直接関わってた僕ですら扇がどこの拘置所にいるかなんて知らなかったのに……。

僕がその事に気づいて、口を開こうとした時だった。
「ほっほっほ。もしその推測が当たっていれば、管理局に裏切り者がいる可能性が非常に高くなってくるな」
突然会議室の扉が開き、メガネをかけていて、頭のてっぺんだけが見事に光っている爺さんが会議室の中に入ってきた。
「誰や！　今はまだ会議中……って、ルディックさんかいな……。いきなり入ってきて、脅かさんといて下さいよ……」
「ほっほっほ。すまんすまん。何、ちょっと近くを通ったから、見舞いも兼ねて機動六課の様子を見にきたんじゃよ」
突然乱入してき爺さんは（ルディックさんと言うらしい）どうやらはやての知り合いのようだ。
というか、後ろに怖い顔した黒服の人達が何人かいるから、相当偉い人なような気がするんだけど……。
この爺さんはいったい何者なんだろうか？
「見舞いって……。見ての通り、幸い誰も大ケガしてませんし、そんな見舞いなんて大袈裟な事してもらう必要なんか……」
「いやいや。それは建前じゃよ。本当は噂の雷炎竜の顔を見にきただけじゃ」
そー言ってルディックさんは僕の方へと視線を向けてきた。
「初めまして、雷炎竜の吉井明久君。ワシの名前はルディック・ベアトリス。君の噂は色々と耳にしておるよ」
「ど、どーも……」
僕はルディックさんに差し出された手を取り、ルディックさんと握手を交わした。
というか、噂って何？
いったい僕の知らない所でどんな噂が流れているんだろうか？
今まで散々噂には苦しめられてきたんだから、正直自分の噂には関わられたくない。
「ふむ……。さすがは元龍といった所か。とんでもない量の魔力を持っておるようじゃのう」
「分かるんですか？」

「わしの力はちと特殊での。一目見れば他人の魔力の大きさが分かるんじゃよ」
一目見れば分かるなら、握手はする必要なかったんじゃないだろうか？
「さて、それよりはやて。さっきの話じゃがな、管理局内部に裏切り者がいると本気で思っておるのか？」
ルディックさんは僕の手を放すと、さっきまでとは違って真剣な目つきをしてはやてに視線を向けた。
なんといか、さっきまで僕が握手していた人とは、完全に別人みたいな顔つきだった。
「あくまで私の予想通りならって話ですが、その可能性は高いと思います」
「ならば質問を変える。その予想が当たっている自信はあるのか？」
「……分かりません。でも、もしシルメディアンが扇を脱獄させたなら、扇もシルメディアンにおる可能性は非常に高いと思います。そして、私らが追いかけてる組織もシルメディアンです。捜査の中で扇と会う事になったら、その時は私の予想が的中したって事やと思います」
ルディックさんは、はやてにそう言われて、無言ではやての目をじっと見つめた後、ため息を吐いてから口を開いた。
「はぁ……。分かった。わしの負けじゃ。君の予想通りであると仮定して、裏切り者についてはわしの方で調べておこう」
「え？　ルディックさんが直々に調べてくれはるんですか？」
「当たり前じゃ。誰が裏切り者か分からん以上、下手に人に任せるのは危険じゃ。君らも今の話は他言無用。どんなに信用できる同僚や上司が相手でも話す事を一切禁ずる。これは最高評議会書記長としての命令じゃ。良いかね？」
「「はい！」」
この部屋にいる僕以外の人全員が一斉に返事をした。
え？　なんで皆なんの疑いもなくルディックさんの命令を聞いて

るの？
普通、そう言うのってはやてから言われるものなんじゃ……。
なんて事を考えていると、ドラグーンが話かけてきた。
『マスターは本当にバカですね。この人は今〝最高評議会の書記長〟としてって言ってたじゃないですか。つまり、はやて部隊長よりも偉い人なんですから、皆さんも命令されたら従うしかないでしょう？』
ああ、なるほど……。って、
「なんですと!?」
「わ！　びっくりした……」
「ど、どーしたんですからさ、アキ兄？」
僕が突然大声を出した事で、僕のすぐ近くにいたキャロとエリオが驚きの声をあげた。
まぁ、考えてみれば突然隣で大声なんて上げられたら、驚くのは無理ないんだろうけど、この時の僕は驚きのあまりその辺の配慮が一切できていなかった。
「ど、どーしたじゃないよ！　最高評議会って、管理局のトップの人って事でしょ？　どーしてそんな偉い人がこんな所にいるのさ!?」
「なんだ、吉井。お前は何も知らずに六課に招集されたのか？」
「前回と違って、今回の機動六課は最高評議会直属の部署って事になってるから、ルディックさんはアタシらの直属の上司って事だな。つーわけで、あんま失礼のないようにしろよ？」
シグナムとヴィータに言われて初めて知った。
そー言えば、この前直接家に来た管理局の人も最高評議会で秘書やってるって言ってたな。
なんだか最近、最高評議会の人達と関わる事が凄く多い気がする。
「まぁ、最高評議会が直属の上司と言っても、ワシらから六課に命令を出す事は基本的にはないから、今まで通りはやてを中心にして事件解決に尽力してくれれば良い」
うーん。
良く分からないけど、とりあえず僕は今まで通りで良いらしい。

まぁ、どうせ難しい事を言われた所で僕には理解できないだろうから、その方が分かりやすくて良いや。
「さて、君らも元気そうじゃし、ワシはそろそろ帰るとしよう。会議中にすまんかったな。内部調査はワシに任せて、君らは君らの仕事を全うしてくれ」
「「はい！」」
「うむ。良い返事じゃ。……ではの」
ルディックさんはそう言ってから、指をパチンと鳴らした。
その瞬間。
「き、消えた……」
ルディックさんは一瞬で僕らの目の前から居なくなっていた。
「まぁ、あの人は瞬間移動が使えるからな～。まぁ、アキくんもそのうち慣れるやろ」
あんまり慣れたいとは思わないな……。
というか、あの人は瞬間移動なんてできるのか。
まぁ、今はそんな事どうでも良いけど。
だって今は――
「さて。ほんなら会議はここまでにして、そろそろ行こうか」
「そうだね。私達も一から鍛えなおさないとだしね」
「と言うわけで、今から皆で訓練場へレッツゴー！」
「「はい！」」
――今は、隊長陣はもちろん、僕を除くフォワード陣も訓練に前向き……と言うか、早く訓練したくてたまらないといった感じで燃えており、僕に取ってはルディックさんの事よりも、これから行われるであろう地獄の特訓に耐えられるか心配する方が大事だからね！
ほんと、なんで皆そんなにやる気満々なのさ！
こーなってしまえば逃げられない事を3年前に嫌と言うほど学んだ僕は、無駄と分かっていても逃げたいという気持ちと葛藤しながら、皆の後に続いて訓練場へ向かったのだった。

☆

「はい。それじゃ、今日はここまで。皆お疲れ様」
「「ありがとうございました！」」
「や、やっと終わった～」
なのはの厳しい訓練を終えて一礼した後、僕はあまりの疲労具合にその場にへたり込んでいた。
「お疲れ様です。アキ兄」
「大丈夫ですか？」
倒れこんでいる僕にタオルと水を渡してくれるエリオとキャロ。
3年経っても変わらない二人の優しさにちょっとだけ心が癒される。
「ありがとう。二人とも。身体中ボロボロだけど、特にケガとかしたわけじゃないから大丈夫だよ」
そう言って二人からタオルと水を受け取って、僕はゆっくりと体を起こした。
「だらしないわねー。あんた、この3年間何やってたのよ？」
「まぁまぁ、ティア。アキは私達と違って六課が解散してからは一般人だったんだから、そんなに言ったら可哀そうだよ」
「一般人でも筋トレとかで体を鍛える事はできるでしょ？」
「そういうティアだって、この前六課に再転属されるって事になってから鍛えなおしてたじゃない」
「そりゃまぁ、執務官と違って六課じゃ戦闘がメインになるんだから鍛えなおさないと仕事にならないじゃない。どうせエリオとキャロも鍛えなおしてきたんでしょ？」
「はい！　六課時代に比べると、やっぱり前線にいなかった分体力とか落ちてましたから」
「私もエリオ君と一緒に鍛えてきました！」
「ほら見なさい。移動に当たって特別鍛えなおさなかったのはアンタと吉井位よ。……まぁ、スバルは普段から鍛えてるから、改めて鍛えなおす必要はなかったんでしょうけど」
つまり、六課に入るにあたって鍛えなおさなかったのは僕だけって

事らしい。
うーん……。
そー言われると、ここ最近もっと鍛えておけば良かったと思う場面が非常に多い気もするし、鍛えておけば良かったと今更ながらに後悔しないでもない。
「うーん……。でも、私ももっと鍛えておけば良かったって思ってるよ？　いくら鍛えてたって言っても救助隊と六課のフォワードとじゃ求められるものとか全然違うし、なによりこの前負けちゃったからね……」
「それを言うなら私達も一緒よ。いくら特訓したって、大事な所であのざまじゃ意味ないわ」
「ですね。次はしっかりやってみせます！」
「私もです！　そのためにも今は特訓ですね！」
どうやら４人とも、この前黒龍にやられた事が悔しかったみたいで、それで訓練に力が入っているようだ。
まぁ、気持ちは分からないでもないな。
でも、今の話を聞いて僕にはどうしても分からない事が一つだけあった。
それは、どうしてそんなに鍛えていたのに黒龍に負けたのか？だ。
確かに、黒龍はドラゴンの力が少しでも使われてないとダメージを与える事はできなかった。
けど、あの場にはキャロとフリードもいたんだ。フリードをメインにして、他の皆はフォローに回れば僕が倒せたんだから、僕より強い皆なら黒龍位倒せたはずだ。
僕はそれが気になって、４人に聞いたんだけど……。
「それが、その……」
「よく分からないんです……」
エリオとキャロから返ってきた答えは、なんとも答えになってない答えだった。
「よく分からないって……どういうこと？」

「それがその、あの遺跡に着いた途端フリードの体調が悪くなって急に寝込んじゃったんです。しかも、なぜかあの遺跡では召喚魔法も使えなくなってて、ヴォルテールも召喚できなくて……」
「フリードが急に寝込んだ……？」
「はい……」
今はキャロの周りを元気に飛んでいるフリードへと僕は視線を向けると、フリードはそれに気づいたのか僕の近くまで飛んできたので、頭をなでてやる。
その姿からは、どうやっても急に寝込んでしまうような姿は想像する事ができなかった。
「遺跡から帰ってきてから直ぐに元気になったんで、シャマル先生は何か原因があるのかもしれないって、今リイン曹長と一緒に調べてくれてます」
「因みに、今回は吉井に助けられたけど、次は私達もちゃんと黒龍と戦えるように今なのはさん達がアンタが倒した黒龍のデータを元に対策を考えてくれてるらしいわ」
「そ、そうなんだ」
シャマルとリインは訓練に来てなかったから知らないけど、なのははさっきまで僕らと一緒に訓練してたのに、黒龍の対策までしてるって事は、また無理してるんだろうな……。
後で様子を見に行って、あんまり無理をしてるようなら無理やり寝かせるとしよう。
「まぁ、なんにしても隊長達が見つけてくれた対抗策に私達がついて行けないなんて事になったら、頑張ってくれてる隊長達に合わせる顔がないわ」
「だね。私達は私達が今できる事を全力でやろう！」
「だったら、いったん休憩を挟んだ後、ロビーで集合しましょう。皆久しぶりに会ったわけだし、細かい連携とかハンドサインの確認とかもしたいし」
「あ、いいですね、それ！」
「私も賛成です！」

「なら、いったん解散して、着替えてからロビーに集合。その後皆でご飯にしましょう」
「「はい！」」
やる気に満ち溢れていた４人はあっという間にこの後を予定を立てていた。
４人の姿からは微塵も疲れを感じられなかった。ほんと、４人とも元気だね。
正直、僕なんかはもうヘロヘロなんだけど……。
とはいえ、僕にも年長者の意地があるし、なにより僕以外の皆はまだ頑張ってるんだ。
さっきスバルも言っていたように、皆が皆できる事を全力でやってるんだ。
いくら嘱託魔導士とは言え、僕だけのんきに休んでるわけにはいかない。
僕は訓練でボロボロになった体にムチを振り、無理やり体を起こし、皆と一緒に隊舎へと向かったのだった。

☆

ミッドとは別のとある世界の洞窟にて、頭からフードを被った一人の男が傷を癒していた。
「だいぶ良くなったな……」
男は腹部あたりにできた傷口を自分でさすりながら、そうつぶやく。
男の傷はミッドで扇風月を脱獄させようとしていたクロウと戦った時につけられた傷だった。
「クロウのヤツ……。俺の想像より遥かに強くなってたな。あれじゃ、もう殺さずに拘束するのは無理だな」
本気で、それも殺すつもりで戦えば戦闘にはなっただろう。
だが、男はクロウを殺すつもりは最初からなく、なんとか無傷で拘束しようと考えていたので、クロウに全く歯が立たず、こうして傷を

負い、逃げるようにその場から立ち去ったのだ。
しかも、風龍はヤツの手元にいき、これでシルメディアンの所有する元龍は闇、光、風の3龍となった。
男はそれを考えると、自分の不甲斐なさのあまり地面を思いっきり殴っていた。
「雷と炎は管理局にいるんだったな」
男は雷炎龍である明久の顔を自分のデバイスを通してディスプレイに表示した。
これで男に取って、明久を含めて7元龍の内5元龍の居場所が割れた事になる。
だが、クロウと扇はシルメディアン。明久は管理局と、どちらも簡単には接触する事ができない相手。
そこで男は目をつぶり、熟考した後目を開き、自分の相棒へと声をかけた。
「最後の一人は必ず俺たちが見つけるぞ、グランマーク」
『ジンよ。我は主と共にある存在。好きにするがよい』
ジンと呼ばれた男の中から、グランマークと呼ばれた者の声が洞窟に響き渡ったのだった。

第十一話

僕が訓練を始めてから数日。
僕らフォーワード陣は、なのはとシャーリーから招集を受け、デバイスルームに来ていた。
「さて、それじゃあ皆揃ってるみたいだから、さっそく始めちゃうね」
なのはがそう言うと、シャーリーがキーボードをたたいて、僕らの目の前にディスプレイを表示した。
シャーリーが表示してきたものは動画だ。
けど、その動画に映っていたのは、何もないまっさらな平地だけだった。
「えっと……。なにこれ？」
僕はシャーリーの表示してきた動画を見ても二人が何をしたいのかイマイチよく分からず、首を傾げていた。
「よくぞ聞いてくれました！　これはですね、機動六課の新しい訓練所として作られた第二訓練所です！」
「え？　これ新しい訓練所なの？」
「はい！　とは言っても、第一訓練所のように海に浮かべるための装置を作る時間もなかったので、六課の敷地内に無理やり防音設備の整ったドームを作っただけなんだけどね？」
いや、それでも充分凄いと思う。
ほんと、忘れてたけど六課の技術力って無駄に凄いよね……。
「あのー……。質問良いですか？」
「どうぞ、ティアナ。なんでも聞いて？」
ティアナが手を挙げると、それに笑顔で答えるシャーリー。
どうやら、何かしらの質問が飛んでくるのは想定済みのようだ。
「それじゃあ遠慮なく……。わざわざ第二訓練所なんて作る意味あったんですか？」
ド直球。返答次第では、第二訓練所を作った労力全てが無駄な労力となりかねない質問をティアナはぶつけていた。

いや、ぶっちゃけ僕もそれ思ってたけど、なんとなく触れちゃいけないんだと思ってスルーしたのに。
僕はそんな事を思って、ティアナとシャーリー、二人の顔を交互にハラハラしながら見ていたんだけど、僕の心配は杞憂だったようで、相変わらずシャーリーは笑顔だった。
「もちろん意味はあるよー。実はここ数日、この前明久さんが倒した黒龍を疑似的にでも複製できないか色々やってたんだけどね、それが遂に完成したんだよ！　でね、皆にはここで黒龍と戦うための純粋な力を身につけてもらうために、こうして何も障害物のない訓練所を作ったってわけなんだよ！」
「まぁ、要するに純粋に個々の力で黒龍を倒せるようになるために今後は訓練するわけなんだけど、その時に使う場所は第二訓練所を使うの。疑似的なものとは言え、かなり本物に近い出来になってるから、ここで黒龍を倒す事ができたら、本番でも何の問題もなく黒龍と戦えるってわけなんだよ。明久君分かった？」
「良く分かんないけど、とりあえず第二訓練所では、疑似黒龍を使って、黒龍を倒すための訓練をするって事は分かった！」
自分で言うのもなんだけど、今の説明で僕にそれ以上を理解しろっていう方が無理ってもんだ。
これだけ理解できただけでも自分を褒めてやりたい。
「うーん。まぁ、ゆくゆくは黒龍関係なく、純粋に個人の戦闘能力をあげるための訓練所としても使いたいと思ってるけど、今はそんな感じで大丈夫だよ」
なのはがそう言った途端、スバルたちフォワード４人が皆驚いたような顔をした。
はて？　皆はどうしてこんな驚いているんだろうか？
「なに？　皆どうかしたの？」
「い、いやちょっと驚いちゃって……」
「そ、そうね……。まさか、吉井が一回の説明で難しい話を理解できるなんて思わなくて……」
「「あ、あはははは……」」

「そんな事だろうと思ったよ！　こんちくしょう！」
正直、完全に予想通りだよ！
どうやら皆の中では、３年経っても僕のイメージに変わりはないらしい。
やだな。泣いてなんかいないよ？　ただちょっと、目から雨が降りそうに……。
「はいはい。皆して明久君を苛めないの。明久君も泣かないの。話が進まないでしょ？」
嫁からもフォローしてもらえなかった僕。
どうして何年経っても僕＝バカの方程式が崩れないんだろか？
そろそろ誰かに崩してもらわないと僕のガラスのハートが大変な事になってしまう。
「えっと、どこまで話したっけ……？」
「第二訓練所の説明までですかね？」
「あー。そうだった。えっと、それじゃあ、こっから先は言葉で説明するより、実際に見てもらった方が分かりやすいかな？」
「はーい。それじゃあ、現場のフェイトさん達に繋げますね！」
そう言ってシャーリーは、通信をフェイト、シグナム、ヴィータの三人に繋げた。
「こちらスターズ１。皆、準備はできてる？」
『ライトニング１、大丈夫だよ』
『同じく』
『アタシもだ』
「了解。それじゃあ、今から訓練用疑似ドラゴンを出すけど、皆まずは通常モードでお願いね」
『『『了解』』』
なのはフェイト達にそう声をかけた後、僕らの方へ視線を向けた。
「今から隊長達に訓練用の模擬ドラゴンと戦ってもらうんだけど、皆は隊長達から目を離さないで良く見ててね。それじゃあ、シャーリーお願い」
「了解です、なのはさん！　訓練用模擬ドラゴン、第二訓練場にて召

喚！」
シャーリーがそう言ってキーボードをたたき終わった瞬間。
『ごぁぎゃぁぁ――――！』
「っ！」
どこかで聞いた事のある悲鳴のような声、僕が遺跡で戦った黒龍とそっくりのドラゴンがモニターの向こう側に表れていた。
その瞬間。
『でりゃぁぁ！』
ヴィータが黒龍に向かって、思いっきりグラーファイゼンをぶっ叩いた。
けど
『ちっ！　やっぱりかなり硬ぇな。思いっきり殴ったのに、傷一つ付きやしねぇ』
黒龍は何事もなかったようにピンピンしており、ヴィータの言うように傷一つ付いていなかった。
「さっきも言ったように、この黒龍は本物にかなり近い制度で作られてるから、ドラゴンの力が使われていない攻撃は効かない。だから、今のヴィータちゃんの攻撃でもダメージを与えられてないって事は皆も分かるよね？」
なのはの問いに対して、首を縦に振るフォワード４人。
それを見てなのはも満足そうに笑みを浮かべた。
「ＯＫ。それじゃあ、この黒龍が本物に近いって分かってもらえた所で次にいこう。――こちらスターズ１。予定通り、次はアサルトモードでの攻撃でお願いします」
『『了解！』』
アサルトモード？　なにそれ？
僕は意味が分からずに皆を見渡すと、フォワード陣は全員なんの事か分かっていない様子だ。
そして、なのはとシャーリー見てれは、見てれば分かるとばかりにモニターを指さすだけだった。
仕方がないので、僕はもう一度モニターへと視線を戻す。

すると、ちょうど動きがあったようで、ヴィータが一歩前へ出て黒龍に近づいた。
『こいつはアタシがやる。――いくぜ。グラーファイゼン！　モードアサルト！』
ヴィータがそう叫んだ瞬間、ヴィータの足元に魔法陣が描かれた。
『いくぜ、グラーファイゼン！　でりゃぁぁぁ！』
先ほどと同じように黒龍に向かってグラーファイゼンを思いっきりぶっ叩くヴィータ。
ここまではさっきと何かもが同じだ。
けど
『ごぁぎゃぁぁ――――！』
「え!?」
「うそ!?」
けど、その後の結果はさっきとはまるで別のものだった。
ヴィータに思いっきりぶっ叩かれた黒龍は断末魔のような悲鳴をあげた、その場に倒れこみ息絶えていた。
……いや、実際には第二訓練所でしか召喚できないデータのようなものらしいので、そもそも命というものがあるわけじゃないみたいなんだけど、まぁ、うん。とにかくヴィータの一撃で黒龍は見事に倒されていた。
「とまぁ、今皆に見てもらったように、アサルトモードを使えば、黒龍とも戦えるようになるんだ」
「ちなみに、元はなのはさんのブラスターモードを参考にして作ったんだけど、アサルトモードはブラスターモードみたいなドーピングと違って、少し龍属性の魔力を混ぜ込むだけだから、体への影響は得にないの。だから安心してね」
「とは言え、完全に使いこなすに訓練が必要だし、なにより魔力の消費量はバカにできないから連発はできない。戦況をちゃんと把握して、適切なタイミングで使ってね」
なのはとシャーリーが何やら言っているが、僕には全く理解できない。

ずっとヴィータを見てたけど、特に変わった姿は見受けられない。
強いて言えば、黒龍を攻撃する前に足元に魔法陣が描かれた位だろうか？
いや、それが重要だったんだろうけど、それだけであんな簡単に黒龍を倒せるようになるとは想像もできなかったんだ。
「あ、あの、なのはさん」
「なに、ティアナ？」
「このアサルトモード、私達でも使えるんですか？」
「もちろん。昨日、皆にちょっとデバイスを借りたでしょ？　その時にもうバージョンアップもしといたから、後はちゃんと訓練さえすれば４人ともすぐに使えるようになるよ」
凄いな。
今のを皆が使えるようになったら、もう黒龍にやられる事もないだろう。
って、あれ？
「あのさ、なのは」
「なに？　どうしたの、明久君？」
「えっと、僕は昨日デバイスを預けた記憶ないんだけど、どうしたら……」
本当に、本当に僕は真面目になのは達に聞いていたんだけど、なのは達は皆きょとんとした表情をしていた。
その顔はまるで、「この人なに言ってるの？」と言われているようだ。
「え？　明久さん何言ってるんですか？」
言われてるようじゃなくて、本当に言われた。
え？　僕、何か変なこと聞いた？
「あのね、明久君。このモードは別にパワーアップとかが目的じゃなくて、黒龍と戦うための対抗策なんだよ？　既に黒龍と戦う術を持ってる明久君に必要ある？」
なのはに言われて気が付いた。
あ、これ僕に関係ない奴だ。

僕はその事を今更ながらに理解していた。
「必要……ないね」
「でしょ？」
でもちょっと待ってほしい。
皆がこれから僕には必要ないアサルトモードを使いこなすための訓練をするなら、その間僕はどうしたら良いんだろうか？
僕の表情を見て、そんな僕の考えている事が分かったんだろう。
なのは僕を含めたフォワード全員に向かって声を発した。
「はい、注目！　それじゃあ、皆にもアサルトモードを実際に見てもらった事だし、これからアサルトモードを使いこなす訓練を始めたいと思います」
「「はい！」」
４人も前回煮え湯を飲まされた黒龍対策の訓練って事で、今まで以上に気合いの入った返事だった。
「うん。皆やる気満々だね。それじゃ、スバル、ティアナ、エリオ、キャロの４人はこれから私と一緒に第二訓練所に行って、隊長達とアサルトモードの訓練をしよう。まだまだ隊長達も使いこなせてるとは言い難いからね。誰が一番最初に使いこなせるようになるか競争だね」
「「はい！」」
「で、明久君は第一訓練所でフィジカルトレーニングね。フォワードの中で一番明久君が体力ないみたいだから、皆がアサルトモードの訓練をしている間に、せめて全盛期、高校生の頃と同じ位の体力には戻しといてね？　因みにだけど、ザフィーラに監督役として第一訓練所に行ってくれるようにお願いしたから、逃げたりしたらすぐに分かるからねる？」
そー言って僕に微笑みかけるなのは。
僕に取って、このなのはの笑顔が何よりも怖かったりする。
と言うか、僕ももう２０歳だよ？
高校時代、しかも全盛期っていうと六課で体を鍛えてた頃だから高２の時位でしょ？

いくら何でも、その頃と同じ位の体力っていうのは無理があると思う。
まぁ、やる前から無理とか、絶対に言えないけど……。
「シャーリーにも第二訓練所の方に来てほしいんだけど頼めるかな？　私もアサルトモードを使いこなせるように訓練したいから、シャーリーに黒龍の管理をお願いしたいんだけど……」
「大丈夫ですよー。むしろ、最初からそのつもりでした！」
「うん。ありがとう、シャーリー。――それじゃ、各自目的地まで移動開始！」
「「はい！」」
こうして僕は一人寂しくザフィーラの待つ第一訓練所へ向かったのだった。

☆

「はぁ……。今日も疲れたな……」
今日一日の訓練を終え、夕食も食べ終わった僕は、残りの体力を全て使い果たして自分のベッドにダイブした。
「お疲れ様～。今日も大変だったの、パパ？」
僕がベッドでくつろいでる隣で、何やらカバンの中に色々と詰め込んでるヴィヴィオが声をかけてきた。
ちらっとヴィヴィオの方へ視線を向けると、ヴィヴィオの隣で爆睡してるレオの姿が目に映ったので、どうやらレオは既に寝ているようだ。
「うーん……。大変だったと言うか、今日は体力作りメインの訓練内容だったから、いつもより体力的にハードではあったかなー」
ザフィーラの監督と言う名の監視の下、なのはの考えたハードな体力作りの訓練をしたんだから、当たり前と言えば当たり前なんだけど、今日のメニューは僕が六課に合流してから一番厳しかった。
そりゃ、疲れて当然ってもんだ。
「と言うか僕の事より、ヴィヴィオは何やってるの？　明日は祝日

だから学校も休みでしょ？」
「ん？　あぁ、これ？　これは明日無限書庫に行くから、そのための準備だよ」
「無限書庫？」
無限書庫ってあれだよね？
ユーノさんが司書長やってて、簡単に言えば大図書館みたいな所の事だよね？
なんでヴィヴィオがそんな所に行くんだろうか？
「うん。明日は八神司令に頼まれて、ちょっと元龍について調べるために無限書庫に行かなきゃなんだよ～」
「はやてに頼まれて？」
はやてが直々にヴィヴィオに頼んだって事は、そんなに大事な事なんだろうか？
僕には良く分からないんだけど、なんかヴィヴィオは無限書庫司書の資格を持ってるから、普通の人より無限書庫で資料を探すのは得意ならしいし。
「うん。なんかね、ユーノさん達が今忙しいから元龍について調べる余裕がないらしくて、ヴィヴィオも八神司令と一緒に無限書庫で調べてくる事になったの」
「そうなんだ。でも、明日はせっかくの休みだったのに、はやての手伝いなんかしてて良いの？」
「それは全然大丈夫だよ～。わりと本好きだし、ヴィヴィオだって事件解決の手助けしたいしね」
最近よく思うけど、我が娘ながらヴィヴィオは本当に良い子だよね。
こんな娘の未来を守るためなら、多少訓練がキツくても頑張ろうと思えてくる。
これが所謂親バカって奴なのかと思うと、ちょっと苦笑いが出てしまう。
ヴィヴィオみたいな子が、これからも笑って過ごせるように、僕も弱音なんか吐かずに頑張ろう。

僕はそんな事を思いながら、ゆっくりと夢の世界へと旅立って行ったのだった。

☆

とあるシルメディアンのアジト

「奴が動き出した」

いつものように思念体だらけの会議が始まって早々、クロウはボスの口からそんな報告を受けていた。

「このタイミングでか？　アイツはアンタの計画を知ってるんだろう？　それなのに、このタイミングで動き始めるのは早いんじゃないのか？」

「それでも奴は動き出した。これは紛れもない事実だ。そうだね、カエラ？」

ボスにカエラと呼ばれた少女が、クロウの背後から、つまり顔を隠した思念体ではなく、正真正銘の本人が姿を現していた。

「驚いたな……。まさか俺が背後を取られるなんてな……。しかも、こんな子ども2人にとは」

「子ども扱いするな。オレもカエラも、もー13だ。それに、オレはお前より強いぞ。クロウ」

カエラと呼ばれた少女の後ろから、強気な発言をしてくる少年。

ボスから名前を呼ばれていなかったが、クロウに気づかれずに、クロウの背後から現れた事から、この少年も随分な実力者である事をクロウは直感で感じていた。

「そいつは悪かったな。だが、あんまり大人を舐めるもんじゃないぞ。世間は広い。今までがどうであれ、俺もお前より弱いとは限らんだろう？」

「だったら、試してみるか？」

「いいや。俺はガキ相手に本気になるほど、子どもじゃないからな。それにアイツが動き出したんなら、仲間同士で争ってる場合じゃないしな」

クロウはそう言って、少年との話を強制的に終わらせて、ボスの思念体へと視線を向けた。
「それで？　アイツが動き出したってのが本当なら、目的はなんなんだ？」
「奴はクロウが風月を脱獄させる時に邪魔をしてきた。つまり、奴の目的は我々に元龍を渡さない事なんだろう」
「だったら、アイツの行く先に元龍……残りは水龍だけだから、水龍がいるって事か？」
「そうなるな」
ボスがそこまで言った瞬間、クロウは次に自分がするべき事がなんなのか瞬時に理解していた。
「なるほど。なら、俺はアイツが元龍を手に入れる前に、元龍を攫ってきたら良いわけだな」
「攫うよりも仲間に引き込む方が好ましいが……。まぁ、概ねその通りだ」
「了解した。なら、さっさと済ませよう。……で？　アイツは今どこにいるんだ？」
「それはカエラしか知らない。だから、今回はカエラと共に動いてもらうぞ、クロウ」
そう言われて、クロウがカエラの方に視線を向けると、カエラもクロウに視線を向けてコクリと頷いた。
「大丈夫。ジンの居場所なら、ワタシが知ってる」
「なら、さっさと行くとするか。……で？　こっちのガキの方は？」
「だからオレをガキ扱いするな！　オレにはシギルって名前があるんだ！　それに、カエラはオレの妹だ！　カエラを守るために、オレも付いて行くに決まってるだろ！」
シギルと名乗った少年に一瞬目を向けてから、クロウは確認のために再びボスの方へと視線を向けた。
「心配するな。シギルはカエラのナイトだ。そんじょそこらの魔道士では相手にもならんさ」
クロウは内心でため息を吐いた。

正直、シギルが強いかどうかは問題ではない。
子ども二人を連れて行くなんて、子守りを押し付けられた気分になる。
そもそも、これから行く先にはアイツ、土龍のジン・アラヘカトがいる場所なんだ。戦闘を避ける事はできないだろう。
そんな所に子ども二人を連れて行くなんて、クロウにはため息しか出ない事だった。
「全く……。なら、今回は俺とシギル、カエラの三人で向かえば良いのか？」
「いや。風月も暴れたがっていたからな。アイツも連れて行ってやれ」
クロウは今度こそ大きなため息を吐いていた。
また、めんどくさいのが増えたと。
「いいのか？　アイツを連れて行って、もし管理局と遭遇したら、俺達が扇を脱獄させた事がバレちまうぞ？」
「構わんよ。と言うより、ルディックのジ爺さんには既にバレてる。しかも、極秘で管理局内に裏切り者がいないかまで調べ始めてるよ」
「へぇー。思ってたより管理局も優秀なんだな。と言うか、そんなの調べられて、アンタ達は大丈夫なのか？」
クロウはボスと、ボスの右隣にいる思念体に向かって言った。
ハンナと違って、クロウはボスを含めて、ここにいる思念体の何人かの正体を知っており、それゆえの発言だった。
「お前が心配する事じゃない。それに、既に手は打ってある。他に何か言いたい事があるか？」
「いや、何も。アンタがそれで良いと言うなら、アンタの言う通り俺が心配する事じゃないさ」
「なら、さっさと二人と風月を連れて行け。アイツに元龍を取られると厄介だ」
「分かったよ。……ほんじゃ、ボスのお望み通りさっさと行くとするかね」
そう言って、クロウはシギルとカエラ、そして念話で呼び出した扇

風月を連れて、アジトを出発したのだった。

第十二話

「調査？」
なのは達が対黒龍用の訓練を初めてから一週間後。
僕らフォワード陣は再びはやてに呼ばれて、司令室に集まっていた。
「うん。皆も知ってのとおり、今私らには圧倒的に情報が足りてへん。せやからヴィヴィオに協力して無限書庫で元龍について調べてもらってたんやけど、そこでちょっと気になる事があってな」
「気になる事……ですか？」
「うん。なんでも、ヴィヴィオが見つけてくれた文献によると、この世界を作ったとされる元龍を統べる元龍の神として神龍ディアテオスっちゅうのがおったらしいねん」
「神龍……ですか？　それはその、なんと言うか……」
「胡散臭い？」
ティアナが思わずポロっと零した言葉に、はやてが笑いながら聞き返した。
「あ、いや、私は別にそう言う意味で言ったんじゃ……」
「かまへんよ～。私もティアナと一緒で、初めヴィヴィオから聞いた時は同じ反応したしな～。けど、これを見たらティアナも少しは考えが変わるんとちゃうか？」
はやてはそう言ってディスプレイを僕等に見せてきた。
そこには、なにやら文字の書いてある石版の写真と、
『氷の地にて7体の元龍の力が揃いし時、我は目覚める。
我が目覚めし時、世界は滅ぶであろう。
願わくば、我が目覚める事がない事を我は祈る……』
そう書いてある紙を撮った写真が写っていた。
「はやて、これはいったい……」
これがなんなのか分からず、僕が首を傾げていると、どうやらフェイトも同じような事を思っているようで、はやてに直接聞いていた。
「これか？　これはこの前の遺跡で発見された石版と、その石版の

文字を解読したもんや」
「解読って……。これ、私も見せてもらったけど、その時はベルカ時代よりも古い文字って事しか分からなかったよね？　どうやって解読したの？」
「ああ、実はこれを解読したんレオなんよ。なんでレオが読めたんかは不明やけど、遺跡の内部でハンナに脅されたレオが石版の文字を読んだって話をヴィヴィオから聞いて、この石版の文字をもう一度レオに見せて、読んでもらったんよ」
なるほど。
つまり、フェイトが調べた後、レオに読んでもらったからフェイトの知らない内に解読できてたってわけか。……って、あれ？　なんでベルカ時代よりも古い文字をレオが読めるんだろうか？
と言うか、確かレオって平仮名も読めなかったはずなのに、本当に読めたんだろうか？
「まぁ、確認のしようがないから、この解読が正しいかは分からへんけど、これが正しかった場合、さっき言うてた神龍の話も、絶対にありえへん話しではないと思わへんか？」
「なるほど。それなら確かにありえそうな話だね。〝氷の地にて7体の元龍の力が揃いし時、我は目覚める〟この我って言うのが、神龍の事だとしたら……。そして、これが神龍である可能性は充分にあると思う」
「フェイトちゃんも私と同じ考えって事は、神龍も存在すると思ってた方が良いかもしれへんね。仮におらんくても、私等の取り越し苦労で終わるわけやし」
なるほど。確かに、いないものだと思ってたのに、いざとなった時に実は存在しましたじゃ対処に遅れてしまうかもしれない。それなら、存在すると思ってた方が素早く動けるってもんだ。
「まぁ、そもそも明久君に会うまで、元龍の話もおとぎ話だと思ってたのに元龍は実在したわけだし、神龍だって実在してもおかしくはないね」
なのはがそう言った瞬間、いっせいに皆が僕の方を見て、なんか納

得したように顔をした。
いや、皆のその反応は僕的には全然納得できないんだけど？
「それじゃ、私達がする調査って神龍についなんですか？」
「いや。神龍については引き続きヴィヴィオに協力してもらって、私が無限書庫で調べてくる。皆にはアキ君、扇、クロウの他に元龍がおらへんか調査してほしいんよ」
「え？　アキたち以外の元龍を……ですか？」
スバルが聞き返した言葉に、はやては小さく頷いた。
「せや。レオが解読してくれた石版には〝７体の元龍の力が揃いし時〟ってある。つまり、神龍が目覚めるために７体分の元龍の力が必要になる。でも、今確認されてる元龍は、炎と雷の力を持ってるアキ君、風の力を持っとる扇、そして闇と光を持ってるクロウの合計５属性や。せやから、もし神龍が目覚めるなら水と土の元龍がおるはずや」
「つまり、シルメディアンより先に水と土の元龍を見つけるのが今回の調査の目的って事ですか？」
「さすがやな、ティアナ。その通りや。シルメディアンの一員であるハンナが、レオにわざわざ石版を読ませたっちゅ事は、シルメディアンはおそらく神龍を狙っとるんやと思う。神龍がどんな力を持ってるかは分からへんけど、強力な力を持っとるのは確かや。絶対にシルメディアンには渡したらあかん」
「だね。そもそも石版の通りなら、神龍が目覚めたら世界が滅んじゃうんでしょ？　だったら、シルメディアン云々の前に目覚めさせちゃダメだよ。神龍だって、目覚める事を望んでないみたいだし」
頭の良い組は、何やら難しい事を理解してるみたいだけど、僕には何の話をしてるのかさっぱり分からない。
そもそも、どうしてシルメディアンが神龍を狙ってるって分かるんだろうか？
「ねぇ、スバル。今の話理解できた？」
「んー……。大まかには分かった気がするけど、細かくは分かんない！」

自信満々にそう言ってのけたスバル。
自分以外にも理解できていない同士を見つけると何故か安心する。
「全く……。吉井もスバルも相変わらずね……。いい？　シルメディアンの一員であるハンナが、レオに石版を読ませたのは、石版に書かれている情報が欲しかったから。つまり、石版に書いてある神龍の情報が欲しかったから、レオに石版を無理にでも読ませたかったと隊長達は予想してるのよ」
「なるほど。シルメディアンが何をたくらんでるのかは知らないけど、おそらくシルメディアンは神龍を狙ってるから、絶対に奴等には神龍を渡したらダメって事ね」
「そ。神龍がどんな力を持ってるかは分からないけど、目覚めたら世界が滅ぶなんて物騒な事が書いてある以上、相当危険なはずよ。そんな危険なものを目覚めさせる、ましてや何を考えてるか分からない連中に渡すわけにはいかないでしょ？」
「当然だね！　……で、その話からなんで水と土の元龍の話になったの？」
僕がそう言った瞬間、皆は一斉に膝から崩れかけ、転びそうになっていた。
今回はさっきまでこっち側だったはずのスバルまで転びそうになっているのが、僕としてはなんだか納得がいかない。
「あ、あんたねぇ……。さっきまでの話、ちゃんと聞いてたの!?　神龍が目覚めるためには、七元龍の力が必要なのよ！　で、神龍を欲しがってるシルメディアンが本格的に動いてるって事は、まだ発見されていない水と土の元龍も既に目覚めてる可能性が高い。だから、敵より先に水と土の元龍を私達が発見して、保護しようって事！　分かった!?」
「つまり、早い話が水と土の元龍もどこかにいると思われるから、シルメディアンより先に見つけて保護しようってわけだね？」
「だからさっきからそう言ってるでしょうが……」
何やらティアナが疲れたとでも言いたげに頭を押さえている。
これは決して僕のせいではないと思いたい。

「ごめんね、ティアナ……。明久がバカで」
「ほんと、ごめんね……？」
フェイトとなのはが同時にティアナに謝りだした。
この光景、僕としては凄く不本意なんだけど……。
しかも、フェイトに関しては僕がバカでとまで言ったよね？
「いえ、いいんです……。お二人のせいじゃありませんし、吉井がバカなのは今に始まった事じゃありませんから……」
「「ほんと、苦労かけてごめんなさい……」」
またもや二人同時に謝るなのはとフェイト。
ほんと、不本意だ。
「ま、まぁ、アキ君の話はここらでいったん置いといて、そんなわけやから皆には水と土の元龍を探しに行ってもらいたいんやけど、ええかな？」
「あ、うん。それは構わないんだけど……」
「何の手掛かりもないんじゃ、どこをどう探せば良いのかも分からないよ？」
「その辺りは大丈夫。ちゃんと無限書庫で調べてある。いくつか候補地はあるんやけど、まずは有力な候補地が2カ所あるから、水の元龍がおりそうな星にはライトニング。土の元龍がおりそうな星にはスターズにそれぞれ行ってもらおうと思ってる」
「そっか。なら、問題ないね。スターズはオッケーだよ」
「うん。ライトニングも大丈夫。問題なし」
切り替えが早いと言うか、何というか、なのはもフェイトもさっきまでの出来事が何もなかったかのように両チームの隊長として、ビシッとしていた。
何度見ても、こう言う所は流石だと思う。
「うん。では、これよりスターズ、ライトニング両チームは、それぞれ隊長の指示に従って現場入りして下さい。目的地については、それぞれの隊長に送ります。それでは、解散！」
「「「はい！」」」
こうして、なのは率いるスターズ隊は土龍グランマークの子孫を、

フェイト率いる僕達ライトニング隊は水龍アクエリアスの子孫を探す任務に出発したのだった。

☆

「で？　その土龍のジンって奴はどこにいるんだ？　ここに来てから三日も経ってるのに全然見つからねぇじゃねぇか。本当にこの星に元龍の子孫がいるのか？」

明久達よりも早く、水龍を探しにきていたクロウ達一向。

水龍がいるとされていた惑星名称アイネにて、まだ水龍も土龍も見つけられない事に風月が苛立ちの声を上げた。

「黙れ、風月。イラついてるのはお前だけじゃない。それに、俺達が探しているのはジンじゃなくて水龍の方だ。出来る事なら、ジンとは遭遇しない方が良い」

「なんだよ、ビビってんのか？　水龍と一緒にジンとかいう奴も一緒に連れて帰れば良いじゃねぇか。なんなら、ジンとか言うのは俺一人で捕まえてやるよ」

「ジンを甘く見るな。言っておくが、ジンはお前が負けた吉井明久より強いぞ」

「黙れ。俺はまだ生きてる。つまり、まだ決着はついてねんだよ。俺は別に負けたわけじゃねぇ」

「牢屋にブチ込まれた段階で負けだろう。運よく生き残っただけで大口叩くなよ」

クロウがそう言った瞬間、風月は自分のデバイスである大鎌をクロウの首に向かって振るったのだが

「舐めてるのか？　そんな不意打ちが成功するわけないだろう？」

クロウは光でできた盾を首回りに作りだし、風月の攻撃を完璧に防いでいた。

「はは。いいね。やっぱり、お前も強そうだ。土龍と水龍のどっちかが見つかるまでの間、お前で退屈しのぎするのも悪くねぇな」

「止めとけ。お前に取っては退屈しのぎでも、俺に取っては殺さな

いように手加減しなきゃならん分ストレスでしかない」
「どっちが手加減する側だって？　前から思ってたが、お前の自分の方が強いと思ってる態度が気に入らねぇ。ここらで、どっちの方が強いか、白黒させようじゃねぇか」
風月の言葉を聞き、クロウは一瞬悩んだ末深いため息を一つ零した後、両手に自分で作り出した光と闇の剣を持ち、風月に向き合った。
「お前がそこまで言うならいいだろう。ただし、俺が勝ったら二度と舐めた口を利くな。そして俺の命令に従え。その条件でなら相手してやる」
「いいぜ。けど、お前が負けたら今の条件は全部お前にも当てはめてもらうぜ」
「いいだろう。万が一、俺がお前に負けるような事があれば、お前の命令に絶対遵守してやる」
「へっ。契約成立だな。……おい、シギル！　立会い人やれ！」
風月はカエラの側から離れず、二人の言い合いに我関せずでいたシギルに声をかけた。
「は？　嫌だよ。なんでオレがアンタらの言う事聞かないとダメなんだよ？　オレはカエラの護衛なんだから、そんなのアンタらで勝手にやってろよ」
「……おい、こら、ガキのくせに調子のんなよ？　クロウをボコる前に、まずはお前からボコボコにしてやろうか？」
「は？　やれるもんならやってみろよ。返り討ちにしてやる」
２人のやろ取りを見て、クロウは深いため息を零しながら頭を抱えた。
どうして、今の今まで自分と揉めていた奴が、同時に子どもとも揉めるのか。本当に面倒臭いと。
「……もういい。シギルはカエラの側にいろ。別に立ち合い人がいなくても勝負はできるし、どうせ俺は不正なんぞしないし、仮にお前に不正されようが勝つのは俺だから関係ない。そんな面倒な事してないで、さっさと始めるぞ」
「どいつもこいつも……。いいだろう。あえて、その挑発に乗って

やる」
「御託は良い。さっさとかかってこい」
クロウが挑発し、それに乗っかる形で風月が武器を構える。
そして、お互いに武器を交えようとした、その瞬間だった。
「見つけた」
今まで完全に我関せずだったカエラがぽつりとそう呟いた。
「見つけたって……。水龍をか？　土龍をか？」
「両方。でも、雷炎龍も一緒に見つけた」
「なんだと!?　雷炎龍もここに来てるのか!?」
「いる。でも、ついさっき着いたばっかりみたいだから、今はほっといても大丈夫。それより、ジンが水龍と既に接触してる」
カエラがそう言った瞬間、クロウとシギルの纏う空気が変わった。
「なら吉井明久は放置する。カエラジンのいる所まで案内しろ。シギルはカエラを守れ。風月、この勝負は帰ってからだ。文句は認めん」
「分かった」
「元々オレの仕事はカエラの護衛だ。言われるまでもねぇ」
「……ちっ。しゃーねぇな。さすがに雷炎龍が近くにいる時にお前の相手をするのはキツイ……。今回だけは言う事を聞いてやる。そんかわし、土龍とは俺に戦わせろ」
全員とりあえず言う事を聞く事に納得した事にクロウは少し安堵した。
「よし。なら行くぞ。クロウの要望に関しても、可能な限り聞いてやる」
こうして、クロウ達一行は明久達がアイネに着くのとほど同時に土龍と水龍の所へ向かったのだった。

☆

「ようやく見つけた……」
土龍の子孫であるジンは、アイネに来てから数日。

ようやく水龍の子孫と思わしき少女を見つける事に成功していた。
「……オジサン誰？」
少女はジンを見て、不思議そうに首をかしげる。
「ああ、すまない。俺……いや、ボクはジン。ジン・アラヘカトだ。ずっと君を探していたんだ」
「私を探してた？　オジサン、私が怖くないの？」
ジンの言葉を聞き、少女はますます不思議そうな顔をジンに向けた。
「怖い？　どうしてそうなるんだい？」
「だって、私は元龍アクエリアスの子孫なんだよ？　元龍は危険だからって、皆私の事怖がってるから……」
基本的に元龍の話はおとぎ話だとされており、どこの世界でも自分が元龍の子孫だと言っても信じてもらえないのが普通だ。
しかし、この少女は普通とは違い、元龍の子孫として恐れられてきた。
それを思うと、ジンは少女に同情すると同時に、純粋に少女を助けたいと言う気持ちにさせられた。
「ボクは怖いとは思わないよ。だって、僕も元龍の子孫だからね」
「え？　オジサンも元龍の子孫なの？」
「ああ。言ってしまえば君の仲間だ。だから、怖いとは思わない。それに、さっきも言ったけど、ボクは君を探していたんだ。君を助けたい。この星とはお別れしないといけないけど、ボクと一緒に来てくれないか？」
「……なにが目的？」
ジンの言葉を鵜呑みにはせず、少し警戒するように少女はジンの目をじっと見つめた。
その目を見て、ジンは「この子に嘘を吐いてはいけない。包み隠さず全てを話すべきだ」そう感じとり、少女と目線を合わせるように屈み、少女に向かって真剣に口を開いた。
「君を助けたいというのは本当だ。それは、この星の人達からじゃなく、君の力を利用しようとしている者達が君を探している。ソイツ

等から、ボクは君を守りたいんだ」
少女はジンの言葉を聞いた後じっとジンの目を見つめ、ジンもその間少女の目から一切目をそらさず、二人は無言で見つめ合っていた。
そして、その数十秒後。
「分かった。オジサンについて行く」
少女はあっさりとジンについて行く事を決断した。
「え？　良いの？　本当に？」
あまりにも早い決断に、誘ったジンの方が驚き、思わず少女に聞き返していた。
「うん。私ね、生まれた時から人が嘘ついてるかどうか分かるの。だから、オジサンが嘘ついてないのは分かったし、私を助けたいって言ってくれたから、私はオジサンを信じてどこにでもついて行くって決めたの。むしろ、オジサンがダメって言ってもついて行くよ？」
「嘘が分かる？」
「うん。なんかね、嘘を吐いてる人って変な感じがするの。なんか、モヤモヤってした感じのものが見えるんだ」
ジンは見えると言う言葉を聞いてすぐ、少女の言ってる事が嘘ではないように感じた。
水龍アクエリアスは水の元龍。当然、水を扱うのは得意だ。
そして、人間は体の大半が水分でできている。
もしかしたら、その影響でアクエリアスの力を持つ少女には元龍の能力の一つとして、他人の嘘が見破れるのかもしれない。
そう感じ取っていた。
「そっか。まぁ、なんにしても、これからよろしく頼むよ。えっと……」
「私はクララ・ロックベルだよ。クララって呼んで」
「そうか。じゃあ、ボクの事もジンと呼んでくれ。オジサン呼ばわりは少し傷つく」
「うん！　じゃあ、ジンさんで！」
クララと名乗った少女は、ジンと出会ってから初めて笑顔を見せた。

笑うと可愛いな。なんて事を考えて、ジンもクララに吊られて笑みがこぼれ出る。
実はこれが、ジンに取って数週間ぶりの笑みだったのだが、クララがその事を知る由もなかった。
「それじゃ、旅立つ前におばあさんに話をしたいんだけど……」
このままだとジンはクララを無断で連れて行った誘拐犯になってしまう。
実際問題、ジンにとっては別に誘拐犯扱いされても困る事は何もないが、クララが突然いなくなれば身内は必ず心配するはずだ。
ゆえにジンはクララのおばあちゃんに挨拶と、クララを連れて行く事を説得しようとしたのだが
「おばあちゃんいないよ？　去年亡くなっちゃたから……」
「え……。なんか、その、ごめん……」
良く考えればクララに身内がいたら、クララが即答で自分に付いてくると言うはずがない。
もう少し深く考えれば分かりそうな事だっただけに、ジンはクララに対して申し訳ない思いになった。
「別にいいよ。その時はいっぱい泣いたけど、おばあちゃんはずっとクララの事見ててくれるって、死んじゃう前に言ってから寂しくないし、これからはジンさんが一緒にいてくれるんでしょ？」
屈託のない笑顔。
ジンは、この笑顔を見た瞬間、絶対にクララを守ろうと固く決意した。
「ああ。約束する。これからは僕がクララを悪い奴らから守る。だから、一緒にいよう」
「うん！」
なんだかプロポーズみたいだな……。何てことを思い、ジンは少し気恥ずかしくなる。
「さ、さて！　それじゃ行こうか！」
まだ幼い少女であるクララに向かってプロポーズみたいな事をした事も、それで変に気恥ずかしくなってしまった事も打ち消すかのよ

うに、ジン普段よりも少しテンションを高くしてそう言った。
まさにその時だった。
「させるか！」
「なっ!?　しまっ……」
クロウ、風月、そしていつでもカエラを守れるようにシギルとカエラは二人組になって、ジンとクララを取り囲むように空から現れたのだった。